

われ死なばいかなる人も皆共に

雑行すて、彌陀をたのめよ

蓮月尼

小名誠子、父を大田垣傳右衛門光古といふ。京都智恵院の廣岡侍なり。彦根藩士近藤某の子を養ふて誠子に妻はせ、男女子四人を産む。皆早世して夫亦歿す。是に於て誠子尼と爲りて蓮月と號す。時に年三十三、千種有功の門に入り、和歌を學び、光古歿後陶器を製して自詠の歌を描き、以て鬻ぐ。世人之を珍重す。詠歌を請ふの繁なるを厭ひ、家居を定めず。都人呼て屋越の蓮月といふ。其詠「宿貸さぬ人のつらさを情にて朧月夜の花の下臥」は人口に膾炙す。明治八年十二月十日逝く。年八十五。辭世に曰く、

願くば後の蓮の花の上に

くもらぬ月を見るよしもがな

曾我時致

小字宮王、伊東祐親の孫なり。父河津祐泰、從祖父工藤祐經の爲めに殺さる。時に宮王三歳、後ち母の曾我祐信に再醮するに及びて、曾我氏を冒す。年十七、兄祐成と共に北條時政に造りて、哀情を訴ふ。時政其志を壯なりとし、爲めに冠を加へ、名を時致と命じ、曾我五郎と稱す。建久四年祐經頼朝の富士野に獵するに從ふ。兄弟喜びて曰く、天なりと。計を定めて富士野に往き、夜を警する者の爲れして祐經の營に詣り、終に祐經を撃ちて父の讐を報す。祐成は仁田忠常の爲めに殺され、時宗は小舎人五郎丸の爲めに擒にせらる。翌日頼朝幕中に座し、狩野宗茂等をして祐經を殺す所以を詰問せしむ。時致目を瞞して曰く、祖父入道歿するの後、子孫沈淪して親近を得ずと雖も、何ぞ汝輩に就て狀を對へんと。頼朝其言を壯なりとして、親ら之を問ふ。時致曰く、今日にして復讐の志を遂げたり。幕府を犯すは一たび諷を賜りて自殺せんと欲するなり。夫れ祐經は私の讐にして、君の寵臣なり。寂心入道は君の讐にして、私の祖父なり。君は吾仇を寵して吾祖を仇とす、能く憾なからんやと。意氣猛烈、聽者辣動す。頼朝其膽氣を愛し、死を宥めんと欲す。祐經の子犬房丸の哀訴に依り、遂に之を斬る。時に年二十。辭世なりと傳へらる歌に、

秩父山おろす嵐のはげしきに

枝ちりはてゝのちいかにせん

存覺

名は光玄、父は覺如、宗昭の長男、母は播磨の局、衣服寺敬佛の女、伯耆守新羅の猶子となる。應安六年二月二十七日寂す。年八十四。遺囑、及び歌に曰く、

念彌陀佛 今詣西方 形名頓絕 生死永亡

○

今ははやひとよの夢となりにけり

ゆきゝあまたのかりのやどく

祖圓

信州の人。規庵と號す。幼にして相の淨妙寺に投じ、出家して佛光に瑞鹿寺に依る。佛光之れを器として内記に侍せしむ。弘安九年光寂す。祖圓禪を卷て洛部に入る。佛心に慧日寺に謁し、已にして心龍山に移る。初め佛心の心龍山を領する、宮殿樓臺未だ梵製ならず、祖圓に及びて一新す。大殿法堂堂庫院山門檀林、凡そ叢林の法に有るべき者皆異體にして成る。正和二年四月二日寂す。辭世の喝に曰く、

一躍々翫黃鶴樓 一拳々例鸚鵡州
臨行一著元無別 黃鶴樓前鸚鵡州

祖輝

獨照と號す。京都の人なり。初め陸奥の國主の請を受けて松島寺に住し、次に筑前の聖福寺、相模の淨妙寺、洛の建仁寺に還り、最後に建長寺に陞る。歴るところの四大刹、咸く法令を整ふ。能事之に終りて、元弘五年三月廿四日喝を説て即時に脱去す。勅して眞覺禪師と謚す。其偈に曰く、

生死如幻 去年如電 生死去來 打爲一片

祖元

無學と稱す。宋國慶元府の人なり。甫めて六歳、家塾に就く。記聞歷酬群兒に類脱す。性沈重偉雄、十三にして父を喪ひ、髪を薙り受具す。丙子の歳兵燹境を歴し、衆を率て逃竄す。祖元獨り堂裡に兀座す。庵僧將に刃を頸に加へんとす。祖元動かす。一偈を述べて曰く、「乾坤無地卓孤筇、喜得人空法亦空。珍重大元三尺劍、電光影裡斬春風」と。郡慶感悔し、禮を作して去る。己卯の歳、我建長寺席を處うす。平時、宗疏帶を具へ、海に航して名宿を聘す。祖元之に應じ、六月大宰府に着く。即ち弘安二年なり。

時宗弟子の禮を執り、待遇日に渥し。五年冬鎌倉圓覺寺成る。祖元に命じ、開山第一の祖となす。九年八月疾を示す。九月三日親ら遺書を書して、大守及び諸方に別る。亡歲數通、亥時に衣を更め、端坐して偈を書し、筆を置て逝く。年六十一。其偈に曰く、

諸佛凡夫同是幻 若求實相眼中埃
老僧舍利包天地 莫向空山撥冷灰

祖嚴

字は芳庵、攝津の人なり。幼にして佛門に入り、越前願成寺の開山たり。應永二十五年四月二十三日寂す。遺偈に曰く、

本離死活 今絶去來 不住正偏 豈染塵埃

園女

勢州松坂の産(勢州山田の人とも云ふ) 祠官渡會氏の女なり。備前の人、岡西惟中の妻となり、難波に住す。元祿二年芭蕉の門に入る。夫歿して江戸に來り、深川に居し、醫となり、眼科を以て生業とす。性風雅にして世事に拘はらず、後禪に參じ、薙髮して智鏡と云ふ。然も猶頂上に十根許りの髮を遺せ

り。人其理由を問はんと欲すれども、園女の威風端然たるを以て問ふに由なかりしと云ふ。享保十一年四月廿日歿す。年六十四。辭世に、

秋の月春の曙見しそらは

夢か現か南無阿彌陀佛

宗忽

京都大徳寺の住僧なり。字は天倫、不可得叟と號す。年三十。嘆じて曰く、世尊道を成し、孔子而立す。我今不成不立、正に是れ有氣の死人なりと。是に於て孜孜坐究すること數年、元祿二年將軍綱吉の命に依り、江戸東海寺に住す。九年住職を辭して瓢然泉の菴巢に偕居す。泉の民喜び遊へて曰く、憶はざりき再び古佛を瞻禮せんとはと。道を問ふ者虚日なし。夏五月紫野に上りて祖塔を禮し、途中病に罹る、門徒を聚會して後事を屬し、遺偈を書し、鐘を鳴らし、衆と兵に昆盧の法號を稱すること數百聲端坐して化す。年七十二。偈に曰く、

生亦不可得 死亦不可得
喚爲不可得 不可得不可得

宗祇

連歌の名家なり。姓は三善、自然齋、見外齋、又種玉庵と號す。少にして律僧となり、東常緑に師事し、和歌を修め、遂に連歌を以て天下第一と稱せらる。性寄旅を好み、足跡天下に遍れし。傳へ云ふ、宗祇は香を聞くことを愛し、鬚髯美なりと。蓋し髯の美なるにあらず、其の能く香氣を宿するなり、且て山行し、賊の迫及する所と爲り、其髯を得んと強らる。宗祇其故を問ふ。賊曰く、以て拂子を作り、京に鬻がんとす。宗祇慨然として賦して曰く、我がために拂子ばかりは免せかし塵の浮世をすてはつるまで、賊感悟悔謝す。文龜二年七月晦日、箱根湯本の逆旅に死す。病革まる時、猶其徒と連歌を賦し、生死に關せざるものゝ如しと云ふ。時に年八十二。辭世に曰く、

はかなしや鶴の林の煙にも

立ちおくれぬる身こそ恨むれ

世をばふる更に時雨のやどりかな

宗鳳

禪僧なり。在天と號す。尾州の人。十四歳にして州の興雲寺に出家す。具戒の後、光國に全久寺に參す、未だ歸入する所あらず、往て萬年泰翁に謁す。翁之を許可す。後ち醫王山に就きて大善寺を創し、鼻祖と爲る。元龜三年正月二十三日化す。年八十三。遺偈に曰く、

世尊七十九 宗鳳八十三 撈倒無影樹 依舊綠豔鬚

宗心

禪僧なり。祖道と稱す。越後の人。初め弘濟に播州龍門寺に見え、親炙數年、頗る悟入あり。次に月舟に加州大乗寺に參す。月舟宗心を擧げ、衆の首位に置き、密に印記を授く。後ち瀧州の寶鏡山に住す。天和癸亥八月二十五日興福寺に卒す。年四十六。遺偈に曰く、

從來不昧鏡峯巔 體用齊彰接滿天
雖我住山麝鈿斧 無邊風月伴安禪

宗規

字は月堂、俗姓宗氏、太宰府の人なり。嘉元の初京の萬壽寺に住し、正和五年歸國して石城に菴居し、後ち崇福寺に在ること十餘年、康安元年九月二十七日石城に寂す。年七十七。遺偈に曰く、

脫身一路 無古來今 朝々日上 夜々月沈

宗 築

俗姓武藤、大愚と號す。美濃の人なり。南泉寺の一世と爲り、寛永三年勅を奉じて妙心寺に出世す。後ち播州法幢寺を中興し、越前大安寺に寂す。時に正保九年七月十四日、年八十五。遺偈に曰く、

西天的子 東海崑崙 平生受用 不二法門

宗 熙

濃州鶴沼の人。幼にして出家し、京都妙心寺に入り、晩年龍安寺に住す。壽八十四。年代詳かならず。遺偈に曰く、

遮莫人呼作狂人 佛法元來不掛唇

猫日必歸々亦好 高々峰頭頂金鱗

宗 令

高僧なり。字は大徹。大隅の人。弱冠出家して戒を納る。後ち遍く叢席に陪するも、杳として悟入するところなし。時に岷山和尚、法を總持寺に開き、學侶を引接するを聞き、千里を遠しとせず、往て其室に謁し、忽ち會するところあり、遂に悟入を得たり。將軍義滿其德望を聞き、大に之を寵す。越中の檀信、寺を新川郡に建て、宗令を請じて之を主とす。眼目山立川寺是なり。後ち攝津の檀請を受け、護國寺を開き、宗令を奉じて開山祖と爲す。應永十五年正月二十五日寂す。年七十八。遺偈に曰く、

生死無常人不識 從前佛祖不能及

頭長三尺更是誰 萬仞峰頭獨足立

聰 宗

禪僧なり。字は實翁。久しく福山の葦航禪師に侍す。南遊して元に入り、秀筆輪に工なり。元の天子詔して漫りに書することなからしむ。歸朝するに及び、關西に遊び、風光を賞し、素懷を述ぶ。貞治年間長福寺を開く、學者來歸しく宗要を請益す。晩年福山の智庵に休居し、應安四年三月二十七日寂す。遺偈に曰く、

末後の一句、佛祖知らず、四海を掀翻し、

五須彌を踢倒す。

曾呂利新左衛門

和泉大島郡の人。本氏は杉本、初の名は甚右衛門、剃髪して宗祐といふ。其曾呂利と稱するは、刀鞘を作るに巧なるを以てなりと云ふ。慧敏にして和歌を善くし、家に礪石なきも髮如たり。時に豊太閤に寵せられ、之れに仕ふる三十餘年、滑稽戯言を以て常とす。新左衛門危篤なり、秀吉人をして其の欲する所を問はしむ。答へて曰く、無し。倘し宗族所親に泉下に寄書あらば、片信なりと雖も臣能く達せんと又將に死せんとする時、秀吉の來りて死後の願を問ふや、左の狂歌を吟じて瞑せり。時に慶長八年九月二十二日。

御威光で三千世界手に入らば

極樂淨土我にたまはれ

鶴賀若狹掾

聲曲淨瑠璃に堪能なり。宮古路加賀大夫の門下にして、其名最も著る。後ち薙髮して鶴翁と云ふ。天明六年三月二十四日歿す。年七十。晩年に及び狂歌を好み、狂名を大木戸黒牛と云ふ。辭世あり、生てゐる内はなにかと神佛

ひじりもいかい世話でござつた

鶴澤文藏 四世

通稱成川清吉。淨瑠璃三昧線引として妙腕の聞えあり。性來大酒の癖あり、老境に入りて中風症にかかり、明治三十四年二月九日歿す。年六十二。辭世に曰く、

世を去りて無量壽得たり今日の旅

通 徹

高僧なり。字は清溪、天遊と號す。姓は三浦、相模の人、幼にして出家し、寒潭に就て戒に入る。壯歳元に渡り、歴遊三十餘年、歸朝して嵯峨の天龍寺に依り、甲斐の淨居寺に出世す。勅ありて南禪寺を管し、足利義滿より紫衣を贈らる。後ち丹波の常照寺に在り、至徳二年十一月四日遷化す。年八十六。遺命に依り、遺骨を大堰川に投す。遺偈に曰く、

五彩畫虚空 空何有形客 虚空乃萬象 萬象乃虚空

筒井定次

幼名四郎、筒井順國の子なり。天正十三年城勢二州の田七萬石を加へられ、上野に居城し、終に十二萬石を領す。徳川氏に従ひ、岐阜を攻めて之を抜き、關原の戦ひ、大に功あり。慶長十三年酒色に耽り、駿人権を事にす。遂に伊豫に流され、元和元年三月死を賜ふ。辭世に曰く、

世の人の口にはかゝる露の身の

消えては何の咎もあらしな

根岸涼宇

俳人なり。通稱孫兵衛、名は保固、累代武州青梅の豪農なり。俳諧を好み、建部涼翁の門に入り、涼宇と號し、吸露庵と稱す。名聲遠近に高く、安永年間二條家の台閣に達し、花の下の榮稱を賜はりたり。當時關左の俳諧師、未だ花の下の號を以て宗匠たるものなし。實に涼宇を以て嚆矢とす。寛政六年十一月五日、左の辭世を残し下世す。門人及び遠近の風士追悼の吟詠を集め、辭世の句に因り、千鳥集と表題す。

曉の浪に別るゝ千鳥哉

鼠小僧

名は次郎吉と云ふ。世人誤りて義賊と爲し、其名高し。人と爲り輕捷にして軀甚だ小なり。是鼠小僧の名を得たる所以なり。常に盗を爲すに大小名の邸第に入り、曾く農商の家に入らず。天保三年八月十九日刑に處せらる。年三十六。東京兩國回向院に碑あり。辭世の歌あり、

天が下古き例しはしら浪の

身にぞ鼠と現はれにけり

並河誠所

五一郎と稱す。京都の人。初め仁齋に學ぶ。天氏之兄なり。元文三年歿す。年七十一。伊豆三島に居を構へり。町の北に鐘懸松あり。北條氏割據の時、駿甲の入寇に備へ、警報の用として鐘を懸けたる遺跡あり。其地眺望絶佳なり。五一郎之を愛し、死に臨みて松樹の下に葬られん事を望む。因て文公家禮を以て此に儒葬す。五一郎は同所を以て名所睡森ならんと推考せしなり。今や松樹枯槁し去りて、只並河五一居士の墓あるのみ。辭世に曰く、

露の身の消えなむ跡と結び置きて

永き眠りの森の下草

並木五瓶

演劇作者なり。大阪の人。通稱吾八。並木正三の門人、明和中江戸に下り、始めて踊り舞臺の工夫を爲す。文化五年二月二日歿す。年六十三。辭世二首あり、

泡雪やげにさまぐの夢の果

○

梅はさく我はちりゆくきさらぎや

中島二葉

俳諧師なり。貞宣の子。歿後詳ならず。辭世に曰く、

死ぬ迄は生るはずなり千々の春

中島木鷄

字は永胤。通稱三郎助。木鷄は其號。世々下田奉行の輿力なり。下田は東海の要鎮と爲す。木鷄以爲

らく、寇を防ぐの要は火技に若くは莫しと。因て和蘭學を修め、火技を研究し、遂に議を建て、職を
下田に築き、巨砲數十門を置き、以て外寇に備ふ。幾ばくもなく、米利堅國の使臣來りて通信を求む。
沿海騒然たり。木鷄職事を以て之に應接す。稍々機宜に申る。人其の膽識に服す。嘉永八年軍艦教授に
補せられ、尋て軍艦頭取に陞る。戊辰伏見に變起り、王師東に下る。將軍慶喜群下に令して、敢て命に
抗せざらしめ、以て命を待たしむ。征夷總督有栖川親王、令して兵艦を收む。木鷄命を奉ぜず、榎本武
揚等と謀りて回陽、回天諸艦を率ゐ、東奥に走る。會津降る。尋て函館に航し、官軍と戦ひて之を敗り、
兵威大に振ふ。既にして、官軍大に集り、水陸來り攻む。衆寡敵せず、武揚等退きて五稜廓を守る。
木鷄亦た千代岡の砦を保つて力戦し、僊屍相望む。武揚等遂に降る。木鷄獨り肯せずして曰く、木鷄は
幕府通達の臣なり、假りに一死を宥さるゝも、將た何の面目ありて人に見えんやと、明治二年五月十五
日、天未だ明けず、砲聲大に震ふ。皆曰く、官軍逼ると、木鷄躍起して敵を燃し、轟然一發十餘人を殺
し、二子と劍を手にして敵陣を冒し、力闘して死す。年四十九。木鷄殿嚴毅方正、妄りに言笑せず。然れ
ども風流灑落、好みて和歌を賦す。其北に走るや、書を親族に遺り、托するに後事を以てし、紙尾に辭
世を書して曰く、

嵐ふく夕の花ぞ目出度かる

散らで過ぐべき世にしあらねば

中島米華

豊後の儒者なり。名は大養、字は子玉。昌平豊に學び、佐伯藩に仕ふ。天保甲午歿す。年三十四。日本新樂府、愛琴堂集等の著あり。辭世に曰く、

高情自與世人違 我是南豊一布衣

三十六鱗尚欲二 今朝天上化龍飛

三月十五日に逝くべけれ

閻魔も花を見にいたる留守

中村歌右衛門 三代目

梅玉と號す。初代の實子なり。俳名芝翫、別號を百戲園と曰ふ。俗稱市兵衛。狂言作者金澤龍玉是なり。幼名を加賀屋福之助と云ふ。古今無類總藝頭の評を得たり。大阪道頓堀に家を構へて、一家の男女三十餘人、其頃の談に、高麗橋の大丸か、中村梅玉かと云ひしとぞ。一ヶ年の雜費三百餘兩と傳へり。

文化二十年三月江戸に下り、評判益々揚り、近世稀代の名人と稱せらる。天保九年七月十三日歿す。年六十一。辭世に、

嗚呼名殘惜しや此世の別れ道

妙法蓮華けふの旅立

中村歌右衛門 四代目

藝名歌雀、歌右衛門と云ふ。家名を成駒屋と稱す、蓋し三代目の龍玉を一轉して、龍玉に象どりたる稱なり。幼名吉太郎、後龜三郎と改む。江戸下谷孔雀茶屋の子なり。天保七年四代目相續して、歌右衛門と爲り、座頭にすむ。嘉永五年大阪中の座興行中、病に罹り、二月十七日歿す。年五十七。辭世に、

時ならぬ薫りはうせて梅の散る

中村敲石

武州の人。太左衛門と呼ぶ。匍匐庵と稱し、俳歌連歌を能くす、天明八年七月歿す。辭世の句に、ちぎりおく松や幾とせわかみどり

中山信名

常州の人。初の名は文幹、平四郎と稱し、柳州と號す。幼にして強記、太平記を暗誦して一字を誤らす。人々呼びて太平記童といふ。磊落にして細行を修めず、得る所の俸祿は悉く以て酒に換ふ。常陸編年、東極雜記等、著書頗る多し。左の辭世の如き、詞短かしと雖も、氣象の豪放なる以て想ふべし。

酒も飲み浮かれ女もみつ文もみつ

家もおこしつ世にうらみなし

長島耳谷

俳人なり。沽州の門人。享保十三年歿す。辭世の句あり。

何をとり舟とも見えず初時雨

長野主膳

佐幕家なり。名は義言、初め主馬と稱す。彦根侯に仕ふ。桃の舎と號す。伊勢飯南郡瀧野村に生ると云ふ。妻織亦た同村の人なり。共に和歌に通じ、藩主井伊直弼の知る所となり。遂に擯用せらる。安政

四年關東の命を受けて京に遊び、九條尙忠の臣島田正辰と交はり、相約して公武の間に周旋し、開港の勅許を得て、幕府の倒滅を防がんと謀る。文久二年七月正辰浪士の爲めに殺さるゝと聞き、曰く、左近が爲す所は皆余が勤むる所なり、余の罪免るゝべからずと。京都を遁れて彦根に歸り、幼侯に勤めて己の信する人木保庵原等を擧て藩政を總べしむ。而して自ら其權を握るなり。時に時世一變し、加ふるに、藩中亦た主膳を惡むものあり、是歲八月二十四日禁錮に處せられ、二十七日遽かに死に處せらる。時に年四十八。古今集妻鏡、小倉百首妻鏡等の著書あり、辭世に曰く、

飛鳥川きのふの淵はけふの瀬と

かはるならひを我身にぞ見る

永井雅樂

長州の志士。名は隆尙、藩命を奉じて京都に使す。自ら開國を是とするを以て、命を矯めて開國の策を中山大納言に呈す。時に攘夷の説盛に行はれ、雅樂を謀る者多し。雅樂其の説の行はれざるを知り、幕府に投ず。藩之れを捕へ、文久三年二月五日(或曰元治元年正月七日)自殺せしむ。辭世に曰く、

欲報君恩業未央 自差四十五年狂

即今成佛非予意 願帥天魔補國光

○
今さらは何を言はん世々を経し

○
君のめぐみにむくふ身なれば

君のため捨るいのちはをしからで

たゞおもはるゝ國の行くする

永山一雄

神風連の一人なり。名は正良。着實にして膽力あり。事敗れて家に歸り、寢に就き、肝聲雷の如し。翌味爽颯起、沐浴衣を更へて神前に膜拜し、從容自刃す。時に年二十六。辭世に曰く、
身をすてゝすめらみくにのみためにと

しこのるみしらうちはらひつゝ

檜崎楯雄

神風連の一人なり。鶴田久次郎の二男にして、兄檜崎晴雄の養子なり。事敗れて柿原村鳴岩に逃る。其自刃するに先ち、着衣の羽織を脱し、其裏地に「たらしれのうみし小松も年をへてすめらみくにのみたてとぞなる」。母上に上ると書し、更に左の辭世を吟じ、從容屠腹す。年二十六。

真心をそめつくしけむもみち葉と

ともにちりゆく大丈夫われは

檜崎彌八郎

諱は清義。長州藩士なり。文久二年三月三條寛美詔を奉じ、關東に使用するや、彌八郎之に隨從し、彌の諮詢に答ふ。翌年攘夷の詔下るに及び、國に歸り、三田尻沿岸防禦の參謀と爲り、元治元年釐下の變報到るや、彌八郎自ら咎を引き、免職を乞ふ。允されず。黨議起るに及び、俄かに野山の獄に投ぜられ、十二月十九日斬に處せらる。年二十八。明治二十年正四位を贈らる。辭世に曰く、

日出之國事義方 不飢不凍送星霜

今宵一死酬明聖 二十八年更覺長

南英謙宗

禪僧なり。姓は藤原。藤州の人、八歳にして下髪し、十九にして遊方す。然も威な契はず。後、後醍醐天皇の御代、越後の耕雲寺に開くと聞き、往て依止すること十三年、疑國氷解し、印可を受け、辭して備州の牛頭山に抵り、庵を立て、種月と稱す。房州の大守甚だ歸仰し、會津に天寧寺を創し、之を聘す。爾來作州の西來寺、備中の常照寺、越後の洞福寺に歴住し、法道大に振ふ。寛正元年五月十九日寂す。年七十四。

一片祖翁閑田地 耕雲種月已三年
功成身退是今日 攬撥犁鋤不上肩

那須重民

土佐藩士。本姓濱田氏、幼名虎吉、後信吾と改む。容貌魁偉、臂力あり、性豪宕にして武を好み、書を能くす。常に尊攘の大義を唱へ、久坂玄瑞に頼り、長藩邸に潜み、石原謙之進と稱す。中山忠光の兵を大和に擧ぐるや、吉村寅太郎等と之が謀臣たり。文久二年九月二十四日、彦根藩士佐藤長三郎の爲に狙撃せられ、遂に斃る。年三十五。明治二十四年十二月從四位を贈らる。辭世に曰く、

君故にをしからぬ身をながらへて
今此時に逢ふぞうれしき

賴三樹三郎

山陽の第三子、名は醇、字は子春、鴨屋と號す。才藻穎悟、骨相奇峻、深く山陽の鍾愛を受く、米國の使節浦賀に來り、貿易を請ふの時、幕府其措置を失ひ、殆ど國家の大典を破る。三樹乃ち尊攘の大義を抱き、毅然として醉罵劍戟の陋習を改め、深沈着實、恰も身を換へ、人を異にするが如し。幕府其密議を探知し、志士安島常刀、梅田源次郎、橋本左内、吉田寅次郎等と共に捕へて京師の獄に投ず。安政戊午の獄と稱す。五年十二月江戸に檻送せられ、屢々評定所に召して其罪狀を糾問す。三樹答へて曰く、吾嘗て尊攘の大志を抱く、今にして大義を策せざるものは、國家の奸賊、夷狄の醜奴のみ、吾少小にして父母の教を受く、豈國賊夷狄となるを欲せんや、其の他毫も知る所なし。已にして幕議漸く決し、三樹を死刑に處す。時に安政六年十月七日。年三十五。明治廿四年正四位を贈らる。辭世に曰く、

排雲手欲掃妖熒 矢脚墜來江戸城
井底痴蛙過憂慮 天邊大月缺光明
身臨湯鏝家無信 夢斬鯨鯢劍有聲
他年風雨苔石面 誰題日本古狂生

○ 我罪は君が代思ふ真心の

深からざりしゝるしなりけり

○ かへりみる比叡の山影くもりける

我が行先はしら雲の空

宗良親王

後醍醐帝の皇子。十餘歳にして僧と爲り、尊澄と名づけ、天臺の座主と爲る。延元元年足利尊氏叛して京師に遁る。帝延暦寺に幸す。時に尊澄を一品に叙し、僧徒を勸勵す。座主の一品に叙せらるゝは是を始めとす。四年帝崩じ、後村上帝立つ。遺詔を尊澄等に頒告し、時に及びて進取せしむ。尊澄を嘗て宗良と改め、上野親王、又信濃宮と稱す。勅して中務卿征東將軍となす。諸國に轉戦、流離竄匿備に艱難を嘗む。十五年帝住吉に在り、宗良に勅して兵を發して來り赴かしむ。木曾路冰雪、人馬通じ難し。帝和歌を賜ひて之を促せども、卒に軍を出ず能はず。長慶帝立てり、國勢衰弱、詔命行はれず。

宗良窮蹙々甚し。文中三年吉野に至る。天授三年長谷寺に入り、再び僧と爲り、後河内の山田に寓す。宗良嘗て新葉和歌集を撰す。後龜山帝勅して奉勅撰に准す。弘和元年十二月重訂して之を上る。時に年七十。其終る所を知らず。或は曰ふ弘和中信濃國人叛す。宮及び新田氏の族、悉く混合に死すと。宮は宗良ならん云々。辭世なりと傳ふる歌。

君がため世のため何か惜からむ

捨て甲斐ある命なりせば

村松政克

土佐の人。世々山内氏に仕ふ。幼名熊太郎と稱す。敏捷學を好み、又劍銃を學ぶ。明治十年三月西南の役起るに及び、高知縣師範學校教員の職を辭し、同志の士と謀り、賊軍に牒し、政府を顛覆せんことを企て、五月藤好靜と脱走して日向に赴き、桐野利秋に面し、後ち歸郷して同志を糾合せんとするに及び、事顯れて縛に就き、東京に護送せられ、入獄中肺患に罹り、叔父石黒光正の宅に保釋せられ、遂に歿す。時に十一年五月二十五日なり。年二十八。辭世の歌あり。

父母のなげきのほどや如何ならん

わが玉の緒の絶ゆと聞きなば

村松秀重

赤穂四十七士の一人なり。喜兵衛と稱す。長矩に事へて中小姓となり、扶持方奉行を兼ね。復讐の同盟に加はり、難髪して醫となり。薩州と稱す。死を賜ふ時、年六十二。辭世に曰く、

極樂へことわりなしに通らばや

彌陀もろともに四十八人

村岡局

姓は津崎、父を左京と云ふ。京都の人。本名矩子、近衛忠房に仕へ、村岡局と稱す。忠房皇威恢復の意あり、密詔の水月を下たるや、局其間に盡力するところ多し。文久三年黨人の獄起るに際し、志士と共に捕へらる。吏糾問して曰く、近衛公長門に走る。其初め爲す所如何と。村岡言はず、江戸に押送せられ、禁錮三十日にして赦さる。中興の後藤二十石を賞賜せられる。村岡感涙を浮べ詠じて曰く、思ひきや數ならぬ身のかくまでにかきめぐみの露かゝるとは」と。嵯峨に退隱し、吟詠風月を樂しみ、明治六年八月二十三日逝く。年八十二。同二十四年從四位を贈らる。其臨終の歌に曰く、

雨あられはげしけれども軒深き

我が家はそれと音も聞えず

村上佛山

豐前の詩人なり。稗田村の人、名は剛、字は大有、彦左衛門と稱す。佛山は其號なり。温厚和平、詩を嗜む命の如し。一稿成る毎に、必ず之を机上に置き、日暮之に向て再拜す。家人門生笑ひ嘲るも省みず。幼時龜井昭陽に學び、後ち京都に遊び、足疾ありて帷を居村に下す。弟子雲集し、身村里を出てすして、名聲海内を蓋ふ。平生喜で白蘇二集を讀む。其の詩温厚にして縱横自在、天地事物詩に入らざるなし。明治十二年佛山年七十。壽筵を其郷に開く、期に先ち遍く詩の雲月花にかゝるものを、海内詩人の名流に楸す。後ち幾くならずして九月二十七日歿す。佛山稗田に栖遲すること數十年、微辟至らず、一邸一壑皆其詩に入らざるなし。故に世其土を稱して詩人村と云ふ。辭世に曰く、

手把金經坐小齋 滿山霜露夜凄々

老與年人殘霽月 孤影片心俱向西

梅田源次郎

名は定明、雲濱と號す。若州小濱の藩士、矢部岩十郎の子なり。出て梅田萬兵衛の養子となる。和漢の典籍に通じ。詩歌を能くし、書に巧なり。京師に畔を垂る。後ち、東湖、象山等の名家に通じ、志氣慷慨夙に憂國の念を抱き、尊攘の大義を唱ふ。安政三年閣老間部詮勝京師に至り、陽に天氣伺候と稱し、竊に朝旨の變更を謀り、遂に雲濱等三十餘人を捕縛す。世に之を戊午の厄と云ふ。其縛に就くや、筆を呼んで臥室の壁に題す。其の時に曰く「妻臥病牀兒泣飢、挺身盲欲掃戒夷、今朝死別兼生別、只有昊天皇土知。幕吏拷治益々嚴なり。終に鞭を加へ、石を抱かすむ。雲濱已に堪ゆる能はず、氣息殆んど絶えんとす。然れども精神確固、尊攘を口にするのみ。是年十二月頼三樹等と江戸に檻送せられ、安政六年九月十四日小松藩邸の獄舎に死す。年四十四。明治廿四年正四位を贈らる。雲濱人と爲り豪邁不羈、常に盛宴を開き、歡娛を極む。尊攘を唱ふるに及び、宴を廢し、妓を撤す。妻兒飢寒を訴ふるも更に意に介せず。嘗て嘆じて曰く、心大なれば則ち百物皆通じ、心小なれば則ち百物皆病むと。志氣精確國家の大典を匡正するを以て己が任とす。左の歌は自ら死を期して作りたるものなりと云ふ。

君が代を思ふ心の一筋に

吾身ありとは思はざりけり

梅若丸

京師北白河、吉田某卿の子なり。五歳にして父を喪ひ、七歳にして叡山に登り、月林寺に入りて習學す。時に東門院に兒億あり、松若丸と曰ふ。常に才學を争へども、梅若に若かざるを以て、法師等之を遺憾とし、時ありて月林寺の僧と相争闘す。梅若之を憂ひ、潛に山を脱して歸らんとし、路大津を過ぐ。盜信夫藤太と云へる者、梅若を欺て東下し、武藏隅田川に來る。時に三月十五日なり。梅若道路の艱難に憫み、遂に病みて死す。終に隨み和歌を詠じて曰く、

尋ね來て問はば答へよ都鳥

隅田川原の露ときえぬと

梅屋鶴壽

通稱諸田亦兵衛、又吉田佐吉と曰ふ。狂歌を好み、松枝鶴壽と號す。殊を齎きて尾張家に入出入し、老後殊翁と號す。元治元年正月十二日歿す。年六十二。辭世に曰く、

つまづくが最後此世の暇を

ひまゆく駒におくり狼

上杉輝虎

小字は猿松丸、又虎千代と云ふ。長尾爲景の第三子なり。天文二十一年薨髪して不識庵謙信と號す。武田信玄と川中島に戦ふや、自ら旗幟を撤し、白布を以て面を覆ひ、大瀧甲、緑緞衫を着し、放生駒に乗り、直ちに進みて信玄の子義信と闘ひ、之を傷け、轉じて中軍に至る。信玄親相似たる者と、甲袍を同し、六人並に鐵關扇を乗りて胡牀に踞し、辨知すべからず。謙信呼で曰く、信玄何に在るや、信玄聲を放ちて曰く、何ぞ不恭なるやと。謙信三たび信玄を斫り、之を傷く。會々甲兵來り救ひ、槍を執りて馬を刺す。馬逸して去る。是の日兩軍接戦十七合にして、謙信十一戦の勝を得ると云ふ。謙信晩に輿脱し、鐵丸の如きもの胸脇に在る有りて、食餌を吐き、喉を通ずるもの唯冷水のみ、而して更に倦意の色なし。其治を爲す醫酷に過ぐるを以て、人自ら安んぜず。然れども性廉にして信を重んじ、善く兵を用ひ、四隣畏懼す。信玄の卒するを聞き、嘆じて曰く、嗚呼惜哉、當時英傑と稱するもの、獨り信玄のみ、斯人死せば則ち山東の弓箭挫衰せんと。又曰く信玄死せば郡邑必ず靖からじ、向後甲信に向て銃矢を發する勿れと。謙信武事に因りて倭事し、每歲法會を修めて以て冥助を祈り、終生素食し、婦女を淫せず、常に戒を持するを以て嗣子なし。天正六年三月信長と兵を交るを約し、將に發せんとす。發するに先ち二日病作り三日遂に死す。明治三十五年別格官幣社に列せらる。辭世に曰く。

極樂も地獄もさきは有明の

月ぞ心にかゝる雲なき

上杉禪秀妻

武田信玄の女なり。應永二十三年禪秀の亂を爲すや、信滿其舅たるの故を以て之を佐く。軍敗れて國に歸り、上杉憲宗の來討するに會し、衆寡敵せず、木賊山に自殺し、禪秀も亦戰死す。時に應永四年二月なり。禪秀の妾之を聞き、腹を剖き、水に投じて死す。辭世に曰く、

さなきだに五のさはりありとなく

おやさへむくふ罪はいかにせん

歌川豊廣

浮世繪師なり。岡島氏、俗稱藤次郎。江戸の人。歌川豊春の高弟にして浮世繪の名手なり。一柳齋と號し、彼の浮世繪山水をもて有名なる廣重は、實に豊廣の門に出でたるをもて察すれば、豊廣が畫法に熟達の一斑を窺ふに足れり。豊廣人と爲り寛濶にして義太夫節を好み、三味線の名手なり。文政十二年十二月二十一日歿す。年六十五。辭世の狂歌あり、

死んでゆく地獄の沙汰はともかくも

跡の始末は金次第なり

歌川廣重

有名の浮世繪師、一立齋と號す。姓は安藤、名は徳太郎、幼にして善く畫く、貸本屋某の周旋にて、強て豐廣の門に入る。時に年十七、其の東海道を往復するや、行々山水の勝景を探り、深く感ずる所あり、是より専ら山水を畫くの志を起せり。有名なる五十三驛の錦畫は、此時已に腹稿成りたりと云ふ。木曾街道六十九次、諸國名所江戸百景等世に珍重せらる。其の魚籃しの錦繪は、寫眞にして歐米人の珍賞する所なり。人と爲り謹慎にして俠氣あり。業餘狂歌を好み、東海堂歌重の號あり。嘉永七年九月六日歿す。年六十二。辭世に曰く、

東路へ筆を殘して旅の空

にしの御國の名どころを見ん

歌川廣重三世

浮世繪師、一世廣重の門人にして斯道に堪能なり。重政と稱す。二世廣重の家を出づるや、重政代りて家を繼ぎ、二世廣重と稱す。實は三世なり。明治二十七年三月二十一日歿す。年五十三。辭世に曰く、
汽車よりも早い道中すこ六は

目の前を飛ぶ五十三次

歌川女

越前三國の妓院荒町屋の妓なり。名は吟、號を泊瀬川と稱す。性風雅を好み、佛道に遊ぶ。後ち薙髮して瀧谷と號す。安政六年七月病死す。年六十一。辭世の句あり、

おく底もしれぬ寒さや海の音

歌川豐國三世

浮世繪師なり。歌川國貞と稱し、一世豐國の高弟なり。俗稱角田庄藏、一に庄三郎、後肖造と曰ふ。一雄齋、五渡亭、香蝶樓、富望山人、眺樹園、富眺庵、北梅戸等の數號あり。弘化元年國貞師名を繼ぎ二世豐國と稱す。實は三世なり。一世豐國歿して門人豐重後を繼ぎ、二世豐國と稱せしが、家を出でしを以て國貞代りて師家に入り、後を繼ぎたるなり。然るに自ら二世と稱す。當時之を評し一首を詠めるもつあり、歌川をうたがはしくも名のり得てにせの豐國二世の豐國。人と爲り温順にして謹慎、俳優の似顔畫有長所たり。嘉永安政の頃に至りて、精細華麗を極め、彩色摺五十有餘遍の多きに至り、中には金銀螺鈿を嵌入し、其精巧實に三世豐國に至りて極まれりと云ふ。元治元年十二月十五日歿す。年七十

九。辭世に曰く、

一向に彌陀へまかせし氣のやすさ

ただ何事も南無阿彌陀佛

浦楯記

神風連幹部の一人なり。名は保臣、幼にして學を好み、武を修む。事敗れ自刎せんとするや、梅村作太郎之を止む。乃ち巡查の屯所に自首す。其法官の審問に對するや、些の修飾隠蔽なく、寧ろ率直に過ぐるの供述を爲したるを以て、法官其勇氣を賞したるも、滅刑の餘地なく、遂に死刑の宣告を受けたり。明治九年十一月三日獄吏來りて呼び出したるに、聲に應じて檻中より出で、從容として顔色變ぜず、毫も平生に異らざりしと云ふ。時に年三十。就刑の當日、他の檻房にありし木庭保久の前に至り、別れを叙し、朗吟したる歌あり、

不知火のつくしにつくす真心は

神ぞしるらんわが國のため

烏羽玉の夜ごとに結ぶ夢にだに

ころろにかゝる母のゆく末

潮田高教

赤穂四十七士の一人なり。又之丞と稱し、後名を變じて原田弁右衛門と云ふ。職を復して後細川氏の邸に預けらる。一日富森正因、大石信清等傍人に謂て曰く、吾等は朝暮の人なり、請ふ未だ死せざるに及びて、以て卿等を娛ますあらんと。乃ち各々屏風を以て自ら蔽ふて雜劇の狀を爲す。高教笑て曰く、死期將に至らんとす。何ぞ是の戲慢ある。吾れ當に内藏助に告げて之を捨すべしと。翌日果たして死を賜ふ。衆咸な談笑平時の如し、長雄將に起て死に就く。高教徐に謂て曰く、僕今追ひ及ばんと。和歌を賦して割腹す。行年二十五。

武夫の道とばかりを一と筋に

思ひたちぬる死出の旅路に

植村蘆洲

名は正義、字は子順、蘆洲は其號なり。家世々幕府の與力たり。蘆洲壯にして職を弟某に譲り。大沼枕山に師事すること四十餘年、其詩蒼勁精深、業を受くる者頗る多し。明治十八年八月八日歿す。年五

十六。その絶筆の詩、題して遺呈考詩閣夫子と云ふ。考詩閣夫子は枕山のことなり。其詩に曰く、

我自招吾病 無廖敢答醫

難諭愚婦惑 夫子獨能知

枕山評して曰く、病苦之極、精神不亂、得此妙悟之詩、唯此一事、既可稱賢矣、程朱之教、其條雖多、以臨終不亂爲第一。蘆洲臨終有此一絕、余讀之五内欲裂、然不能默、次其韻云。詩愁兼世感、結病固難醫、詩愁人相見、世感我唯知。

羽紅

京都の俳人なり。氏は竹田、玄々堂と號す。福田穂石の門人なり。寛保三年閏四月三日歿す。年五十七。辭世の句、

行雲にまで連だゝん時鳥

乃木希典

山口藩士希次の第三子なり。維新の始め御親兵掛と爲り、明治四年陸軍歩兵少佐に任ぜられ、十年西

南の役連戦功あり、中佐に進み、十六年少將に累進す。二十七年日清之役、第一旅團を以て金州に入り、二十八年中將に進み、第二師團長に補せられ、臺灣を攻めて之れを取る。功に依り華族に列せられ、男爵を授けらる。二十九年臺灣總督に任ぜられ、三十一年第十一師團長に任ぜらる。三十七年日露の事起るや、第三軍司令官に補せられ、陸軍大將に任ぜらる。旅順の戦敵將ステツセル克く禦ぎ、數月抜く能はず、希典二子あり、長を勝典と云ひ、次を保典と云ふ。俱に尉官を以て從て軍に在り。勝典先づ南山に戦死す。希典曰く、兒能く國に殉ず、不日一家三棺を出すを待て、葬を許さんと。一軍之を傳聞し士氣益振ふ。已にして保典亦陣亡す。希典毫も愁容を顯はさず、自若として軍を指揮し、屍山血河の苦闘を経て、遂に旅順を陥る。尋て第三軍を以て本軍に會し、奉天の戦に左翼となり。迂回して露軍の背後に出で、其退路を遮断して偉功を奏す。功一級從二位伯爵に陞叙し、軍事參議官と爲る。四十年學習院長に任ぜらる。四十四年歐米を巡遊し、到る處歡遇せらる。四十五年七月天皇不豫、希典大に之を憂ひ、毎日二回參候し、且つ日々靖國神社に詣り、其治癒を禱る。蓋し殉國者の英靈に倚り聖體を護せんが爲なるべし。已にして天皇の崩するや、希典哀悼殆ど絶せんと欲す。爾來毎夜寢殿に參籠す。大葬に先ち、英國皇族コンノート親王英帝名代として入朝するや、希典其接伴役を命ぜらる。大正元年九月十三日大葬を行はる。希典夫人と共に午前九時馬車に同乗し、午後四時家に歸り、急病と稱して來客を謝絶し、午後八時靈柩出門の號砲を聞き之に殉死す。聞く者皆涙を揮ふ。時に年六十四。時人希典を稱して古武士の典型又武士道の權化と曰ふ。十八日青山に葬る。關都送葬する者數十萬人に及ぶ。辭

世井に遺言條左の如し。

神あがりあがりましぬる大君の

みあとはるかにをろがみまつる

うつし世を神さりまし、大君の

みあとしたひて我はゆくなり

遺言條

第一 自分此度御跡を追ひ奉り自殺候處、恐入候儀其罪不輕存候。然る處明治十年役に於いて軍旗を失ひ、其後死處を得度心掛候も、其機を得ず、皇恩の厚に浴し、今日まで過分の御優遇を蒙り、追々老衰最早御役に立つ時無餘日候折柄、此度の御大變何共恐入候次第、茲に覺悟相定め候事に候。

第二 兩典戰死の後、先輩諸氏親友諸彦よりも毎々懇諭有之候得共、養子

弊害は古來の議論に有之、目前乃木大兄の如き例他にも不尠、殊に華族の御優遇相蒙り居り、實子ならば致方も無之候得共、却つて汚名を殘す様の憂無之爲め、天理に背きたる事は致す間敷事に候。祖先の墳墓の守護は血縁の有之限りは、其者共の氣を付け可申事に候。乃ち新阪邸は其の爲め區又は市に寄附し、可然方法願度候。

(以下略)

乃木希典妻

名は靜子、鹿兒島藩士湯地定之の第四女なり。明治十一年乃木氏に嫁し、十二年勝典を生み、十四年保典を生む。温順質素邊幅を飾らず、日露の役家に在りて恤兵及び後援の事を助く。大正元年九月十三日希典の明治天皇に殉するや、靜子從容として亦希典とともに之に殉す。年五十四。辭世に曰く、

出でましてかへります日のならしとき

けふのみゆきに逢ふぞかなしき

野村望東尼

尼は勤王家なり。名はもと、福岡藩浦野重兵衛勝幸の三女にして、和歌を能くす。年二十四、本藩の士野村新三郎貞實の後妻となり、貞實致仕し、平尾村の山間に夫妻世蔭を避け、和歌を樂む。五十四歳の時夫を喪ひ、剃髮して望東と號す。文久四年中村圓太を介して高杉晋作に會す。幾くならずして、其藩を脱して難を避け來るに逢ひ、潜かに別墅に匿れしめ、衣食を給す。慶應元年夏嫌疑を蒙り捕へらる。詠じて曰く、浮雲のかゝるもよしや武夫の日本心の數にいりなば。是より先、太宰府謫居の五郷に密謁せしに因ると云ふ。同年十月姫島に流され、烈風激浪の海邊に小獄を造りて幽せらる。時に同志の輩二十餘人、皆刑に處せらるゝを聞き、老血を刺して心經を書し、詠歌を添へて密に其家族に送りて申ふ。曰く、後れ居てかくも甲斐なし法の文よみがへりこむ傳ならなくに。同二年九月同藩の浪士藤四郎親茂高杉晋作と謀り、獄を破りて望東を奪ひ去り、馬關に留め、後三田尻に移す。適々病あるを以て國主毛利氏吏人をして看護に供し、又侍醫をして之を訪はしむ。望東死を期して左の歌を詠じ、永眠す。慶應三年十一月十三日。年六十二。明治二十四年正月五位を追贈せらる。

華浦の松の葉白く置霜と

消るはあはれ一さかりかな

野中兼山

士佐藩の執政なり。名は止、諱は眞繼、幼字は左八郎、長じて傳右衛門と改め、後主計又は伯耆と稱す。兼山は其號なり。致仕して高山に改む。天資英敏、儀容雄偉、初め禪を學び、中庸を讀んで佛説の虚誕多きを慨し、谷時中に請て之を講せしむ。朱書を四方に求め、搜索海外に至り、或は翻刻して世に公にす。朱學大に海内に行はるゝに至る者、眞繼表章の力亦居多なりと云ふ。教期を隆にして通俗を救ひ、農桑を盛にして貧民を恤み、新政觀るべきもの多し。送運の便、灌溉の利、今日永く後人をして無涯の恵に賴らしむ。偉勳今尙ほ人口に膾炙せり。國政を司る三十年、一國の事成一人に繫る。祿を加へて一萬石に至る。眞繼剛介、惡を疾む太甚しく、人の過を容る能はず。是を以て群臣の媚妬深く、謗議喧騰す。寛文三年自効して致仕を請ひ、許されて中野の別業に屏居し、明夷軒と號す。門を杜ち、客を謝し、談時政に涉れば笑て應へず。十二月十五日歿す。年四十九。明治四十五年一月正四位を贈らる。辭世に曰く、

わかれ行く名残は露ものこらしを

連枝の中をやはらげてすめ

楠正行

行宮に詣り、奏請して曰く、曩に先正成徳力を展べて強敵を夷らげ、以て宸憂を安んず。而るに幾くもなく、天下復た亂れ、逆徒來攻し、終に命を濠川に致す。臣時に年十一。遺言して河内に遺還す。宗黨を糾合し、朝敵を除滅し、宇内をして再び皇化に歸せしめんとす。今臣年已に壯、常に待つあるの身を以て、遽に不測の病に墜り、上にしては不忠の臣と爲り、下にしては不孝の子たるを恐る。方今師直、師泰將に來り犯さんとす、實に臣が報效の時なり。若し彼の首を獲るに非ざれば、則ち臣が兄弟の首を彼に授けん、雌雄の決は此の一戦に在り、願くば一たび龍顏を拜するを得んと、言畢りて涙下る。帝親ら口勅して慰諭す。正行頓首して出で、衆を率ひて、後醍醐帝の廟を拜して告げて曰く、戦知し利あらざれば、敢て生て歸らずと。同盟の姓名を如意輪堂の壁に題し、其の後に辭世を書して曰く、

返らじと豫て思へば梓弓

亡き數に入る名をぞ留むる

楠光正

五郎左衛門入道常泉と號す。足利義教を殺して南朝の再舉を謀らんとし、議漏れて縛せられ、永享元年九月廿三日六條河原に刑せらる。辭世に曰く、

不來不去攝眞空 萬物乾坤皆一同

即是甚深無二法 秋霜三尺斬西風

夢の中に都の秋のはてはみつ

心は西へありあけの月

久坂道武

長州藩の醫官なり、幼名は誠、字は實甫、玄瑞と稱す。後茂助と改め、江戸齋と號し、又秋湖と號す。通武醫を好まずして、兵を吉田松陰に學ぶ。松陰其才を愛し、終に女弟を通武に配す。文久四年、高杉晋作、入江弘毅寺と京都に入り、王政改革の策を述べ、共に議して横濱に至り、洋館を焚かんと欲して大森に至る。藩主毛利元徳、之を聞き、大に驚き、追來りて之を諭す。通武拜謝共に俱に還る。爾來尊攘の大議を唱へ、幹旋甚だ力む。既にして、奇兵隊長と爲り、藩命を奉じ、馬關に碇泊の外艦を撃ちて之を擄ふ。朝廷大に其功を賞す。藩亦賞して參政に任ず。後京に入り、討幕の議を唱へて用られず。終に書を留めて三條以下の七卿を奉じ、國に歸る。是に於て、藩人危懼し、議論百出、物情恟々たり。通武等謀を合し、嵯峨より京に入り、蛤門に戦ふ。衆寡敵せず、退て鷹司公の邸に據る。幕軍亂射雨

の如し。松平容保令して火を風上に放つ。通武焔火を踏み、東西に奔馳し、奮戦決闘、遂に瘡傷を被り歩行すること能はず、乃ち後事を入江弘毅に囑し、泰然、樓に上り、腹を割き、炎中に投じて死す。年二十六。明治廿四年四月正四位を贈らる。通武最後の詠に曰く、

けふもまた知られぬ露の命もて

千年を照らす月を見るかな

久保田米僊

畫家なり。京都の人。幼名米吉。年十六、鈴木百年翁の門に入り、専ら後素の技を研く。明治二十三年東上して民友社に入り、國民新聞紙上に繪畫を出して、新聞繪畫に一生面を開き、二十六年米國に漫遊し、征清の役、廣島大本營に於て御前揮毫を命ぜられ、三十三年眼疾に罹り、明を失ふ。是に於て、餘生を曠壇に托し、錦隣子と號す。性質淡泊、交友の多き畫家中及ぶものなしと云ふ。三十九年五月十八日歿す。年五十五。病革るに及び、自ら起たざるを知るや、一句を吟す。曰く、

郭公の曉の沙羅双樹

國司信濃

名は朝相、菽菴の家宰たり。元治元年六月藩侯毛利敬親の幽せらるゝや、藩の壯士其の免されん事を強請するの擧ありと聞き、福原元圃、益田親施を遣し、之を撫循せしめ、尋で朝相を遣す。朝相兵を率ひて山崎に至り、激徒を慰め、穩に事を請はしむ。會津の兵拒みて入れず。乃ち松平容保を誅するに決す。然れども豎下を犯すを恐れ、檄して曰く、容保を誅するに因て暫く豎下を懸がす云々。藩侯福原、益田、國司の三人を幽し、其罪を請ふ。曰く亡命を鎮撫せしめんとして却て煽動せられ、豎下を犯す罪逃るべからずと、十一月七日三人をして自盡せしめ、首を徳川慶勝に獻す。明治二十四年四月正四位を贈らる。國司の辭世に曰く、

よしやよし世を去るとても我が心

御國のためになほつくさばや

愚庵

名は天田五郎、鐵眼と稱す。年十五奥羽戦争に従事し、家郷に歸れば、父母子弟離散して往く所を知らず。後ち遠州の俠客清水の次郎長（山本長五郎）の養子となり、開墾に從事し、爾來新聞記者と爲り寫真師と爲り、神官と爲り、父母を求むれども能はず。明治二十二年遂に意を決して京都修學院の林丘寺に入り、滴水禪師の室に得度し、二十四年清水港に草庵を結び、愚庵と稱す。三十七年一月三日歿す

年五十一、遺囑に曰く、

水魂向水散 鐵骨入苦穿
月下人尋否 梅花白處烟

黑澤忠三郎

櫻田の刺客にして大關和七郎の實兄なり。名は勝數、水戸侯に仕へ、百石を食む。天寶豪邁にして水練の達人なり。金子有村寺と共に井伊侯を要撃し、事畢りて脇坂淡路守の邸に自首し、熊本侯の邸に幽せられ、文久二年七月二十六日斬に處せらる。年三十二。明治三十五年正五位を贈らる。(櫻田義舉録に萬延元年七月十二日九鬼家に於て病死とあり。又劍傷の爲めに死せりといふ説あり。)忠三郎が絶命圖なりと傳へらるゝもの曰く、

呼狂呼賊任他評 幾歳妖雲一旦晴
正是櫻花好時節 櫻田門外血如櫻
はるくと心こしちの今日こそは

思ひもはれてむすぶゆめ哉

黒川隆像

大内氏の家士なり。刑部少輔と稱す。陶晴賢の反するや、義隆に大寧寺に従ふて防禦し、矢盡き勢極りて義隆に殉死す。辭世に曰く、

夢亦是夢 空猶是空 不來不去 有端的中

空 廣

京都の人。八歳にして洛西嵯峨天龍寺に入り、應永六年奥州示現寺に住持し、同二十三年二月十五日歿す。年六十九。遺囑に曰く、

四大歸空 如子得母 虚空説夢 聞得太奇

雲井龍雄

本姓中島、諱は守善、羽前の人なり。同藩士小島才助の義子と爲り、義父歿して姓名を改め、自ら雲井龍雄と云ふ。人と爲り、矮身廣額にして、狀貌婦人の如し。天資精悍、側備大志あり、居常好て書

を讀み、寢食を廢す。江戸に遊學して安井息軒の門に在り、其夜に方て書を讀むや、睡を催す毎に、或は冷水を面に灑ぎ、或は辛味を口に含み、猶ほ堪へざる時は、木棍を以て自ら其頭上を撃ち、殆ど滿頭瘡を生ずるに至る。嘗て左傳を讀み、一夜にして了る。其學を力むる此の如し。竟に和漢の書に涉獵し、就中王氏の學に長ず。明治戊辰の春、徵士を以て京師に入り、事を議するや、雄辯風生、等輩を凌轢し名聲大に掲る。時に官軍徳川氏の兵を伏見鳥羽に撃ち、大に之に勝つ。龍雄上書して徳川氏の冤を訴ふるも允されず。龍雄激昂して人見勝太郎と相謀り、大に官軍に抗す。事成らずして藩主已に祥旗を樹つ龍雄計の出る所なく、遂に降る。明年九月京に上り、集議院に入りて、天下の大計を陳ぶるも容れられず。曰く是賊首なりと、龍雄慨然として詩を賦して曰く、「天門之翠々於鬢、不容射鉤一管仲、啞嚮無恙奮麟、生歸江湖頁一夢、自嘆豪氣猶未摧、每經一難一倍來、睥視蜻蛉洲首尾、向何處欲試吾才、講學平生護此志、道窮命乘何足怪、只須痛飲醉自寬、埋骨之山到處翠」。「生不聊生死不死、呻吟聲裡仆又起、立馬湖山彼一時、雄飛壯圖長已矣、我生有涯愁無涯、悠悠前途果如何、咄々休說斷腸事、滿江風雨波生花」。爾來同志を起合して事を爲さんと謀るも遂に成らずして米澤に押送せられ、再舉を謀るに及び其徒捕へられて陰謀を洩す。是より復た世事を浴せず、吟哦以て其爵を遺る。既にして事皆發露し、東京に檻致せられ、十二月小塚原に梟せらる。年二十七。龍雄の獄に下るや、糺問甚だ嚴に、管杖交々下り。身體爲めに完膚無きに至るも敢て言はず。故に其刑に罹る者、僅々に止ると云ふ。其刑に臨むや、神色自若平生の如し。嘆じて曰く、我が計をして成らしめば、政體更むべく、封建復すべし、徳川氏の

冤雪ぐべく、吾藩祖の業亦興るべきなり。嗚呼天か命かと、龍雄が其師息軒に送りたる最後の詩に曰く

身世何飄飄 浮沈不自保 俯感仰又笑
 心勞而形瘁 微軀一致君 不能養我老
 揮淚辭庭門 檻車自遠路 鼎鑊亦徒甘
 平生有懷抱 此骨縱可摧 此節安可撓
 我命我自知 不復訴蒼昊 天數有消長
 人道有僅汚 所以聖與賢 行藏或相殊
 唯吾獨而惠 不能與他俱 自立多崖異
 心跡常是孤 唯有區々志 齒明誓不渝
 臨難豈苟免 知冤未自誣 雖有愧前哲
 猶足立懦夫

來原盛功

其職と稱す。長藩勤王の士なり。精敏比なく、廣く歴史に渉り、槍術を善くし、尤も西洋陣法に精し。長藩の兵制を變革せしは盛功其首唱たり。尊攘の事起るや、幕府陽に朝旨を奉じ、内陰かに遲疑す。盛功一日慨然横濱の夷館を燒きて以て彼を激せしめ、事を生ぜん欲し、獨り脱して邸を亡く。人の爲めに要止せられ、已む事を得ずして還る。此日世子召見して其過激を抑へ、慰諭具さに至る。盛功感泣拜謝して退く。然れども衆其變あらんことを慮かり、俱に其舎に至る。盛功殊に従容として談笑平日の如し。衆安んじて去る。時正に五更、盛功乃ち起て禮服を着し、徐かに遺書を作り、館に面して腹を屠り。吭を絶ち、右手に其刀を杖き、伏して死す。明治二十四年從四位を贈らる。盛功性嚴明にして、言笑すること寡し。人望で之を畏る。吉田松陰を友とし善し。松陰の米糧に投じ、海外に周遊せんとするや、同志の士國家の禁を犯し、且米人の背せざらんことを思ひ、紛々決せず、盛功獨り之を懲通す。松陰の獄に投ぜらるゝ時、盛功相州に在り、金を醸して之を送る。終始交通絶えずと云ふ。辭世に曰く、
雲霧を四方にはらひて澄月を

よみ路のそらにはやく見まほし

栗原亮一

志州鳥羽の人なり。少壯にして學に志し、同人社に入りて英漢の學を修め、夙に自由民權の說を唱

へ、自由黨の成るや其樞機に參し、帝國議會開設以來毎に議員と爲り、數次豫算委員長に擧げられ令名あり。資性恬儉繩墨に拘泥せず、而も頭腦敏密財政の事に通ず。明治四十二年議員瀆職の獄に坐せられ四十四年三月十三日病歿す。年五十七。辭世に曰く、
花に月に別れて遠き旅路哉

梁川星巖

名は孟緯、字は公圖、一字は無象、新十郎と稱す。又天谷、百峯、先龍庵等の號あり。澧州安八都督根村の人。邑に星ヶ岡あり、星巖の號此より出づと云ふ。資性敏慧、識見高邁にして、詩は殊に得意とする所、人皆以て天稟を爲す。是より先き、星巖妻紅蘭と共に四方に優遊する二十餘年、天保五年歸京して、天民の江湖社を導き、居を定めんとす。池水假山之を探るに跡なし、乃ち近傍の地を相し、王池吟社を建設す。名聲都下に鳴り、門生堵の如く集る。後京都に移り、優遊自適、世と相忘れ、吟咏獨り樂む。其詩古雅清奇高趣にして風骨あり、世人呼びて日本の李白と曰ふ。嘗て曰く、余が名を成す者は子成なり、子成が詩を成す者は餘功なしとせすと。星巖の詩に於る險韻難題と雖も思慮を費さざるもの多し。安政五年閣老同部詮勝命を奉じて京都に上り、尊攘論者を捕へんとす。星巖慨嘆詩二十五首を作り

以て時弊を議る。既にして病に罹り、九月二日歿す。年七十。枕山、雲如、湖山、春瀟、黄石、松壟、天江等は星巖の門人なり。明治二十四年四月正四位を贈らる。辭世に曰く、

老の身の終るいのちはをしからで

世にいざをしをのなきぞかなし

山中源左衛門

幕府に仕へて五百石を食み、大番組なり。豪放にして任侠の風あり、然れども常に人の厭忌するを見
て快と爲すの癖あり。嘗て病と稱して醫を迎ふ。醫師來るや源左衛門大繩を以て頭を約し、大聲を發
して曰く、汝進みて脈を診せよと。醫師恐怖股慄して去らんとす。源左衛門其裾を引き留めて曰く、時
方に食時に際す、宜しく一飯を喫し去るべしと。醫師辭するに他に廻診するを以てす。源左衛門大に怒
りて之を疾視す。其状恰も鬼の如し。醫師益々恐れて命に隨ふ。時に一男子あり、膳を捧げて出づ。
一を源左衛門に、一を醫師に供す。飯は玄米にして汁は鹽汁なり。醫師頗る之に苦しむ。源左衛門之を
食する數碗、舌を鼓して美と呼ぶ。醫師見て大に驚く。又嘗て白衣を着て登城す。監察見て之を詰る。
源左衛門初め一分計りの貳形を纏し以て之を示す。其皮肉なる率れ此の如し。正保中罪に坐せられ、死
を楚町眞法寺に賜ふ。辭世の歌に曰く、

わんざくれ、踏んぞるべいか、今日ばかり

翌日は鳥が搔ッ咬じるべい

山崎宗鑑

近江の人。和歌連俳の名家なり。本姓は支那、彌三郎と稱す。最も滑稽に富み、書法を善くす。居常
油筒をひさぎて口を糊し、且暮錢一十孔を以て食に換ふ。篆額を掲げて曰く、上客は立ち所に歸れ、中
客は一日にして歸れ、下客は一宿せよと。天文二十二年癩を患ひ、十月二日歿す。年八十九。辭世に曰
く、

宗鑑は何處へと人の問ふならば

ちと用ありてあの世へといへ

山岡明阿彌

江戸の和學者なり。名は俊明、字は子亮、左二右衛門と稱し、隱居して明阿彌陀佛とよび、狂名を
大藏千文といふ。林道春の門に入り、經義を學び、加茂真淵に從て國學を修む。安政九年十月十五日京

都に病死す。年六十九、辭世に曰く、

百とせのなかばも何のうつゝかは

おもへば蝶のゆめさへもなし

山岡鐵舟

名は高歩、字は猛虎、實は飛騨郡代小野朝右衛門の第五男なり。二十二歳にして山岡氏を嗣ぐ。槍術劍道に長じ、軍學書道に通じ、其名海内に普し。米人浦賀に渡來せしより、府下驛然たり。將軍慶喜諸代家士等に示して曰く、恭順謹慎の趣旨を嚴守すべし、若し不軌の事を計るあらば、朝廷に對し、予に刃するが如しと。鐵舟慶喜に面して曰く、余死を決して一人官軍の營中に至り、大總督宮に言上し、國家の無事を計らんと欲すと。慶喜之を許す。勝安房其精神不動の色を見て、之に同意す。其に於て、直に駿府に急行し、西郷吉之助に就て情を述べ、西郷亦之を諒とし、宮に言上し、宮より五ヶ條の御書を賜ふ。鐵舟之を請けて急行江戸城に歸り、遂に此の大任を實踐す。後ち諸官を歴て侍從に任ぜらる。明治五年、皇城炎上あり、鐵舟急變を聞き、起ちて寢衣に袴をつけ、直ちに參内せしに、火既に熾なり、奥に入らんとするに、御杉戸の錠開かず、手を以て破り入るに、主上驚て宣はく、鐵太郎能くこそ早く來れる哉と。時に火近く、御背火氣に因て暖かなり。直に供奉して避く。鐵舟明治十九年頃より一切

經を借り得て、毎日燈下之を書寫せり。二十一年二月疾あり、猶床上に書寫す。易簀の前日眼涙々たるも、寫し得て一字を誤らす。七月十九日最後の詠を爲し、改めて白衣を着し、坐禪の姿を爲して椅子の上に乗し、微笑して逝けり。壽五十三。華族に列せられ、勳二等に叙せらる。其句に曰く、

腹いたや苦しき中にあけがらす

○

二豎何因煩此身 大飲暴食害不空

轉苦爲樂觀自在 生死任天臥藤中

山本誠一郎

諱は朝正、長州の殿吏たり。文久二年攘夷の詔下るや、誠一郎義勇隊の列に入る。元治元年正月薩州の商人大谷仲之進外國人と貿易せんと欲し、數多の貨物を船積して別府浦に泊す。誠一郎憤慨せず同志水井精一と謀り、仲之進を斬り、船貨を火き、精一と共に自刃す。年三十二。辭世に曰く、

雨風に散るともよしや櫻花

君の爲にはなにかいとほむ

山本西武

風外軒、無外齋と號す。京都の綿商なり。松本貞徳の門に入り、佛道を學ぶ。年七十三にして歿す。延寶六年二月十八日なり。砂金發句讀、あつゝ千句等の著あり。辭世の句、

夜の明けて花にひらくや淨土門

山名氏清

時氏の第四子なり。民部少輔と爲り、陸奥守に任ぜられ、兄義理と吉野を犯し、功を以て、和泉守に加へらる。足利義滿、氏清の叛心あるを聞き、兵を發して之を討たんとす。氏清詐りて誓書を獻じ、之を謝し、紀伊に往て義理に計を告ぐ。可かず。之を強ゆ。乃ち可く。是に於て氏清兵を率ゐて和泉を發し、甥滿幸丹波を發す。氏清進で男山に至り、其侍小林某を召して實を告ぐ。小林流涕して諫む。聽かずして大宮に進み、遂に戰死す。時に年四十八。其妻藤原氏に致したる書中の辭世に曰く、

とり得ずば消えぬと思へ梓弓

ひきてかへらぬ道芝の露

山名氏清妻

藤原氏、左近衛中將保修の女なり。氏清の戰死するや、藤原氏泉州堺に在り、濱兵來りて曰く、主君戰歿すと。藤原氏二子如何を問ふ。曰く脱走すと。藤原氏嘆じて曰く、二子恥を知らず、吾生を偷むに忍びずと、將に自刃せんとす。左右之を止め、扶けて輿に上し、土丸城に赴く。藤原氏輿中刃に伏して殊せず。二子時清、滿氏、潛に來りて見えんことを乞ふ。藤原氏曰く、勇なきは士に非ず、孝ならざるは子に非ず、父死して子逃る、何の顔ありて來り見ゆる。滿氏は幼兒なり、猶能く父に殉ず、二兒何ぞ死せざると、乃ち復た言はず。二氏大に愧て去る。初め氏清、書を致して藤原氏に訣る。藤原氏其書の後に辭世の歌を書して瞑す。侍女三人水に投じて殉死すと云ふ。歌に曰く、

しづむとも同じく越えんまでしばし

苦しき浪の夢の浮橋

山田清安

和學者なり。通稱市郎左衛門、作樂園と號す。薩州藩士にして京都の留守居役を勤む。桂園の門に入りて歌學を修め、後ち頻りに古學を研究し、且つ諸家の記録に涉獵す。嘉永元年十二月國に歸り、君側

の歳を除かんとして、却て死を賜ふ。年五十六。辭世に曰く、

ことはりを知らぬ涙の雨なれば

我身に晴るゝ時なかりけり

山田亦助

山口藩士なり。名は實之、後公章と改む。愛山又公章齋と號す。幼稱は卯七郎、夙に海防の急務を論じ、擧げられて汽船長と爲る。元治元年八月、赤間ヶ關の戦大に功あり、國內堂議分裂するに及び、遂に斬らる。年五十六。明治廿四年十二月正四位を贈らる。辭世に曰く、

ちるもよし吉野の山の山櫻

花にたとへし武士の身は

山國共昌

水戸の藩士なり。喜八郎と稱し、後兵部と更む。幼より軍學を好み、夙夜之を講究す。大番組小姓等を経て、文政六年小納戸に任ぜらる。米糠浦賀に入港するに當り、幕府一齊昭を起して海防の機務に預

らしむ。共昌志慮を盡して方略を陳す。名聲益々高く、府下の士業を受くる者多し。安政五年八月武具奉行に班し、目付と爲り、軍事を兼務す。元治元年命を奉じて野州大平山に赴き、田丸直諒等屯集の徒を諭じ、之を鎮せんとす。衆皆聽かず、尋て其事を克くせざるを以て、退隱謹慎を命ぜらる。此の時に當り、市川弘美等、政權を握り、私意を逞うす。七月水戸に至り、益々威權を振ひ藩内紛擾す。松平頼徳鎮撫の命を奉じ、水戸に至る。弘美等拒で入れず。因て那珂に據る。時に共昌幽齋にありと雖も、一藩の危難を坐視するに忍びず。奮然として礪川の邸を去り、頼徳を護衛して那珂港に至る。傾ち頼徳の命を以て軍機を司り、討撃連句一軍大に振ふ。十月二十三日榊原照照等幕府に自首するに方りて、武田正生等と相計り、京師に抵り、天閣に伏して哀情を訴へんと、圍を潰し、遠く險路を経て、十二月十二日越前新保驛に至り、一封の書を裁して、金澤藩の番頭監軍永原甚七郎に出す。甚七郎共昌等の宿所に來るを以て、又具さに西上の事由を陳述し、遂に加州藩に降る。未だ幾くならずして幕命に因て、敦賀邑に禁囚せられ、慶應元年二月四日斬に處せらる。年七十三。明治廿四年十二月正四位を贈らる。辭世に曰く、

いざさらば冥途の鬼と一いづく

山座圓次郎

福岡縣の人。明治三十四年外務省政務局長と爲り、義和團及日露戦役後の難局に執筆し、又小村侯の講和大使として米國に赴くや、参謀として隨行し、條約締結に際し、穩に文書を持して歸朝復命し、後駐支公使に赴任し承認問題に成效し、其他幾多の對支懸案を解決し、功績多し。大正三年四月二十八日急症に罹り、任地北京に客死す。年四十九。圓次郎外交の手腕に長ずるのみならず、又文章家として非凡の天才を有し、且奇行頗る多し。死に流むや意氣昂然、詩を吟し、歌を詠じ、萬歳を唱へて最後に左の句を遺し、莞爾として歸す、句に曰く、

淺ましき凡夫の聲や青嵐

矢野玄道

伊豫の人。平田門の國學者なり。明治二十年歿す。年六十五。玄道常に云ふ、余性質蒲柳にして酒を嗜む、若し女色を近づけば宿志を果はすことあるべしと、終身妻を娶らず。神采秀で、儼として威容あり。臨終の時、病床の障子に三首の歌を書し、遺稿として逝けりと云ふ。其歌に曰く、

おもひよる千々のひとつも藻鹽草

かきつくさざることをしぞ思ふ

この春は鴈にも似るか故郷の

はなを見すて、常世にぞ行く

大和國之助

諱は直利、幼名武之進、後彌八郎と稱し、更に國之助と改む。實は山縣氏、出て大和氏を嗣ぐ、長藩の士なり。文久二年世子の奥番頭と爲り、高杉晉作等と横濱の洋館を火かんと謀り、事洩れて果さず。元治元年記録所出頭人年寄直目附の三職を兼ね、六月津和野其他に使し、其八月京變に依りて黨議大に起り、奸徒の乗する所と爲り、職を褫はれ、毛利登人等と野山獄に繋かれ、十二月十九日獄中に殺さる。時に年三十。明治三十四年正四位を贈らる。辭世に曰く、

君が爲め刃にそむる真心は

いとうれしき心地こそすれ

國の爲め世の爲め何かをしからむ

君にさゝぐる大和心を

松平定信

田安宗武の七子、白川城主松平定邦の嗣となる。世に白河樂翁公と呼ばる。安永七年老中となり、侍従に任ぜらる。時に年尙ほ壯なり、然れども身澁衣を着、食膳常に一菜、諸老愧ぢて節儉す。幕政を革むるの時に當りて、露國北邊に寇し、通商を請ふ。我國久しく鎖港を爲せしを以て、上下恐懼す。定信沿海を巡視し、之れを成る。定信深く學を好み、兼て和歌をよくす。嘗て詠じて曰く、「心あてに見し夕貌の花散りて尋れぞ詔る黄昏の宿」と。人稱して黄昏の少將と云ふ。其老職にあるや、賢に任じ、能を使ひ、柴野栗山、頼春水、尾藤二洲等を擢用し。治政燦然たり。文化九年致仕し、文政十二年歿す。年七十二。法名天璽深徳守國院と號す。明治四十一年正三位を贈らる。辭世に曰く、

今はたゞ何を思はんうきことも

たのしきことも見はてつる身ぞ

松永貞徳

歌人なり。小字勝熊、久秀の孫なり。京師に生る。長じて猶ほ醫を束れ、童服を著し、自ら長頭丸と曰ふ。逍遙軒、明心居士等の號あり。資性和歌を好み、聯句を善くす。初め内大臣藤原實條に就きて門

弟となり、僧安休に從て聯歌故實を受け、細川幽齋に就て親炙數年、和歌聯歌の奥旨悉く其の傳授に受く。慶長三年八月前攝政藤原前久、准后藤原兼季の二人、幽齋、紹巴、及び宗養等に命じて、貞徳を聽るして花咲翁と稱し、俳諧一道の宗匠と爲さしむ。又法皇より「花の本」の號を賜ふ。晩年明を失ひ、承應二年十一月十五日歿す。年八十三。辭世に曰く、

明日はかくと昨日おもし事も今日

おほくはかはる世のならひかな

松本奎堂

天誅組の首魁なり。名は衡、字は士權、諱三郎と稱す。奎堂は其號なり。三州刈谷藩主土井氏に仕ふ。三州は徳川氏創業の地にして、士民徳川氏を稱賛する殊に甚し。獨奎堂皇室を尊崇し、口に徳川氏を稱するを恥づ。嘗て久能山に遊び、東照公の廟前に至り罵て曰く、老猪實に惡むべし、他日志を得ば汝が骨を鞭たんと。乃ち詩を賦して曰く「石磴盤回老樹間、此中何事設重關、鐵椎難入三泉底、知是狙龍埋骨山」と。嘉永五年江戸に至り、昌平齋に入り、居ること一年、退て三河に歸る。安政元年再び昌平齋に入り、舎長と爲り、才名一時に傾く。文久二年大阪に至り、終に京都に卜居す。三年徳川家茂京都に朝す。乃ち詔して攘夷期限を督促する甚だ急なり。奎堂勇躍牌を拵て曰く、吾時至ると。日夜其間

に周旋し、殆ど寢食を廢す。已にして大和行幸夷狄親征の盛舉を遂げ、朝議方に決す。奎堂乃ち吉村寅太郎等三十餘人と、待從中山忠光を奉じて京都を脱し、大阪に下り、軍旅を整へ、大和五條の代官鈴木源内を襲殺して、義舉の首途とす。此の時に至り、朝議已に一變し、親征の舉も亦た罷む。奎堂笑て曰く、奸人果して奸を爲す、吾豫め之を知る、然れども、我事已に此に至る、復た已むべからずと。奮勵激發連戦三十餘合、已にして銃丸の爲めに兩眼を盲す。其軍敗るゝに及び、幕吏の凌辱を受けんよりは、自ら劍に伏するに如かずと爲し、遂に腹を割きて死す。實に文久三年九月二十四日なり。行年三十四。奎堂人と爲り、軀幹短小にして、音吐清亮、善く須磨琴を鼓し、風流自ら樂む。然れども慷慨義烈の氣象、隱然として其間に發露す。作爲する所の詩文遶石峻異にして奇警多し、明治二十四年十二月從四位を贈らる。死に臨み誄じて曰く、

君が爲め命死にきと世の人に

語りつぎてよ峰の松風

松井正幹

神風連の一人にして、同志吉村義節の實兄なり。書畫を善くし、殊に和歌に長ず。明治九年の夏、友人某を訪ひ、その夫人に謂て曰く、こは御身等と共に岩倉山に花見せし實景なり、人生測るべからざれば、何時訣別せんも知れず、記念の爲め之を呈せんと、自ら畫きし親花の寫生畫に「事しあらば明日も消えなん露の身にこゝろうかるゝやまさくら花」と題して贈りたり。事敗れて北岡に赴くや、郷黨應援の狀なきを見、斯くなりては速に去るべし、離れ舊主家に及ばず可からずとて、相促して去り、それより平山に赴き、自刃したり。年三十七。辭世あり、

國のためつくしゝかひもあら波の
あはとくだけで消ゆるはかなさ

松尾葦邊

神風連の一人なり。擧兵の當日は長子豐喜の出産後の第三日目に於て、其妻産尊に在り、兩親の孝養生兒の撫育を談笑の間に懇囑して、涙を呑んで出發したりと云ふ。自刃する時、年二十九。辭世の歌に、

もろともに君の軍にいざたゝん

こゝろの駒に鞭をくはへて

人よりもさきにてゆくは潔し

おそくてあゆむ道はあやふし

松島剛藏

諱は久誠、字は有文、韓華と號し、初め瑞益と稱す。長州の藩醫なり。人と爲り豪爽、繩墨に拘はらず。長崎に至り、洋人に就き航海術を學び、文久元年二月藩主海軍局を三田尻に設置し、剛藏を以て頭人及び檢使を兼ねしむ。同三年攘夷の詔下る。剛藏命を受け、赤間關に急行し、庚申癸亥の諸艦を督し、戦備を修む。元治元年八月藩主朝議に觸れてより、黨議熾に起り、剛藏其羅織に墜り、獄に下りし。二月十九日斬に處せらる。時に年四十。明治二十四年正四位を贈らる。辭世に曰く、

君がためつくす心のすぐなるは

空行く月やひとりしるらむ

益田右衛門介

諱は親施、初め彈正と稱し、後右衛門介と改む。家世々長藩の家老にして一萬二千石餘を領す。右衛門介天性豁達、文久二年藩の世子に従ひ、上京して藩主父子の勤王を佐け、鞅掌周旋殆ど寢食を廢す。三年八月廟議一變し、大和行幸の事中止せられ、長藩の兵を引拂はしむ。右衛門介大に駭き、支藩に謀議し、訴ふる所ありしも。朝命洛中に在るを許さず、乃ち三條公以下七卿を擁して西歸す。元治元

年七月長藩有志の徒、諸國の同志と結び、藩主父子の寃を雪がんとして京に上り、嵯峨山崎に據り、屢々朝廷に上書す。藩主之を聞き、右衛門介等に命じて之を鎮撫せしむ。同月十三日右衛門介大阪に達し、十四日石清水に營し、同月十八日天王山に入る。其夜脱藩の士走て關下に哀訴せんとす。右衛門介之を具して十九日味爽京師に入り、中實立門に向ふ。會津薩摩の兵之を遮り、接戰數合、衆寡敵し難きを以て國司等と議し、西歸するに決し、七月五日采邑須佐に歸る。藩主之を聞き大に憤り、部下をして關下を騷擾したる罪を以て、福原國司と共に徳山に幽せしむ。幕府徳川慶勝を總督と爲し、長藩を征す。藩主慶親痛く事の齟齬するを歎じ、十一月十二日右衛門介并に福原國司の三國老を死罪に處し、以て其罪を謝するの條件と爲す。總督之を容れ、三人從容自刃す。右衛門介時に年三十二。明治二十四年正四位を贈らる。辭世に曰く、

今更に何あやしきも空蟬の

よきもあしきも名の替る世に

前田孫右衛門

諱は利濟、字は致遠、別に陸山と號し、幼名を岩助と云ふ。長州の藩士なり。吉田松陰目して我國の樂正子と稱す。元治元年十月藩主父子山口より萩に歸り、恭順謹慎す。是より先き黨議起りて藩主の命

を矯め、野山獄に下され、十二月十九日斬に處せらる。時に年四十七。明治二十四年正四位を贈られ、四十二年從三位を追賜せらる。辭世に曰く、

一死如飴豈敢辭 居官半世值清時
酬君心事何須語 唯有青天白日和

前田金兵衛

舊幕府の旗本にして、東京市日本橋區通一丁目太田伊助の父なり。金兵衛曾て將軍に咫尺して、大酒の聞え高く、一度に一斗二升を飲みたることあり。俳諧を善くし、東林庵狸々と號し、常に長命寺に遊び、風月を賞す。伊助其望みを死後に叶へんと欲し、紀念の碑を建てり。碑は大なる盃の形にして、内に東久世伯爵の筆を以て、好酒院杓盃程居居士と題し、且金兵衛が辭世を鐫り、明治二十七年八月供養を行ひたりと云ふ。其句に曰く、

我もまた客となる身ぞ魂祭り

前原宗房

赤穂四十七士の一人なり。伊助と稱す。長矩に仕へて小姓たり。真雄京師にあり、宗房及び神崎則休

を遣し、偽りて商賈と爲り、仇家を視はしむ。宗房米屋五兵衛と稱し、服を變じ、日夜探偵す。真雄此に依りて虚實を知るを得、尋て衆を率ひて江戸に至り、二人の家を以て主とす。死を賜はる時、年四十。辭世に曰く、

ふりつもる雲に見ぬ世の戀しきは

筆墨のあとおもひそめぬる

前原一誠

長州の藩士なり。性剛強、漢學に通じ、擊劍に達す。明治二年七月參議に任じ、十二月兵部大輔に轉す。同三年九月議論合はずして職を辭し、故山に歸る。佐賀の亂、縣令中野梧一の依頼を受け、書を縣下の士族に下し、諭して動搖すること勿らしむ。其の書一たび世上に傳播するや、名聲頓に四方に聞ゆ。薩の西郷、長の前原を以て相比するに至る。常に不平を懷き、快々として樂まず。同九年熊本の神風連と謀を通じ、横山俊彦、奥平謙輔等と君側の奸を除くを以て名とし、兵を起して官軍に抗す、毎戦利あらず、遂に擒られて長州に斬らる。子一格、西郷の亂に與し、亦利あらずして死す。一誠の辭世に曰く、

我今爲國死 死不負君恩

人事有通塞 乾坤弔我魂

○
草も木もありてや道のその上に

うちしほれつゝ露も止めぬ

丸橋忠彌

名は盛澄、幼名を吉十郎と稱す。出羽國山形の人なり。槍術を好み、寶藏院流の奥義を極め、其名大に顯る。慶安四年由井正雪亂を起さんことを圖り、忠彌を延て與に俱にす。一日衆を道灌山に會して反期を約す。正雪は駿河に往き、忠彌は江戸に留り、期を待て相發せんと欲す。時に忠彌金を豪商田代又右衛門に借らんことを請ひ、又弓匠藤四郎に託くに秘計を以てす。二人驚き即座馳せて變を上る。松平信綱其槍術を善くするを聞き、多く人を傷つけんことを恐れ、直ちに町奉行神尾元勝石谷貞清を遣して其家を圍み、連呼して曰く、失火ありと。忠彌樓に登り之を望む。衆乃ち突入して之を擒にす。時に七月二十六日なり。同年八月十三日を以て品川に磔殺す。辭世に曰く、

雲水のゆくへも西のそらなれや

願ふかひある道しるべせよ

丸山作樂

肥前島原の藩士なり。明治三年徴士と爲り、神祇官より累進して外務大丞に轉じ、樺太に出張す。作樂が神國的思想は明治の改革を喜ばず、五年遂に公卿愛宕を奉じ、神政の回復を企て、愛宕は死に處せられ、作樂は終身禁錮に處せらる。十三年特赦せられ、福地源一郎等と帝政黨を組織し、十九年圖書頭に任ぜられ、次で歐行し、二十三年元老院議員より貴族院議員に任ぜられ、三十二年八月十九日歿す。年六十九。作樂の獄中にあるや、藥の滓に梅子を交へて墨を爲し、鼠の鬚と竹の皮を集めて筆を爲し、死刑あらんことを豫期して書したる辭世あり、曰く、

事ならぬ名を残すこそ薄命なれ

丈夫吾躬死ぬと雖

窓村竹

江戸の俳人なり。多田氏、名は敏包、通稱は千次郎、別號を青岬堂と曰ふ。幼より讀書を好み、弊衣惡食恬然たり。年五十を過ぎて名大に顯る。一日堪忍といへる一題にて、六時の間に百首の歌を詠じ、堪忍百首といへる書を編す。其紙尾に又別に一首の道歌をかけり、(堪忍をして其の跡のはちまきの抜殺

をみる人の世の中。文化七年十一月歿す。年八十二。辭世に曰く。

詩も歌も達者な内に讀でおけ

迎も辭世は出来ぬ死ぎは

正岡子規

俳人なり。名は常規、伊豫松山藩の人。明治二十三年東京帝國大學に入り、二年にして廢す。日本新聞に入り、俳話を紙上に連載す。世に之を日本派と稱し、新派の秋聲會派並に舊派とを分つ。明治二十八年日清戦争に従軍記者として、金州旅順を經行す。是より先肺を疾む。歸朝療養中、二十九年に至り脊髄病を併發し、脚立たず、而も死に至る迄、一日も筆を絶たず。三十五年九月十九日歿す。年三十六。明治の新派俳諧隆盛に至りし功績は、子規興つて大に力ありと云ふ。辭世に曰く。

糸瓜咲て痰のつまりし佛かな

をとゝひの糸瓜の水も取らざりき

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

十寸見河東 初代

河東節の元祖。江戸品川の豪家天満屋藤左衛門の男なり。姓は伊藤、十寸見堂と號す。通稱藤十郎、河東は其號なり。稟性宕落不羈にして、酒色度なし。産を敗りて淨瑠璃を學び、其蘊奥を極む。其師半太夫の節を轉じて一風を爲す。河東節是なり。享保十年七月二十日歿す。年四十二。辭世に曰く、
引よせて腰より下の柳かな

間崎滄浪

土州の人。通稱哲馬、則弘と稱す、滄浪は其號なり。幼にして敏慧、嬉戯度あり、人皆之を異とす。四歳孝經を誦し、六歳四書五經を讀み、七歳詩を賦し、文を作る。藩士細川潤次郎、岩崎惟謙と同齡其名を齊ふす。藩人稱して三奇童と云ふ。十六歳江戸に至り、安積良齋の門に入り、學業日に進み、塾長と爲り、十九歳家に歸る。居を土佐郡江の口村に卜し、帷を下し、母を養ふ。來り遊ぶ者無慮數百人、教授の傍ら簡牘を作るに、千言一揮文勢流るゝが如し。其學力に於る、當時の老師、宿儒と雖も、亦た適に其下流に居ると云ふ。人と爲り、豪放不羈、頗る酒を嗜む。某歲擧られて徒士となり、屬吏に任ぜ

らる。其時弊を論ずる頗る剴切、俗吏の爲めに構陷せられ、遂に其職を免ぜらる。此の時に方り、尊攘の議盛にして内外多事、滄浪江戸に至り、山岡鐵舟等と交を結び、國運を挽回せんことを謀り、周旋甚だ力む。文久三年幕府老侯をして國事に參與せしむ。是に於て、侯大に藩制を改革し、以て國家に竭すことあらんとす。滄浪京師に抵るに及び、平井義比(隈山と號す)に就て之を謀る。義比粟田宮の厚遇を受くるを以て、義比に介し、行て宮に謁し、以て其事情を陳し、老侯に諭すに手書を以てせられんことを請ふ。宮之を諾し、乃ち朱書して曰く、藩政を改革し、門閥の如何を問はず、人才を登庸するは、當時の急務なり云々、以て滄浪に附す。滄浪感泣拜舞して歸國し、旨を老侯に傳へ、繼ぐに宮の手書を以てす。藩議爲めに動く。然るに老侯久しく外にありて藩政を視ず、且つ在職の徒、滄浪の微賤より起り以て藩政に與るを嫌忌し、之を排斥せんとす。竟に人を遣はして、竊に手書の事を宮に質さしむ。宮答ふるに滄浪等の請ふ所に任すと云ふを以てす。滄浪時に京師に在り、老侯より詰責せられ、義比と共に本藩に護送し、皆死を賜ふ。聞く者痛惜せざるはなし。滄浪慷慨悲憤、家國に竭すもの終始一の如し、天保五年を以て生れ、慶應三年六月八日死す。年三十。明治廿四年從四位を贈らる。辭世に曰く、

易簀結纓同一悲 男兒至死好容儀
忠魂不與白雲滅 掛在公家無字旗

丈夫今日死何悲 略見聖朝復舊儀
一事獨殘千歲恨 京畿未樹栢章旗

守る人のあるか無きかは白露の

おきわかれにし撫子の花

眞木保臣

和泉と稱す。筑後の人なり。文久二年亡命して薩藩に奔る。會々島津久光、内旨を奉じて京に入る。處士頼て以て事を擧げんとし、保臣を推して盟主と爲し、旅を整て伐見に至る。久光其暴戻を怒り、之を止めしむるも處士肯せず、遂に保臣を其藩に幽閉す。明年に至りて赦に遇ふ。時に藩主保臣を延見し、詰問する所あり、薩藩に赴かしむ。護人等を構へ、坐して幽閉せらる。中山侍従人を遣はして救はしむ。長門津和野の二藩亦之を容さんと請ふ。朝命あり、釋されて長門に送付せらる。是に於て京師に上り、公卿の間に周旋し、最三條公の信任を得、既にして議定り、幕府の罪を正さんとせしに、事敗れて七卿西下す。保臣之に従ひ、専ら帷幄に參ず。明治元年姓名を濱忠太郎と變じ、長藩の家老福原元調に従ひ

京に上り、久坂玄瑞等と天王山に據り。戰敗れて自刃す。時に年五十三。明治廿四年四月正四位を贈らる。辭世に曰く、

惜まれて玉とちる身はいさぎよし

瓦と、もに世にあらんより

後れなば梅や櫻におとるとも

さきがけてこそ色も香もあれ

袈 婆

源渡の妻。母を衣川の老嫗と曰ふ。袈婆容姿端麗、上四門院の雑仕と爲る。未だ算するに及ばずして、左衛門尉源渡に適す。閨門雍睦、遠藤盛遠嘗て出でて事を監す。路に一女を見て之を艶とし、神恩恍惚、跡を蹤みて行く。始めて渡の妻たるを知る。寤寐忘るゝと能はず、衣川の家に至りて劫して之を請ふ。衣川驚惶して詭はり謝して曰く、汝幸に我を釋さば則ち今夕彼を以て見せしめんと。盛遠固く約して去る。衣川袈婆を召して之に小刀を授け、泣て曰く、亟に我を殺せ、袈婆大に驚て曰く、乃

ち心を喪ひ狂を病むなきかと。衣川具さに告ぐるに狀を以てし、曰く、若し彼の請を聽さざれば、我必らず害に遭はん。其彼の手に死せんよりは汝の手に死すに如かずと。袈婆悲泣して以爲らく、子の親に代るは固と其分なりと、乃ち謂て曰く、兒善く之に處せん、復た憂ふる勿れと。日既に暮る。盛遠至る。袈婆迎接し、伴て相悦ぶ爲れす。既にして辭せんと欲す。盛遠刀を露はして迫り脅かして曰く、汝終に從はざれば我必ず汝とを殺さん。袈婆始て曰く、妾實に辭せんと欲するに非ず、以て君の志を觀るのみ、妾渡の家に在る意に稱はざる多し、數々奔り歸らんと欲す、然れども母の命に忤ふに忍びず。還延今に迫ぶ。君の志誠に切ならば則ち速に渡を殺せと。盛遠大に喜ぶ。袈婆約して曰く、今夜我れ渡をして髪を沐し醉臥せしめん、君潛に臥内に入り、新たに沐する者を認めば之を殺せと。盛遠諾す。袈婆歸て渡に謂て曰く、妾嚮に母の疾を以て歸省す、今疾癒ゆ、請ふ共に歡飲せんと。渡醉ふ。袈婆扶て臥さしめ、自ら髪を濡ほし、詭り服して男子の裝を爲し、席を隔て臥す。夜半盛遠首を斬りて去り、之を見れば則ち袈婆なり。盛遠大に悲恨し、首を提げて渡の家に至り、實を告げて死せんことを請ふ。渡曰く、事既に此くの如し、汝を殺すも益なし、加かず僧と爲りて其冥苦を贖げんにはと、則ち髪を削る。盛遠も亦た僧と爲る。僧文覺是なり。衣川號哭して幾んど絶す。遺書を篋中に得、辭甚だ俊梵、盛遠其屍を瘞め、爲めに墳を起す。世呼びて鳥羽戀塚と云ふ。辭世に曰く、

露ふかき淺茅が原に迷ふ身の

いとゞ暗路に入るぞ悲しき

徑童一世

京都の俳人なり。姓氏詳ならず。中井仙徑の門人なり。一睡庵、又和合院と稱す。寶曆の初年、壯歲にして歿す。辭世の句に曰く、

死る目は尙面白し閑古鳥

徑童二世

京都の俳人なり。氏は佐々木、初世徑童の門人なり。初め湊竹といふ。師歿後、師名を續て一翠庵と稱す。天明七年四月七日歿す。年七十。辭世に曰く、

故郷への晴れや卯月の花鳥も

月照

名は忍向、洛東清水寺成就院の住僧なり。才智慧敏、夙に佛法の意を得たり。常に慷慨尊王之志を懷き、嘉永七年職を弟に譲る。米人浦賀に来るや、物情騒然たり。月照諸公卿の門に出入し、倒幕の論を

唱へ、頗る王事に勤む。幕府月照を忌み、之れを捕へんとす。近衛忠熙之を憂ひ、命じて難を避けしむ。戊午十月十五日夜將に半ならんとす。西郷隆盛旅装して月照の寓を訪ふ。眼光炬の如く、憂憤の色面に顯はる。嘆息して曰く、幕府師兄と平野國臣を搜索する急なり、我參政諒旨して師兄等を日向に避けしめむ。月照曰く、日州は我が死所なり。我幕府の誅戮を受くるを屑とせず、通れて此の地に至る、今事已に迫る、余が頭已に子が一劍に托す、苟も同志の手に死せば遺憾なし。隆盛悲憤投海の約を爲す。時に國臣來る。隆盛陽言して曰く、捕吏來る、速に難を避けんと、行李を促がして僕重助と四人、船を御船崎に懸す。潮逆にして舟進まず、此夜恰も望月にして、天晴れ月明かに、銀波濼々湧くが如し、四人宴を開き、環酌杯を回らす。隆盛曰く、今夕の宴、其の談慷慨に渉るべからず、唯宜しく快活の懷を舒べ、相慰むべしと。吟賞酒酣なり。月照起て船表に出で、月を仰ひて和歌を詠じ、之を隆盛に示す。隆盛取りて之を見、また可否を云はず、徐かに之を懷に收む。其歌に曰く、

大君の爲めには何か惜からん

薩摩の海に身は沈むとも

曇りなき心の月の薩摩海

沖の浪間に今ぞ入りぬる

隆盛亦船表に出で、月照と共に近島を指して風景を賞す。國臣重助之を怪ます。忽ち水聲の浪然たるを聞く、國臣等駭き視れば、月照隆盛と共に海中に投せり。國臣急に舟子に命じ之を援けしむ。事急なるを以て二人已に絶息す。火を焚て之を暖め、藥を與ふ。隆盛は蘇生したるも、月照は遂に死せり。時に年四十有六。明治二十四年十二月正四位を追贈せらる。

月 筌

字は崇信、別號を難思諱弗知と稱す。浪華天満に生れ、九歳にして剃髮す。其の師父諸方に遊化するが故に、月筌幼にして寺務を攝し、毎歲夏秋の間、門葉を巡化すること百餘村、蒸暑霖雨と雖も懈ることなし。十六歳定專坊に住持し、佛閣を輪奐にし、門徒を教朔し、業益々進む。享保六年退隱す。年四十六。其後絶て世事に關せず、近隣といへども其面を見るものなし。十四年十一月二日門弟に示して曰く、「古云く吾道一以て之を貫くと、其の所謂一とは、唯は佛祖の冥加を知るのみ」と。同十五日寂す。著書多し。壽五十有九。辭偈に曰く、

脱破草鞋 登蓮華臺 園林遊戯 快哉快哉

月 嘯 虎 白

加州の人なり。同國寶圓寺の傑、外室中稱して上首とす。出で、龍州諸獄寺に主たり。遷て太巖寺に居す。萬治三年寶圓寺に歸栖し、廢廟を改め、經度甚だ力あり。元祿三年八月二十日寂す。遺偈に曰く、

生來鏡裡像 死也水中月 更要問端的 金剛嚼生鐵

原 松

江戸の俳人なり。氏は加藤、常陸笠岡に生る。榎本其角に俳諧を學ぶ。後伊勢安濃津に學び、遂に伊賀上野に至り住し、老後京師に出て點者となる。禪を近江福壽寺の覺芝に學び、剃髮して虎巖居士と稱し、猩猩庵と號す。寛保二年正月五日妙心寺の僧來て骸骨の養を請ふ。原松左の辭世を出し、筆を抛て歿す。年五十八。

墓原や秋の螢の二つ三つ

曉 月

連歌の名家なり。名は冷泉爲守、爲相の弟、始め和歌を詠じ、後に狂歌を嗜む。遠くなり近くなるみの濱千鳥鳴音に潮の満干をぞしるの歌は、人口に膾炙するところなり。嘉曆三年歿す、年六十四。辭世に曰く、

六十路あまり四歳の冬の長き世に

浮世の夢をみはてぬるかな

敬光

天台宗の僧にて、山城の人なり、姓は伊佐、字は顯道、十一歳にして園城寺に入り、内外の典籍を研磨し、文藻豊富なり。明和六年僧職を辭したるも、寛政六年に至り法明院に移り、講學懈たらず。同年八月二十二日歿す。年五十五。遺偈に曰く、

西方即是唯淨土 一句了竟無死生

無死生中說生死 無東西裏送此行

契聞

高僧なり。字は不聞、武州河越の人。鎌倉に行き、東明和尚に圓覺寺に投じ、童役に就く。東明之法華を教ゆ、六日にして暗誦す。十四歳にして髮を削り、叡山の戒壇に入る。正中二年支那に遊び、請益するところ多し。九年歸朝して圓覺寺に入り、後ち駿河清見寺に出世す。將軍足利義隆聘して建長寺

を補せしむ。應安元年七月十二日化す。年六十八。遺偈に曰く、

也太奇也太奇也 末後一句無人知

大洋海底遭火熱 虚空産下木羊兒

元選

字は無文、後醍醐帝の皇子なり。僧と爲りて元に入り、歸朝後美濃に居り、京畿を經歷し、遠州の人奥山朝藤其徳を慕ひ、就て學ぶ。元中元年井伊谷の奥山に入り、衣晡山に登り、姥懷山を望みて曰く、山地幽邃天台山に似たりと。朝藤乃ち一寺を建て、居らしむ。後ち美濃に赴き、又奥山に歸る。七年閏三月奥山方廣寺に寂す。年六十八。遺偈に曰く、

生平顛倒 今日即當 末後一句 雪上如霜

生如出岫雲 死似行空月 一念認性相 萬劫擊驢楸

景春

○

字は震龍、武藏の人。幼にして落髮し、道念頗る深し。永正十二年五月武州法性寺第二代と爲り、天文八年十二月二日寂す。年八十二。遺偈に曰く、

陽焰空華八十年 心如牆壁眼如眉
如今忘却來時路 呵呵呵進退谷之

啓 原

字は大初、禪僧なり。九歳剃髮し、十九歳明國に至る。永樂五年三月一日偈を遺して寂す。時に我朝應永十四年なり。年七十五。辭偈に曰く、

生成鐵面皮 死成鐵面皮 一椎百雜碎 白日遠鐵圍

桂 節 宗 昌

禪僧なり。駿河安倍郡の人。俗姓豐島氏。年十二にして遠州雲林院に投じ、削髮す。雲岫の道盛なりと聞き、就て學ぶこと十餘年、甲州龍華院の創建せらるゝに方り、其始祖と爲る。明應五年歿す。年九十六。遺偈に曰く、

漂泊苦界 九十六年 脫却蓑笠 明月滿船

藤 田 小 四 郎

名は信、東湖の第四子なり。性英敏にして大志あり、居常皇運の陵運を憂ひ、外人の驕傲を憤り、挽回掃攘の策を立つること日あり。文久二年水戸藩主に扈從して江戸に至り、爾來王事に勤む。後ち姓名を變じて小野城男と稱す。榊原照照等幕下に自首するに及び、武田正生等と議して京師に至り、天關に伏し、哀情を訴へんとす。乃ち西上して越前新保驛に至る。會々加賀の藩士長原甚七郎京師より國に歸り途に相逢ふ。城男等其兵の衆を意ひ、其大藩なるを以て、由りて素志を遂ぐるに便ならんと信じ、一封の書を贈て降る。幕府命じて敦賀邑に禁囚す。慶應元年二月四日斬罪に處せらる。刑に臨み從容文天祥の正氣歌を朗吟し、未だ編を終らずして刃せらる。年二十四。明治廿四年從四位を贈らる。辭世に曰く、

兼てより思ひ染にし言の葉を
今日大君に告げて嬉しき

藤 本 鐵 石

名は眞金、鉄寒士又は都門賣茶翁と號す。備前の藩士なり。意致瀟洒、骨格俊異、人と交る信を盡し

義を厚くす。文久三年朝廷大和行幸及夷狄親征の議を決す。鐵石翁に松本奎堂、吉村寅太郎等と謀り、侍從中山忠光を奉じて義兵を擧ぐ、接戰數次、十津川に赴かんとす、幾くなくして十津川の郷兵逃れ去る。鐵石憤慨和歌を詠じて曰く、十津川の片腹黒き鮎の子は落て何國の瀬にや立ちらん。是に於て、陣營を天の辻に定む。鐵石陣中に在て鬱屈に堪へず、乃ち濠谷伊與作をして軍將中山侍從の使と稱し、津藩主藤堂高猷に説かしむ。言辭激烈、書中我の軍鋒に敵するの事由を詰問す。津藩伊與作に酒を飲ましめ、その醉を窺て之を縛す。鐵石大に怒り、津藩の營を敗る。津藩其暴擧を責む。鐵石答へて曰く、吾晋の外形、或は以て朝敵に似たりとなす者ありと雖も、志の勤王に出づる天地神人の知る所、卿等は外形官軍に似て實は朝敵たること亦天地神人の知る所なり、云々。藤堂大に怒り、天の辻に迫る。鐵石忠光をして退去せしめ、火を陣營に放ち、奮闘激戦十數人を斃す。津藩の督長某槍を揮て鐵石の左肋を刺す。鐵石終に斃る。年四十七。實に文久三年九月十五日なり。明治廿四年從四位を贈らる。辭世に曰く、

雲をふみいはほさくらむ武士の

よろひの袖に紅葉かつちる

藤井竹外

攝津の詩人なり。名は啓、字は士開、別號を雨香仙史と云ふ。賴山陽に學び、森田節齋と交り善し。

家世々高槻藩の名族にして、銃砲を善くす。然るに詩人を以て自ら居り、當時の碩儒皆推服して一世の冠冕と爲し、絶句竹外の稱あり。芳野懷古の一絶尤も人口に膾炙す。曰く、古陵松栢吼天驚、山寺尋春々寂寥、眉雪老僧時轉帶、落花深處說南朝。別に風雨望寧樂の詩あり、曰く、半空湧出兩浮屠、更有伽藍俯九衢、十二帝陵低不見、黑風白雨滿南都。此詩、低の一字數年の推敲に成れる名篇と傳ふ。晩年官を棄て、京師に寓す。慶應二年七月二十一日歿す。年六十。墓田を長樂寺櫻樹の下に闢き、偈を作りて曰く、

好個墓田無一塵 名山自古葬詩人

斯身化作花間土 風雨留香春復春

藤森弘庵

江戸の儒者なり。名は大雅、字は淳風、恭助と稱す、弘庵は其の號、又天山と號す。少にして學を好み、志操を磨厲し、下位に在りと雖も天下の憂を忘れず。弱冠にして父の後を承り、祐筆となれり。嘉永六年米糧來りて互市を乞ふや幕府凝議して出づる所を知らず、弘庵憤激して海防備論二卷を著す、安政中幕府大に論者を捕ふ。世之れを戊午の難と云ふ、弘庵之れに與る。夷然として曰く、吾れ范滂と偕に地下に遊ぶを得る亦一快なり。且死生命あり、吾將に命を棄て、以て天定まるの日を待たんとすと。

是の時井伊直弼弘慶の名望言論大に人心を鼓動するに足るを以て之を惡むこと甚し。吏乃ち處するに重刑を以てせんとす。然れども其實なし、乃ち之を逐ふ。弘慶逐はれて後田野に隱居す。聲價盛々重し後ち黨禁弛み、政令稍々寬なり。弘慶特に赦されて歸り、病に臥す。文久二年十月歿す。年六十四。明治二十四年十二月從四位を贈らる。絶命の詩に曰く、

伏枕期年鶴骨支 每聞時事思如絲

空餘滿腹經綸策 把事空書絶命詩

藤原家隆

光隆の子、幼にして穎敏、和歌を藤原俊成に學ぶ。大に世に著はれ、藤原定家と並び稱せらる。定歌勅を奉じ、新勅撰集を撰するに及び、家隆の歌を採る最も多し、後鳥羽上皇の勅を奉じて新古今和歌集を撰す。前後作る所六萬首。宮内卿に任ぜられ、從二位に至る。嘉祿二年病を以て薨逝し、名を佛性と改む。明年歿す。年八十。辭世なりと傳へらるる歌に、

契あれば難波の里に宿りきて

波の入日を拜みつるかな

藤原俊基

大學頭種範の子なり。才學優長、後醍醐帝の寵眷を得、藤原資朝と共に興復の謀に參す。元弘元年僧文觀鎌倉に虜はれ、具さに朝廷の謀を告ぐるに及び、北條高時人をして俊基を押へしむ。俊基走て築中に匿る。兵士闖入して之を執へ、鎌倉に送る。俊基免れざるを知り、菊川に至り、驛舎の柱に懸して曰く、「古もかゝる例なき川の同じ流れに身をや沈めん」と。承久の時、藤原宗時此の地に於て北條氏の爲めに害せらる、故に然か云ふ。明年帝の西幸に及びて、葛原岡に殺さる。死に臨み偈を作て曰く、

古來一句 無死無生 萬里雲盡 長江水清

藤原資朝

大納言俊光の子。家を日野と號す。才學人に過ぐ、後醍醐帝特に優待す。勅を奉じて鎌倉に使し、還りて權中納言と爲る。帝密に興復を圖り、資朝及び藤原俊基を以て謀主と爲す。土岐賴貞、多侍見國長勇名あり、資朝引て同謀と爲さんと欲す。事の泄れんことを慮り、會聚する毎に、婦女子を待せしめ名づけて無禮講と爲す。宴語款熱、終に計を以て之に告ぐ。既にして事泄る。北條高時人を遣して資朝及び俊基を收らへ、以て鎌倉に送りて侍所に屬せしむ。尋て佐波に流す。居ること七年、高時帝を隱岐

に遷すに及び、佐渡守護本間山城入道をして資朝を殺さしむ。資朝嘗て佛を學び、禪に參じて自ら和尚と稱す。死に臨み偈を書して曰く、

五蘊假成形 四大今歸空
將首當白刃 截斷一陣風

藤原高光

右大臣師輔の子、才思あり、和歌を善くす。村上帝の朝に右近衛少將に任ぜらる。高光志趣高尚にして榮貴を慕はず、將に世を避けんとするに及び、和歌を作りて曰く、「斯くばかり經がたく見ゆる世の中に浦山しくも澄める月かな」と。出家して横川に隱れ、名を如覺と改む。後多武軍に居す。世稱して多武峰少將と曰ふ。正曆五年三月十日寂す。遺偈に曰く、

比來修行念佛業 常願西方極樂界
臨終夕初見三聖 賢愚莫疑淨土教

藤原光親

光雅の子なり。建暦元年權中納言に拜せられ、尋で奥羽按察使を兼ね。光親才學優長にして殊遇を蒙る。後鳥羽上皇北條氏を討つに及びて、極て其不可を諫め、書數十を上る。上皇納れず。是に於て已むを得ず詔書を作りて義時の罪狀を聲す。官軍敗るゝに及び、執はれて斬に處せらる。時に年四十六光親菊川の宿にて誅せられし時、書したる句に曰く、

昔南陽縣菊水 汲下流而延齡
今東海道菊河 宿西岸而終命

藤女

烈女なり。父山口俊平、飯田侯江戸邸の吏たり。侯の妾豐浦美にして才あり、侯深く之を寵す。遂に國政に干與す。大夫安富主計の諫言に依り、黜けられたるも、復召されて宮に入り、名を若山と改め、眷遇益々盛なり。居ること半歳、威權熾灼遂に夫人と闕く。内外切齒せざるはなし。藤其必ず亂階を生ずるを知り、若山を殺さんと欲し、匕首を懷にして其房に詣り、徐に其罪を詰る。若山答ふる能はず、起て將に避けんといす。藤罵て曰く、奸婦汝にして死せざれば、必ず公家を誤ると。匕首を取て之を刺す。父俊平會々直す。疾走して入り、藤を抱き縛せんとす。藤若山を撞倒し、父の手を排して若山の背に乗り、力を極めて之を刺す。父の爲めに縛せられ、土獄に下さる。顔色恬然、人に語りて曰く、憾む

奸婦の喉を刺すに暇あらざりしを。後數日若山創を以て死す。藤の飯田に與送せらるゝや、夫人其忠にして死に就くを憫み、金を與へて身後祀奠の用に充てしむ。候吏をして大不敬に論じ、斬に處す。藤刑に臨んで少閑を請ふ。吏曰く汝死を畏るゝか。答へて曰く、妾月事あり、醜を死後に貽すを恐る。願くは之を淨し、然る後刑に就かん。吏之を允す。己にして厠を出で、從容合掌して坐す。創手其目に巾せんとす。藤微笑して曰く、妾亦武人の家に生る、何ぞ目に巾するを煩さん。吏曰く首側つ、且之を直くせよ。乃ち櫛を取り、髷髪を梳し、衣襟を寛うし、端坐して斬らる。觀る者感嘆せざるはなし。時に年二十二。天保庚子十二月二日なり。初め阿波侯は侯家と姻あり、藤の忠烈を聞き之を活さんと欲し、百方侯に説く。久うして之を聽き、是日敕書至る。藤既に死せり。衆益す之を悼惜す。有司屍を長源寺に葬る。藤の刑に就くや、歌一首を賦して曰く、

信濃なる山路の雪ともろともに

春をも待たで消ゆる今日かな

藤村 操

南部の人、文學博士那河通世の甥なり。第一高等學校在學中、宇宙一切の現象を否定し、明治三十六年五月二十二日、華嚴の瀑に投じて死す。大樹の幹に記せし絶命の詞に曰く、

巖 頭の 感

悠悠たる哉天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとす
ホレーシヨの哲學竟に何等のオンスリチーを値するものぞ。萬有の眞相は一言にして悉す、曰く不可解。我此恨を懷て煩悶遂に死を決するに至る。
既に巖頭に立つに及んで、胸中何等の不安あるなし。始て知る大なる悲觀は、大なる樂觀に一致するを。

福原越後

名は元圃、長藩の世臣なり。文久元治の交、國內多事、朝野騒然、幕府朝旨を矯めて外夷を納んとす。藩主建議し、切に攘夷親征の策を固執す。朝廷却て藩主を誤解す。元治元年正月二十一日を以て所謂「反覆之繪旨」下る。是れ朝議急變せるが爲めなり。長藩志士深忠太郎、久坂義助、來島又兵衛、寺島忠三郎等主謀と爲り、京師に奏請する所ありとし、元圃を擧げて首領とし、兵を率ひて上京し、藩主父子の罪を赦し、三條以下七卿の復職を請ふ。充さず。元圃嵯峨に退き、志士を懇諭す。是れ此舉本よ

元朝の眞意に非ざればなり。而かも志士元朝の言に従はず。曰く杉平容保を居り、帝側を清めんすんば生還を期せずと、既にして會薩二藩の兵、長藩の兵を挾撃す。元朝遂に起つ。征長の激茲に下る。尾張慶勝總督たり。藩主恭順元朝の首を斬つて朝廷に謝せんとす。偶々外夷馬關に來襲す。元朝慮らく京師の事、元より末事なりと、乃ち急遽京を棄て下る。途に藩兵の爲めに執へらる。元朝嘆じて曰く我事畢る。只最後の事、藩主の爲めに罪を朝廷に解くにあるのみと。載ち自裁す。藩主慶親其首を獻じ征長の師を喪す。明治廿四年正四位を追賜せらる。辭世に曰く、

くるしさはたゆる我身のゆうげむり

そらにたつ名はすてがてにして

福谷好長

本姓多良氏、林兵衛と稱す。周防徳山の藩士なり。元治元年七月十九日京都に戦死す。行年詳ならず。辭世に曰く、

國のためいはほもくたく心もて

あとへはひかじ大和魂

福田鳴鶯

徳川氏の末に「バタヴィヤ」新聞を發刊し、我邦新聞事業の鼻祖として知られたる東京々橋區弓町福田敬業其人也。明治二十七年八月二十三日没去せんとするとき、急に筆を呼びて書き付けたる文に曰く

鳴鶯草衣福田敬業本日泉路に登程す。生前凡骨、逝後神佛に歸すべき靈に

あらず。因て神佛祭事を要せず。直に火葬場に於て焼き棄て、骨灰を遺さ

ず、墓地を設けず候に付。舊知諸君の來葬を謹で謝絶す。

福井小次郎

京都の人なり。四歳にして母を辭す。父を源左衛門と稱す。備前富岡の城主浦上則國に仕ふ。文明十五年十二月山名俊豊、松田元就兵を合せ、備前富岡城を攻めんとし、先づ兵を富岡に出す。兩軍殺傷相當る。小次郎父と城中に在り、父子亂軍に隔てられ、城に入りて求むれども相見ず、小次郎又出で戦ひ、遂に斃る。身に受る創二十六ヶ所、後ち父其篋中を檢するに、母氏に贈る遺書あり。其末に辭世の歌あり。

生れ來し親子の契いかなれば

同じ世にだに別隔らん

淵上謙三

勤王の志士なり。諱は祐利、通稱三太郎、後ち謙三と改む。筑後國永田村の人。兄郁太郎と江戸に行き、大橋順藏の門に入る。寺田屋事件に坐して國に放逐されしが、後ち許されて三條家の守衛となる。文久三年八月條公三田尻に遁るゝや、隨從し、翌元治元年七月久坂義助等と京師に上り、毛利家の冤を訴へんとして、軍敗れ、再び長州に遁れ歸り、慶應元年二月條公に屬し、太宰府に移る。此頃兄郁太郎は幕吏に捕へられ、志士の内情を密告したりとの風聞あり、同志の士又謙三を疑ふ。謙三大に憤懣し、同二年十一月十日左の二句を遺して自刃す。時に年二十六。明治三十五年從五位を贈らる。

满腔赤心不自疑 一死長爲忠義鬼

不白軒梅年

俳諧の大家なり。本名原田幸次郎と稱し、文政四年江戸四ツ谷鮫ヶ橋に生る。幼にして商家の徒弟た

りしが、性俳諧を好む。五世雪中庵の門に入り、梅年と稱し、出藍の譽あり。明治七年師命及び同門に推され、雪中庵八世を襲ぎ、専ら新道の爲めに提擧す。二十一年退隱して不白軒と稱す。三十八年一月十二日逝く。年八十五。辭世の句あり、

暇乞我が己の春の來りけり

文車庵文員

狂歌師なり。三河の人、通稱を福田林兵衛と云ふ。葛飾蟹子丸の門人なり。天保三年五月六日歿す。年五十。辭世の歌に、

程遠き死出の旅路は諺の

かねのわらぢをいかではくべき

文巖

永原寺の住僧なり。字は如雪。年甫めて六歳、恒に菩薩の像を影畫するを以て戯と爲す。閩里嘆異す。寛文元年大納言資慶、祖父の冥福の爲めに法雲禪院を洛西に營み、文巖を請じて開山と爲す。文巖無

徳を以て辭し、先師一絲を以て第一祖と爲し、自ら二世に居る。履踐眞實、節戒尤も嚴なり。獨り一室に處すれども萬衆に臨むが如し。常に示して曰く、佛法を學ばんと欲せば、須らく誠信を具して、生死の大事を究命すべし。苟も誠信無くば、復た大事を究明する能はず。假令學内外を究め、名湖海に揚るも、奚んぞ益あらんや。爾等告言を信じて、吾法に遵はば、庶くは出家の志に負かず、爾らされば吾徒にあらざるなりと。同十一年四月十八日寂す。年七十一。病革まるや、左右遺囑を請ふ、即ち筆を索めて書して曰く、

幻生幻滅 本無去來 虚空破裂 大地骨堆

文 清

美濃全昌寺の主僧なり。俗姓は佐藤。彦根の人。十歳にして剃髮し、智徳大に進む。法を白峯に得、永平寺に出世す。大垣の城主月田氏定請じて全昌寺に居らしむ。晩に退隱閑居す。享保丙午三月二日死す。終に臨み偈を作りて曰く、

老翁八十又八歳 端的身心俱脫空
蕩豁太虚無罣礙 塵々都莫不圓通

深草元政

平安の人。姓は菅原。幼名を俊といふ。後源八郎と改む。別に妙子、不可思議、泰堂、霞谷山人等の號あり。幼にして穎異、年十三、井伊直孝に仕へ、二十六歳辭して僧と爲れり。人と爲り精力絶倫、博學強記、詞章を善くし、國學に通ず。居を深草に占め、持律甚だ嚴なり。少しも袈裟を解かず、兀坐蒲經、人來りて道を問へば、詳々開示す。人皆風靡せざるはなし。世人目して如來の化身とす。明の歸化人陳元贊と心機契方外の交を爲す。又熊澤蕃山を友とし善し。元政親に仕へて至孝、著書頗る多し。寛文八年二月十八日寂す。年四十六。辭世に曰く、

わしの山つねにすむてう嶺の月

かりにあらはれかりにかくれて

石井常右衛門は元政の前身にして、妓高尾の情事に依り出家したるの説あり。是れ元政の父元好の姓を石井と稱したると、元政が美男なりしを以て小説に作爲したるものにして、世に元政の辭世と傳へらる。深草の元政坊は死なれり吾身ながらにあらはれりけり」の如きも、後人の偽作なりと云ふ。

深瀬繁理

諱は維正。大和十津川の人。安政五年梅田源次郎等と相謀り、義兵を擧んとし、梅田捕はれて其志を達せず。文久三年中山忠光等の五條に於て兵を擧るを聞き、其群に投じ、津藩の爲に捕はれ、其年十一月斬に處せらる。明治二十四年正五位を追賜す。辭世に曰く、

あだしのつゆと消えゆく武士の

みやこにのこす大和魂

吳山堂玉成

江戸の俳人なり。姓は安川、名は平左衛門、初め京橋に在り、後千住に住す。吳山人、遊戯道人等の號あり。酒肆を以て業とす。身自ら爐に當り、褐寬博を被り、犢鼻褌を着け、時に來り飲む者あれば、濁膠柔羹、股動扶持すること大賓を遇するが如し。而して其他風俗鄙猥、來り飲む者は賭客遊漢、其酒酣にして醉極まれば、狂態亂舞、載ち嗽し、載ち號び、或は喧嘩相搏し、或は舌を奮て叱咤す。且地花街に接し、絲竹の聲、晝夜絶えず、而かも玉成人となり恬靜寡欲、酒涓滴の量なし。所謂衆人皆醉我獨り醒むる者、蓋し其人なり。相間に扁して吳山堂と曰ふ、松平確堂の書して與へしものなり。確堂は貴顯を以て世の推重する所たり。是を以て玉成の名聲籍甚たり。嬰庭篁村、名倉村翁等と交を結ぶ。玉成汎交を好むも未だ且て世の所謂宗匠と相往來せず、蓋し其多くは名を韻事に托して貪婪飽、無きな

惜むなり。明治三十一年五月歿す。年六十餘。辭世の句、

涼さやばくり隠るゝ都鳥

小西來山

小西行長の苗裔にして、明暦元年泉州堺に生る。性敏にして讀書を好み、俳諧を善くす。年二十に満たずして詞宗と爲る。十萬堂、又湛々翁と稱す。家貧にして酒を愛し、晩年に及んで攝南今宮村に移り、俳文を集めて今宮草といふ。享保元年十月三日歿す。行年六十三。辭世に曰く、

來山は生れたとがで死ぬるなり

それで怨みも何もかもなし

小島入々

幕府旗下の士にして俳人なり。武太夫と稱す。本所林町に住す。日光勘定役を勤め、後金藏奉行たり。明治元年六月歿す。年三十七。辭世に曰く、

二つ來て死を争ふや火取虫

五 岳

姓は平野、名は聞慈、古竹と號す。豐後日田願正寺に住す。廣瀬淡窓に學び、一家を爲し、詩書畫三絶の稱あり。寸線尺素、人得て、拱壁に比す。明治二十六年三月三日寂す。年八十五。辭世に曰く、

邪魔になる自力をすて、今は、や

彌陀の御國のたのもしきかな

弘 智

眞言宗の僧なり。下總の人。姓を兒玉と云ふ。越後の彌彦山に登り、三寶鳥の聲を聞き、海雲山の岩坂に至りて幽居し、養智院と號す。貞治二年十月二日寂す。辭世の歌に、

岩坂のあるじは誰ぞと人間は、

すみゑにかきし松風の音

孤 燈

京都の人にして、淨土宗の僧なり。才藝を誇り素行修まらず。文化三年八丈島に流され、五年火災の爲めに傷けられ、滿身惡瘡を發し、眼疾にかゝる。乃ち前非を悔い、發憤念佛す。十年四月十二日寂す。年四十六。辭世に曰く、

風自清凉心上來 門前猛火化爲臺

行程十萬唯彈指 到日無生亦樂哉

近 衛 尋 子

近衛信尋の女、徳川光圀の妻なり。萬治元年歿す。年二十一。辭世に曰く、

音にのみ聞きしも今日は身の上に

わけや登らん死出の山みち

近 藤 治 郎 太 郎

諱は爲美、幼名久彌、土佐の郷士なり。尊攘の論盛なるに及び、大に力を時事に盡し、元治元年清岡道之助等と献旨の策を謀り、野根山岩佐に屯集し、遂に阿波の牟岐浦に於て拘留せらる。而も清岡等と

同盟の藩士に代り、哀願書を呈せしを以て、藩吏の憤む所と爲り、九月五日斬に處せらる。時に年二十五。明治三十一年正五位を追贈せらる。辭世に曰く、

君がためつくせしことのかひぞなき

あしたのはらの露ときゆる身

虎林

俗姓吉井、哮喘、運栖の號あり。肥前の人なり。幼にして得度し、明治八年瑞光院に住持し、二十四年宗派總裁に任ぜられ、三十三年六月管長に任ぜらる。黄檗山第四十一世なり。三十五年十月十五日寂す。年六十八。遺偈に曰く、

四大非吾身 三界非我處 拾得一文錢 悠悠入酒肆

古嶽宗巨

紫野大徳寺七十八世の僧なり。俗姓佐々木氏、江州蒲生郡の人、八歳にして嚴問寺の義濟に投じ落髮す。二十三歳春浦に參す。久ふして契はず。實傳に如意庵に謁す。參究二十年、實傳世尊拈華の因縁か

擧ぐ。宗巨曾下に於て悠然として悟入す。永正六年詔を奉じて大徳寺に出世し、天正十七年六月二十四日寂す。年八十四。遺偈に曰く、

柱杖覓末後句 倒擲萬仞龍峯 請汝試卓破看 滅却臨濟正宗

巳斐豊後守

天正十四年豊州の太守守田元繁の毛利元就を今出山に討つや、豊後守(傳詳かならず)香川行景と元繁に屬し、奮戦して敵中に斃る。時に年六十一。元就其死を惜み、圓光寺に葬る。辭世に曰く、

残る名にかへなば何かをしむべき

風の木の葉のかるき命を

榎本其角

本姓は竹下、近江堅田の人なり。父を榎本東順と曰ひ、醫を以て某侯に仕ふ。其角始めの名は順賢、父の業を繼ぎ、又書を善くす。佐々木文山を師とし、後ち米南宮を喜びて、別に機軸を出して自ら寶井晉齋と號す。其の俳諧は即ち芭蕉を師とし、世の爲めに推さる。所謂十弟子の首なり。然れども酒を好

みて放蕩、生業を事とせず、江戸に來りて其友服部嵐雪、小川破笠と同居し、三人一被を共にして手足皆露はれ、飯毎に唯蔬菜一味のみ、而かも嘯傲自若たり。居ること數年、聲名大に興る。儒居徂徠に鄰す。嘗て俳歌を賦して之を嘲る。志識超卓、大儒徂徠の如き者を視るも音に涕唾のみにあらず。赤穂の義士大高忠雄は其俳友たり。(其角の書簡あり、忠雄の部に詳なり) 寶永四年二月三十日歿す。年四十七。辭世に曰く、

鶯の曉寒しきりぐす

延 清

京都の俳人なり。氏は志水、恕匠子と號す。後出家して日柳と號す。享保十九年五月十六日歿す。年六十九。辭世に曰く、

いつとても息引とるが身の歳暮

延 壽 太 夫 四 代 目

江戸の人、清元の家元にて名匠とす。氏は齋藤、名を新平と云ふ。初め千茂登太夫と稱し、四代目延壽太夫の名を襲ふ。明治三十七年三月八日歿す。年七十三。辭世の句、

氣はかろし接木仕遂げてひち枕

英 舜

越後柏崎極樂寺の住職なり。姓は漆氏。子弟を教養すること始終一日の如し。明治十三年八月病を得、絶食三十餘日、十月十四日七十二歳にて往生を遂ぐ、死に先づ數日、筆を執り、臨終、述懐を書して曰く、

予年已に七十二歳、古人の諫めをかへりみず、只世の中の戯れに心を寄せ、菩提の道も、うとうとしく、是も末世の有様ならん。上代も今の世も、日月の光かはるにあらず、草木の色のあらたまるにもあらず、只我も人も、厭欣の志うすく成り行くを、末世の凡僧といへるにや。今よりも志を改めて、深く二尊の御教に信順し、往生の大事を遂げんとぞ思ふ。
厭へとの教ふる法に背く身も

こゝろばかりは西へかたぶく

辭世三首

志細くもついく白糸の

終りまぢかき北まくらまで

白糸のきれてもつかけ御手の糸に

すがりてかへるもとのふるさと

朝夕にながむる景色なごりをしみ

今日を限りの其の日とぞなる

英朝

字は東陽、俗姓土岐氏、美濃の人なり。文明十三年勅を奉じて大徳寺に住し、後ち妙心寺に轉す。瀧州少林寺の第一世と爲り、永祿元年八月二十四日寂す。年七十七。遺偈に曰く、

涅槃四柱一時拗折、看看珊瑚枝々撐著月、憑甚魔宮化墨魔膽落、喝

江藤新平

佐賀の人。鍋家島の徴臣、人と爲り活潑果斷、三條實美等七卿の太宰府に謁居せらるゝや、藩を脱して之に従ふ。藩主閑叟之を奇とし、維新の後政府に薦す。歴任して明治五年司法卿となる。六年参議に任ず。時に西郷隆盛等と征韓論を主張し、議行れずして内閣を去る。新平事務に熟達し、且つ才幹ありと雖も、性甚だ短急、征韓の議行れざるを怨み、怏々として怡げず。歸縣して佐賀藩士の擁する所と爲り、兵を擧ぐ。連戦利あらず、鹿兒島に去り、援を隆盛に乞ふ。隆盛聽かず。去りて日向に走り、船を織して四國に渡り、舊故に救を求むるも納られず。遂に縛に就き、佐賀に梟首せらる。時に明治七年四月十三日、年四十。刑に就くや、國詩を賦して曰く、

國を思ふ人こそしらめ丈夫の

心づくしの袖の涙を

永機

老鼠堂と稱す。江戸の人。舊名を穂積美之と云ふ。有名の俳人なり。螺絲の門にして、畫を晏川に學び、茶を宗達に習ふ。書に其角に法る。行脚の跡五十餘國に及び、門人千を以て數ふ。明治三十七年一

月十日死す。享年八十二。辭世の句あり、

煙消え灰消えて終にもものもなし

遠藤曰人

仙臺の佛人なり。伊達氏に仕へて大番組たり。名は文規と云ひ、清右衛門又伊豆之助と稱す。竹林舎、不問庵、袖庵、富山翁等の別號あり。其の句奇警にして餘意あり。門人千を以て數ふ。又畫を善くし、筆法雅淡、道氣紙上に溢れ、頗る蕪村の風あり。天保七年四月三十日歿す。年七十九。辭世に曰く、

土金や息はたえても月日あり

行てあはむ孔子貫之義之芭蕉

圓瞿

字は竺堂、京都萬福寺の僧なり。永和四年十月十八日歿す。遺偈あり、

不隨前釋迦 不待後彌勒 出世於中間 分身千百億

慧雲

字は山叟、俗姓丹治氏。武州の人。十七歳にして落髮し、正嘉二年宋に入り、文永五年歸朝後、請寺に掛錫す。永仁三年京都東福寺に住持たり。龜山上皇の寵を受け、北條貞時亦歸依す。正安三年七月九日歿す。年七十五。遺偈あり、

忘去來機 無依獨歸 照天夜月 滿地光輝

慧恩

字は法澤、大和法隆寺の僧なり。禪律を以て名あり、明和八年八月十一日歿す。臨終の偈に曰く、

昨宵織月似挑燈 本無一物何所激

玲瓏空色唯誘引 白髮重頭這病僧

榮助

江州の人、眞言宗の僧侶なり、永應三十一年十月二十一日歿す。年八十三。辭世に曰く、

つひにげに限あるべき命ぞと

思ひしことの今になりけり

手友梅

備中國玉吉城主右京亮政親の子なり。天正二年十二月毛利の軍と戦ふ。時に友梅眼疾に罹り、遂に盲す。弟政貞軍利あらざるを知り、兵士五十餘人を率ゐて敵軍に入り、戦死す。友梅之を聞て、心に生を欲せず、乃ち竹竿を其背に挿み、竿頭に單册を掲げ、左の和歌を書して旗標と爲し、其臣坂下某の肩に懸り、敵軍に入り、大呼して曰く、我頭を斬れと。手に大刀を揮ひ、血戦數合、遂に斬られ、坂下も亦戦死すと云ふ。

闇より闇の道にも迷はじな

心の月の曇なければ

手柄岡持

有名いづれの狂歌師まがらひなり。通稱平澤平格、佐竹侯の留守居役たり。狂歌に淺黄裏成と云ひ、後に手柄岡持と

改む。俳諧に月成、狂時に韓長齡と稱し、龜山人、道徳樓、虎耳嶋等の號あり。老後仕を辭し、剃髮して平荷翁と號す。文化十年五月二十日歿す。年七十九。辭世に曰く、

狂歌よむうちは手柄の岡持よ

よまぬ段には日柄牡丹餅

死たうて死ぬにあらねど御年には

御不足なしと云はゞ云ふらむ

貞佐

狂歌師なり。氏は中村、後水原と改む。一十軒短頭翁と號す。乾貞恕の門人なり。家書御金集解、四鉢辻等の著あり。延享四年十二月六日歿す。年六十八。辭世に曰く、

跡はみずとしの瀬を行く千鳥哉

貞之

京都の俳人、氏は神戶、東林軒と號す。山本四武の門人なり。初は鷗冠井令徳の門人。家書一挺つゞ

み一巻あり。元祿十三年九月六日歿す。辭世に曰く、

朝がほは久しきものよ五十年

貞兼

京都の俳人なり。氏は藤谷、通稱甚吉、名は貞好、仰雲軒と號す。又自ら桂翁と云ふ。松永貞徳の門人なり。元祿十四年十月二十七日歿す。年八十七。辭世に曰く、

月は彌陀ぼさつや二十御來迎

貞柳

大坂の俳人、氏は柳並(又曰く永田氏)、通稱善八或は忠兵衛と云ふ。油煙齋と號し。初め良因と云ふ。剃髮して貞柳と改む。又鳩村子、助榮亭、長生亭、珍菓亭、圓果亭、等の號あり。菓子製造を業とし、鯛屋山城屋と云ふ。俳諧を善くし、狂歌書道に巧なり。曾て松井和泉守なる者禁裏へ南部の墨を奉るを見て、貞柳誅じて曰く(月ならで雲の上まですみ登る是は如何なるゆえんなるらん)。此狂歌雲上の鶴に達し、油煙齋(一に由縁齋に作る)の號を賜ふ。享保二十年八月十五日歿す。年八十一。辭世の句に曰く、

百居ても同じ浮世に同じ花

月はまん圓雪は白妙

條野採菊

新聞記者なり。通稱傳平、採菊散人と號す。戲號を贅々亭、山々亭右人と稱し、弄月庵又は臘月庵の稱あり。維新後東京日々新聞に従事し、明治十九年やまと新聞を創設し、自ら其社長たり。晩年専ら戯評を執筆せり。明治三十四年一月二十四日歿す。辭世あり、

いざゆかん老曾の森の雪の道

むかしの人の跡を踏みつゝ

庭訓舎綾人

狂歌師なり。初名を筆の綾人と呼び、姓は久野、通稱を與兵衛と云ふ。江戸本所三つ目に住す。文化十年三月二十三日歿す。辭世の歌に、

とり落すうつのはの怪我も即菩提

われからいづる南無阿彌陀佛

田捨女

丹波柏原山里の人。聰敏にして才あり、甫めて六歳、吟じて曰く、「ゆきのあき二の字くの下駄のあ」と、都鄙に傳聞す。長じて北村季吟に就き、和歌を學ぶ。二十歳嫁して夫を喪ひ、僧盤桂の門に入り、髪を削りて妙融と號し、一小庵を播州網干に構ふ。元禄十一年八月死す。年六十五。辭世なりと傳へらるゝ歌に、

秋風のふきくるからに糸柳

こゝろぼそくも散る夕かな

鐵眼

名は道光、族は佐伯、肥後の人なり。業を木庵を受く。瑞龍寺を攝津難波に建つ。夙に一切經を刻するの意あり。縁を四方に募る。會々鐵肌ゆ、乃ち緣募金を携へ、市門に立ちて飢色者に頒與す。已にして復た飢ゆ。復縁を募る。歳又飢ゆ。施與又初の如し。而して後初めて印刻功を奏し、之を山中に蔵む。説法を能くし、士民を化度す。天和二年二月二十二日寂す。年五十有三。遺偈に曰く、

七顛八倒 五十三年 妄談般若 罪犯彌天
優遊華藏海 踏破水中天

足利義輝

足利十三代の將軍なり。義晴の長子、本の名を義隆、小字菊童。天文十五年征夷大將軍に拜す。永祿四年上杉輝虎義輝に請ふて曰く、臣願くば毛利元就と東西京師に入り、姦邪を鋤せんと。義輝之を元就に謀る。元就應ぜず。八年松永久秀が權を專らにし、己を廢して義榮を立てんとするを聽き、第を修め、溝を深うして不慮に備ふ。然れども門牆未だ成らず。久秀其の子久通及三好長祿等と兵を率ひ、石清水に詣ると偽り、急に二條の第を圍む。義輝人をして敵を窺はしむ。一兵進んで曰く、君の陰謀已に發覺す、三好の代官松永彈正來り攻むと。時に宿直の士多からず。島山一色の徒防禦奮戦し、賊驟く進まず、或は將軍を奉じて奔らんと雖も、四門既に塞がる。是に於て衆殊死して戦ふ。義輝自ら眉尖刀を揮て奮闘し、數々賊兵を卻け、火を營第に放ち、廢殿に入て自殺す。時に年三十九。辭世に曰く、

五月雨は露か涙かほととぎす

我名をあげよ雲の上まで

足利義山

備後の人、幼名護法、飛水と號す。同國勝願寺の住僧なり。明治十四年本願大學教授と爲り、二十一年博識教校總監と爲り、二十四年法嗣の教授と爲り、二十八年佛教大學教授と爲る。貢獻頗る多し。四十二年六月十六日寂す。年八十七。辭世に曰く、

おとさじのちかごとのみをたのみつゝ

しぬてふこともこゝろやすけれ

足利義昭

足利十五代の將軍なり。義晴の子にして義輝の弟。僧となり覺慶と曰ふ。永祿十年元服して義昭と改む。天正元年武田晴信に使を遣して夾み撃て信長を滅さんことを約す。細川藤孝諫むれども聽かず。信長之を聞て謝し、且つ盟をなさんことを請ふ。許さず。信長遂に二條の第を圍む。義昭拒ぐこと能はず、成を行ふ。信長其過を改め、自ら新にせんことを請て去る。幾くなくして義昭又信長を討んことを謀る。信長又兵を率て二條の第を圍む。義昭窮窘して死を滅せんことを求む。信長之を河内に逐ふ。詔して義昭の官爵を削る。漂泊歳餘、困蹙日々に甚し。天正三年毛利元就に依り、薙髮して昌山と號す。京

師に歸り、慶長二年大阪に薨す。年六十一。靈陽院と稱す。足利氏はに至て亡ぶ。辭世の句に曰く

抛刀空諸有又何説鋒鉞要知轉身路火埋得清涼

足利持仲

滿兼の第二子なり。小字乙若。應永十八年右衛門督に任ぜらる。二十三年叔父滿隆と持氏を鎌倉に襲ふ。持氏敗れて駿河に奔る。是に於て持仲偕立して鎌倉の主と稱す。十二月今川範政持氏の爲めに援を京師に乞ひ、來りて鎌倉を圍む。二十四年正月持仲軍敗れ、滿隆、滿直及び上杉氏憲等と、皆雪下に自殺す。辭世に曰く、

咲く時は花の數には入らねども

散るにはもれぬ山櫻かな

足利義尙

足利九代の將軍なり。義政の子、初の名を義熙と云ふ。長享元年佐々木高頼を征す。陣にあるの日軍議の間、孝經左傳を講せしめ、誓て曰く、此行若し賊を平げずんば京師に還らずと。幾くもなくして

陣中に薨す。年二十五。義倫天性温良、父義政の驕侈に懲り、徳を修め、惠を布き、文學を好み、弓馬を練り、足利十五代中の尤と稱せらる。辭世に曰く、

あだなりと思ひし花の齡さへ

うらやましくも思ひけるかな

浅野長矩

赤穂の城主なり。小字又一郎、内匠頭と稱す。元禄十四年三月十四日、幕府勅使を襲するに際し、長矩等をして館待の事を分領せしむ。長矩舊儀に習はざるを以て之を辭するも許されず。吉良義央自ら其能に狩り、人に騷る。事を共にする者其指授を利し、多く賄賂を行ひ、之を誘く。長矩強硬屈せず、請謁以て其歎を取らず。故を以て甚だ相善からず。此日義央殿中に於て大に長矩を辱しむ。長矩憤怒に勝へず、一頭刀を揮ひ、義央の烏帽子を撃つ。額に中り、血流る。義央眩惑與に抗するに意なし。手を掲げ、面を掩して俯す。長矩復撃つ。背に中つ。額に再び刃を刺す。梶川與三兵衛後より長矩を抱き止む。與三兵衛臂力あり、長矩腕を脱するを得ず。關久和進んで刀を奪ふ。長矩切齒忿厲、大友義孝等義央を扶けて起つ。殿中昇沸す。將軍綱吉大に怒り、長矩を囚へ、田村邦顯の邸に幽し、即日死を賜ふ。長矩從容辭世を詠じて曰く、

風さそふ花よりも猶我はまた

春の名残をいかにとやせん

秋坊

加賀金澤の人、風流を以て名あり。諸州に遊び、湖南を過ぎて幻住庵を訪ふ。芭蕉口吟して曰く、我宿は蚊の小さきを馳走かなと。秋坊鞋を脱して居ること數日、辭して去る。翁之れを山下に送り、又詠じて曰く、やがて死ぬ氣色は見えず蟬の聲と。其京を去て郷に還へるに及んで、降雪霏々として肌を劈さき、三衣一鉢の外、又之れを凌ぐべきなし。因て萬子を訪ふ。木炭を乞はんとし、乃ち詠じて曰く、寒ければ山より下を飛ぶ鷹に物打荷ふ人をこぞ戀しきと。萬子答へて、寒ければ山より下を飛ぶ鷹に物打荷ふ人をこぞやれと。乃ち木炭を贈る。其終焉正月四日、時に友人李東其の柴門を訪ふ。談笑平生に異ならず。秋坊忽ちにして曰く、余新に曆を作る、君乞ふ之れを聞け。乃ち詠じて曰く、

正月四日よろづ此世を去るによし

と、言ひ畢て即ち瞑す。李東驚き且つ嘆じて曰く、稻つむと見せて失せけり秋の坊と以て之れを薦とす。

秋元正一郎

名は安民、姫路の藩士なり。博覧強記、經濟を凌ぐ。藩の國學寮に教授たり。傍ら洋書を修め、泰西の風土文物を究む。西洋形帆船の製造を企て、安政六年一船を竣工して名けて速鳥丸と曰ひ、尋で一船を造り、神護丸と命ず。是我邦西洋形帆船製造の濫觴なり。夙に勤王の大義を主唱し、國事に奔走す。諸藩の士其學識を欽し、就て學ぶ者多し。文久二年八月二十九日京都に歿す。年四十。明治三十六年正五位を贈らる。辭世に曰く、

たえくくに我玉の緒をかけておもふ

はれの夜頃の月やいかにと

秋山玉山

肥後藩の文學者なり。字は子羽、儀右衛門と稱す。藩主隆徳擧て侍讀とす。玉山學博く、古文に長ず。嘗て富士山に登り、其記を作る。文勢朗暢、南部評して富嶽生出以來の記なりと曰ふ。其詩を作るや、一字苟もせず、人に語りて曰く、天下作者に乏しからず、然れども余の如く思ふものあらずと。寶曆十三年病に伏する旬日、吟哦を廢せず、病漸むに及んで、扶けられて起き、端坐筆紙を索め、左の八字を

書し、筆を抛て歿す。年六十二。

清鏡無底水月似我

有村雄助

諱は兼武、薩摩の藩士にして、性慷慨、憂國の志篤し。安政六年藩士岩下佐治右衛門、大久保市藏等と俱に藩を出で水戸の志士と交はり、國政改革の策を回らす。萬延元年水戸の金子孫二郎、高橋多一郎と謀し、壯士をして大老井伊直弼を刺さんと。部署既に定るや、雄助及多一郎、孫二郎は直に關西に赴き、別に事を擧げんとて、密に議を決し、多一郎父子は木曾路より、孫二郎は東海道より、急行京都に上る。三月三日果して櫻田の變起る。幕府餘黨を探索すること嚴重にして、追捕の命四方に下り、雄助は伊勢四日市に於て捕へられ、藩邸に幽閉せられしが、後ち藩の内命にて自刃し果つ。明治三十五年從四位を贈らる。辭世に曰く、

性來不嗜綺羅巧 何思後人入天穹

唯願爲君誅國賊 千生萬死護皇宮

在明亭月守

通稱を林清司と云ふ。紀州家の臣なり。酒を嗜み、狂歌を能くす。二世給馬屋と無二の友たり。壯年の頃、吉原龜樓の遊女某に馴染て、足繁く通ひしを、給馬屋の諫めたる歌に、「古郷のわかか浦鶴思はずて浮きたる龜になど睡むらん」とありければ、「仇に咲く花の園原ありとして玉ば木々の數々のぞかんし」と詠みて返せり。其後は酒色を慎みて、深く嗜まざりしが、老後益々狂を發し、明治十六年四月一日、年五十九歳にて歿す。辭世あり。

夢見草ゆめと見捨てゆく鴈も

死出の山路の旅笠の文字

荒木田守武

伊勢内宮の神官にして、和歌連併に名あり。園田長官と稱す。足利氏の末、連歌世に行はる。而して併踏體の語を以て連歌を行ふこと守武に始る。則ち併踏體を定む。後世當時の併人を云ふもの守武、宗祇、宗鑑等を以て唱首と爲す。天文十八年八月八日歿す。年七十七。辭世あり曰く、

こしかたもまたゆく末も神路山

みねの松風みねの松風

荒尾保夫

神風連の一人なり。常に尊攘の大義を主張し、且つ歌道に熱達す。事を擧ぐるの時、病を冒して出陣し、事敗れて自宅の近傍に歸り、蕘畑の中に潛み居たり。母氏亦氣丈の婦人にて、保夫が蕘畑に潛伏するを認め、筆紙を携へ來り、從容死に就かんことを勸む。保夫大に喜び、左の辭世を書し、深く自刃せり。

あめつちはかみよながらにあるものを

なにかはらめや大和魂

明智光秀

土岐氏の支族なり。美濃の人。歳甫めて十六、元服を加へ、十兵衛と稱し、光秀と名く。弘治九年岐阜に赴きて信長に仕ふ。信長殘忍にして虐殺を好み、臣下を遇するに禮なし。嘗て酒を置て高會し、醉に乘じ光秀を掖して其願を授け、以て鼓節を爲す。光秀怨恨數回、蓄憤日久し。遂に意を決して信長を本能寺に圍み、之を弑す。秀吉大軍を率ゐて光秀を討つ。光秀敗走小栗栖を過ぐ。土寇路に要し、藪中より竹槍を以て其右腋を洞す。溝尾茂朝馳せ至る。光秀切齒して曰く、疾く首を刎れ、以て密藏すべし

と、乃ち歎す。時に年五十五。光秀旗を擧げてより僅に十三日なるを以て、世に之れを十三公方と稱す。光秀和歌を善くし、志賀唐崎に松を植ふ詠じて曰く、我なめて誰かはうみんひとつ松心して吹け志賀の浦風。辭世の詩に曰く、

順逆無二門 大道徹心源

五十五年夢 覺來歸一元

明智光春

光秀の従父弟、左馬介と稱す。天正十年光秀從軍の命を受けて龜山に歸り、光春を寢室に召し、密に謂て曰く、余に一大事あり、願くば子の首を得んと。光春曰く、易々たるのみ、思ふに大事必ず當に成るべし。光秀驚て曰く、何を以て我大事を知るか。光春曰く、何ぞ君の間の奇なるや、君常に恨を信長に擲く、臣の能く知る所なり。君先づ臣一人に語らるれば、臣諫争せん、既に他に聞ゆ、唯廣く泄れざるに及んで事を擧ぐべしと。辭色共に勵し、夜半急に馳せて本能寺を圍み、遂に信長を弑す。光秀の敗北するや、秀吉の先鋒堀秀政と打出濱に圍ひ、軍敗れて坂本城に入る。秀政追撃益急なり。是に於て光春光秀の妻孥を天主閣に置き、自ら樓上に昇りて敵兵を招く。秀政自ら來りて其の故を問ふ。光春乃ち名刀名器を絹服に覆ひ、之を結ぶに婦人の襟帯を以てし、且つ目錄書を附し、之を秀政に託し、又

黄金、甲冑を西教寺に贈りて後事を託し、光秀の妻孥及我孥を殺し、火を樓屋に縱ち、自殺す。實に天正十年六月十四日なり。辭世なりと傳へらるゝ詞に曰く

一戰國中生 未知風月情 朝出師實魁 夕承地連營

依几臥龍術 橫鋒千里行 幾英名如夢 終節歸清明

天野廣丸

一名磯田廣吉。鎌倉の人。狂歌師なり。性酒を嗜み、醉龜亭の號あり。人を訪ひ又路を行くにも、常に酒瓶を手にして之れを飲み、衣服にも徳利の紋を附く。終に飲酒の爲めに財を盡し、家屋の修繕も爲す能はず。一日家に狂歌の會を開く。此日偶々雨降る。人皆室内に傘を持ちて開卷を果せしといふ。酒百首の吟あり。くむ酒は是風流の眼なり月を見るにも花を見るにも」の一首人口に膾炙す。文化六年三月二十八日歿す。年五十四。辭世に曰く、

心あらば手向けてくれよ酒と水

錢のある人錢のなき人

天野隆良

大内氏の家士なり。藤内と稱す。陶晴賢の反するや、義隆に大寧寺に従ひ、軍敗れて殉死す。辭傷に曰く、

不來不去 無死無生 今日雲霧 峯頭月明

安積武貞

江戸の人、名を武貞と云ふ。龍眼長大、龍眼虎鬚にして其容宛然、蓋ける天王の如し。松本奎堂、藤本鐵石、清川八郎と志を同うし、攘夷の論を唱へて四方の士を激す。文久二年武貞藤本鐵石と謀りて十津川の豪民を募り、營を天野川に定め、以て軍威を示し、四方に殉ふ。軍略善く申り、士卒善く服す。藤堂、紀伊、郡山諸藩の軍大舉して來り攻むるに及んで、屢々奇兵を出して敵を敗る。毎戦皆利あり、而して中川宮十津川の豪民を諭し、兵士遇れ去るに及び、軍大に窮す。官軍大舉來り攻む。武貞手に槍を提げて突戦遂に捕へられ、元治元年二月十六日京都に斬らる。年三十七、明治三十一年從四位を贈らる。辭世の詠あり、

をろかなる身にも弓矢の幸を得て

都の花と散るぞうれしき

安島帶刀

名は信立、月田忠之の子なり。母の家を繼ぎ、安島信順に養はる。安政六年七月二十七日、幕府水戸の獄を斷す。藩主齊昭二子慶勝慶喜を幽し、鶴岡父子等を斬に處す。帶刀論旨を以て屠腹す。時に年四十八。死に臨んで曰く、臣固より死を知る、唯知らず前中納言公に累及するや否や、請ふ一たび聞て而して後に死せんと、人皆流涕せざるはなし。明治二十四年正四位を贈らる。辭世に曰く、

たえて吹く嵐の風のはげしきに

なにたまるべき木々の白露

玉の緒の絶ゆともよしや我君の

かげのまもりとならんとおもへば

阿部景器妻

名はいき子、神風連の一人、阿部景器の妻にして、鳥居喜新太の長女なり。景器寧取れて家に歸り自

刃せんとする。いき子共に自害せんと請ふ。景器之れを止むるも肯せず、景器及石原(運四郎)兩人の割腹を見掛け、遂に自害す。時に年二十六。實母に遺したる書状並に辭世に曰く、

一筆申し参らせ候(中略)爰許にて景器、堅藏、其他大野、加屋、富永初め事大に仕損じ、皆々百六十九人打切切腹、私女ながらも夫の供仕候。皆様御嘆下されまじく候(中略)私三日前より斷食致し申候間筆とり出来不申、先はあらく申上参らせ候。

世の中はいかにはかなき武士の

ゆみやとる身の常と思へば

阿部重次

岩槻の城主なり、家康の重臣伊豫守正勝の孫にして、備中守正次の子なり。家光に仕へ、對馬守と爲る。寛永十五年父の封四萬六千石を受け、老中に補せられ、十六年一萬石を加賜せらる。慶安四年家光薨じ、其夜殉死す。時に年五十二。辭世に曰く、

惜みても尙惜むべき身なれども

惜からぬ道に死ぬるもの哉

朝倉義景

越前の領主、世々一乗谷に居る。幼名延景、將軍義輝諱の字を賜ひ、左衛門督に任ず。永祿十一年織田信長と戦ひ、敗れて一乗谷に歸る。信長勝に乗じて來り攻む。義景書を平泉の僧徒に送りて救を乞ふ。僧徒從はず。信長府中龍門寺に入り、僧徒火を一乗谷に縱つ。朝倉氏累世の貨物悉く灰燼と爲る。朝倉景鏡素より反心あり、乃ち義景を勧め、山田六坊に往らしむ。從者僅に六人。景鏡兵二百を率ひ之を攻め、且つ人を遣はして曰く、運命既に盡く、乞ふ自ら計をなせと。義景怒て曰く、姦慝惡むべし。假令我死すとも三年を出でずして難を復せんと。言未だ終らず、兵卒亂入す。義景劍を把て自殺す。年四十一。信長其首を棄す。後數月景鏡、土冠の爲めに殺さる。義景の辭世に曰く、

七頭八倒 四十年中 無自無他 四大本空

嵐璃寛 初代

浪華の俳優、家名を伊丹屋と云ひ、俳名を初めに璃玗と云ふ。幼名徳三郎、三世嵐吉の親猪三郎の門

人なり。俗に目徳と呼ぶ（目徳とは目の大なる徳三郎の意）。天保八酉年六月十三日歿す。年五十。辭世の詠に、

芳しき匂ひは四方に立花の

あらしに此世さるのかへ役

麻田 狹

通稱公輔。初め周布政之助と稱す。其先は石見の人、後長門に居る。選ばれて國學都講となり、二十六歳にして檢使となり、超遷して政務使となり、國事に參與す。周布の名大に著る。幕府の事起るや、藩侯世子と力を天朝幕府の間に竭し、公輔は閣老及び土越の間に出入し、規畫甚だ力む。此時高杉東行、久坂義助等幕議の決せざるを憤り、横濱の外館を火せんことを謀る。其事や、泄る。土州侯これを長の世子に報ず。世子秋を擄て單騎これを追ふ。公輔時に會飲す。世子出づと聞て、亦馬に乗て至り、東行等を見て罵て曰く、休めよ爲すこと勿れ、容堂公の如きもまた模稜なるかなと。土人大に怒る。公輔曰く、候朝廷の望を買ひ、新に幕議に參す、而して曠日因循今日の擧の如きも、ために激成する所なり、模稜にあらずして何ぞや。土人大呼して曰く、可否もとより論ぜず、臣にして君の辱めらるゝに遇ふ、只死あるのみと。事急なり。東行等回護して馬に乗ず。公輔なほ罵て止まず。東行刀を揮

て斬らんとす。馬逸して中らず、遂に邸に還る。土人來て偶刺せんと請ふ。世子慰撫してこれを遣り、親ら侯に詣て其罪を謝す。侯曰く、以て念となす勿れ。又使を遣はして公輔の嚴詰なからんことを謂ふ。故を以て公輔死を免れ、職を讓はれて、家を子に傳ふ。既にして公別にこれを諱し、姓名を改めて京畿の間に居らしむ。麻田の名隠然として起る。爾後馬關の役あり、尋て長藩禁門の成を解かるゝに至り、七卿長州に還る。重臣故老各々危懼を懐く。公輔天を仰て嘆じ、時勢の漸く去ることを知り、絶食數日、遂に意見を上疏して自刃す。時に年四十三。（殉難後草には行年三十九とあり、左記絶吟又同本より抄出す）明治二十四年四月正四位を贈らる。辭世に曰く、

月明何唯武藏州 今昔光臨五大洲

爲客來能遊異域 空過三十九中秋

朱樂 菅江

有名の狂歌師なり。姓は山崎、名は景貫、字は道父、通稱郷助といふ。幕府の手先輿力なり。内山樗軒の門に入り、廣く和漢の學に涉り、最も和歌を能くす。後蜀山人等と共に狂歌を以て名聲世に聞ゆ。菅江の名は初め俳名を貫立と云ひしを以て、人皆貫公々と呼びしを、菅江と書せしといふ。中頃菅江の名憚りありと爲して漢江と改む。日光宮公遊親王之を聞て曰く、菅江何ぞ妨げんと、因て後菅江に

復す。之に朱樂の二字を加へしは、安永の頃人と酒と飲み、戯れに行燈の紙に、我のみひとりあけら管江」と書せしを初とす。元文三年十月生れ、寛政十年十二月十二日歿す。辭世に曰く、
執着の心や娑婆にのこるらむ

吉野の櫻さらしな月

奥 州

江戸吉原三浦屋の名妓にして、俳諧を以て名あり。辭世の句に、

戀しくば我塚でなけほとゝぎす

青木新三郎

諱は秀枝、家世々加賀藩の料理人たり。幼より皇學に志し、國歌を學ぶ。元治元年五月新三郎世子(慶益)附を以て上京し、長因諸藩士と交を結び、君側を清むるの議に與りしも、藩吏の沮格する所と爲り。決行すること能はず。因て長藩の士と相約し、七月十九日世子を輔けて京都を去れり。此日長藩入京し、會藩の爲に敗られ、幕府又世子の退京を責め、藩亦急使を馳せて之を尤む。遂に世子に謹慎を

命じ、新三郎は自刃を命ぜらる。實に八月十九日なり。時に年三十二。明治二十四年十二月正五位を贈らる。辭世に曰く、

朝夕に君が御爲と思ふより

外に心はたまたざりしを

天かけり國かけりして今日よりは

夷をはらふ神となるらむ

定敏親王

後水尾帝の第八子、照宮と稱す。慶安三年二月親王と爲り、八月剃髮して名を舜恕と改め、別號を薩達磨と云ふ。寛文三月十月天台座主に補せられ、獅子孔院と號す。度量宏潤、英邁不羈、詩賦俳諧を善くし、茶及和歌を思む。終世和歌を諱せずと云ふ。會講の都度二十一史を借る。或人曰く何を購求せざると。舜恕曰く、未だ一切經を獲ず、何爲ぞ財を外典に致やさんやと。元禄七年四月病革まるに及び、法事を修せんと手自ら鈴を振り、經を誦す。氣力端然、曉に及び終に薨す。年五十六。親ら遺偈を書して曰く、

蹈破一乾坤 呵々翻袂歸 此道無岐路 夏日白雲飛

西郷隆盛

鹿兒島藩士、舊名吉之助、幼にして藩の近習役たり。水戸藩士藤田虎之助、隆盛の人傑を知り、之を景山公に薦めて島津公に乞はしむ。公辭して遣らず、是に於て識者皆吉之助あるを知る。其京師に在るや、僧月照と交り善し。幕府の嫌疑を受け、鹿兒島に歸り、ともに薩海に投ず。隆盛終に魁り、月照遂に死す。(月照ノ部参照)時に安政五年十一月十六日なり。隆盛が月照を祭りし時、賦したる詩に曰く「相約投淵無後先、豈圖波上再生緣、回頭十有餘年夢、空隔幽明哭墓前。是より名を宛めて菊地源吾と稱す。藩吏物議を憚り、遂に大島に流す。隆盛の大島に流さるゝ前後三次なり。又改めて大島三右衛門と稱す。幾くもなく召還せられ、國政に參與す。戊辰の春總督府の參謀として品川に至るや、勝安房其營に詣り、徳川慶喜恭順謝罪の狀を陳ぶ。安房は素と知人なり。隆盛反て大總督に白し、而して後入りて城を取る。城兵皆解け去り、東北已に平ぐ。隆盛の名天下に重し。明治六年果進して陸軍大將に任ず。此年十月征韓論起る。議協はずして鹿兒島に歸る。是れより先き賞典祿を辭す。朝廷聽さず、因て之を賢とし各郷に私學校を設け、子弟を教育す。九年十月東京警備官二十餘人鹿兒島に歸省す。私學校黨之を捕へ、誣て内務卿の命する刺客となし、岡下に詣り詰問するに名を藉り、隆盛に勸めて兵を擧げし

む。遂に自ら兵一萬五千人を率ひて鹿兒島を發す。實に十年二月二十五日なり。熊本鎮臺の兵と戦ひ、進で之を圍む。朝廷隆盛の官位を奪ひ、征討の令を布く。隆盛日向に退き、連戦利あらず。九月鹿兒島に歸り、城山に據守する二十餘日、兵食皆盡く。同月二十四日岩崎谷の砲壘に到り、死に就かんとして出づ。流丸其腰に當りて倒る。別府新助馳せて其首を斬り、之を土中に埋む。後官兵の爲めに獲られ、之を市中淨光明寺に葬る。明治廿二年正三位を復せられ、庶子寅太郎華族に列せられ、候爵を授けらる。城山の己に陥るや、崖下に數坑あり、蓋し諸將彈丸を避くる所なり。其一方に稍々清潤なる所あり、即ち隆盛の居となす。坑壁に詩あり、曰く

孤軍奮鬪破圍出 一百里程壘壁間

吾劍已挫吾馬斃 秋風埋骨故鄉山

又隆盛の絶筆と傳へらるゝ詩に曰く、

百戰無效半歲間 首邱幸得返家山

笑儂向左如仙客 盡日洞中棋響閑

西行

本族佐藤、名は義清、藤原秀郷の孫にして、左衛門尉康清の子なり。勇敢にして射を善くし、頗る略に通ず。酷た和歌を嗜み、高妙に造詣す。鳥羽上皇其才を愛し、甚た之を親遇す。然れども營利を喜ばず。常に通世の志あり。嘗て族人憲康と鳥羽殿に朝して還る。別るゝに臨み明朝を約す。義清至る。其家に哭聲あり、外に聞ゆ。怪で之を訪へば即ち憲康昨夜暴に死すと。義清愕然たり、而して出家の志益々固し。遂に妻子を棄て嵯峨に往き、僧となり、西行と名づけ、又圓位と號す。時に年二十三。其の妻も亦、尼となり。練行堅貞なり。西行嘗て謂らく、桑門は家なし、須らく抖擻して身を終ふべしと、是に於て東國西州遠しとして到らざるなし。其意を得るに當れば嘯詠自適す。嘗て鎌倉を過ぎ、頼朝に逢ふ。頼朝人をして名を問はしめ、因て召見し、和歌及び射御を問ふ、西行辭して應ぜず。頼朝固く請ふ。是に於て通背弓馬を談す。翌日辭して行く。頼朝酬ゆるに銀猫を以てす。受けて出づ。門側に兒童の遊戯するを見、之に與へて去る。淡白此の如し。建久三年二月十六日京師に寂す。年七十三。嘗て櫻花を詠じて曰く、「願はくは花のもとにて春死なん其のきさらぎの望月のころ」と、竟に其の言の如し。辭世なりと傳へらるゝ歌に。

佛にはさくらの花をたてまつれ

わが後の世を人のとふらば

佐久間象山

名は啓、字は子明、修理と稱す。信州の人なり。文化辛未、松代象山の體に生る、依て象山と號す。幻にして頓悟、神童の稱あり。長じて豪邁不羈、濟世を以て己れの任と爲す。是の時に當り外國互市を請ひ、天下騷然たり。象山謂へらく、我が志を伸ぶるの秋なりと。慷慨悲憤、心を海防の策に留む。藩主眞田幸貫宏度あり、深く象山を愛し、擢んで近侍と爲す。象山不學を以て辭す。乃ち資を給し勵砥せしむ。天保己亥二月江戸に至り、林述齋、佐藤一齋の門に出入し、星巖、算山、信道等と交を訂す。象山曰く、方今外患荐りに至る、宜しく萬國の書を讀み、其華を咀し、其英を含み、以て國光を輝かすの策を爲すべし、何ぞ漢字漢文に拘泥するを爲さんと。是より洋學を研究し、銃炮築城造艦の諸技を講じ、専ら外寇を制するの策を務む。辛丑藩主閣老と爲り、象山を以て顧問に備ふ。壬寅冬、象山海防八策を論す。終に用ゐられず。既にして、藩主閣老を辭し、象山をして家に歸らしむ。郡中監察に任ぜられ、母を奉じて再び江戸に上り、木挽坊に僑居し、刻苦勉勵洋學の藩典を究む。癸丑外艦浦賀に入る。物情洶々たり、象山筆を揮つて十策を畫するも亦用ゐられず。門人吉田松陰、慨然として海外に航するを謀る。時に安政元年九月十八日なり。松陰長崎に至れば外艦既に去る。松陰下田に抵り、美艦に就て私かに航せんことを謀る、美使肯せず、直に松陰を幕府に致す。松陰の行季中に象山送別の詩あり、是に於て象山遂に獄に投ぜらる。象山詩を賦して其意を泄す。「終古禁人偵彼實、連年任敵探吾情、」

の句あり。次て松代に歸り、閉居す。常に慨然として曰く、百年の後當に予が心事を知ることあるべしと。元治甲子春、京師に赴く。是の時に方り、攘夷の説盛に起り、兇暴不逞殊に甚し。而して象山獨り開港の説を主張す。幕議象山を陸軍局に諫し、砲臺の事を董さしむ。象山辭して洋人を雇はんことを請ふ。允さず。將軍及一橋慶喜に謁し、中川山階二親王亦召して當世の急務を諮詢せらる。既にして水戸藩の士京師に入り、攘夷の詔を請ふと聞き、象山愕然其利害を陳せんと欲し、疎を袖にして、山階親王の邸に詣る。途中木屋坊を過ぐ、刺客あり、遂に殺さる。時に七月十一日なり。年五十四。象山魁梧面長くして、軀幹八尺、眼光人を射る。開港説を持する二十餘年、蹶蹶交も至るも、毅然として其志益堅し。信中の山嶽、諏訪の大湖、蒼々千古象山の高風を仰慕せざるものなし。明治二十二年二月正四位を贈らる。象山最後の詠あり、

時にあは、散るもめでたし山櫻

めづるは花のさかりのみかは

佐久間盛政

尾張の人なり。父盛次、織田信長に仕ふ。盛次柴田勝家の妹を娶り、數子を生む。盛政は其長子なり。小字は修理、玄蕃允と稱す。賤ヶ嶽の戦に敗れ、柴田權六等と逃れて尾山城に歸らんと欲し、山

路を經、遂に捕へらる。秀吉人をして盛政を諭さしむ。盛政曰く、我嘗て志を得ば、秀吉を捕へて搦縛する我か今日の如くならしめんと欲す。縱令新恩を加ふと雖も、何ぞ阿伯の舊誼を忘れんやと。天正十一年五月秀吉淺野長政をして盛政權六を六條嶺に斬らしむ。盛政刑に就くに臨み、請て曰く、希くは宏袖紅裏の衣を着け、香を白粉に薫せんと。秀吉之を聽す。盛政素と驍勇、世目して夜叉玄蕃となす。刑に臨み呼で曰く、我蚤に阿舅の言を用ひなば、則ち猴奴をして是の如くならしめんと。長政之を叱す。盛政曰く、生て封候を得ず、死して五鼎に烹らる、悔ゆるなしと、死に至り顔色變せず。時に年三十。辭世なりと傳へらるゝ歌、

世の中をめぐりもはてぬ小車は

火宅の門を出づるなりけり

佐久間佐兵衛

長藩の勤王家なり。諱は義演、思齋と號す。幼時父を喪ひ、伯父赤川又兵衛に養はれ、直次郎と稱す。安政三年藩學明倫館の助教となる。佐久間太郎右衛門早世し、嗣子幼弱なるを以て親戚相議し、佐兵衛を迎へて代役と爲す。因て佐久間氏を冒し、佐兵衛と改む。藩主父子公武の間に往來周旋するに方り、佐兵衛深く其志を解し、命を奉じて京都に入り、學習院に出入し、公卿の門に往來し、以て皇城の概

復を謀る。元治元年國老福原越後に従ひ東上し、脱藩士を鎮撫せんとして成らず。歸國の後獄に投ぜられ、十一月十二日斬らる。時に年三十二。明治二十四年正四位を贈らる。辭世に曰く、

今ははや言の葉草も夜の雪と

消えゆく身にはなりにけるかな

心あらば梢の紅葉しばしまて

あはれ我身とゞもにちらなん

佐野竹之助

櫻田事件の一人なり。水戸の藩士、名は光明。萬延元年三月三日有村治左衛門、齋藤監物等と大老井伊直弼を江戸櫻田に撃て之を殺す。是の日大風雪あり。直弼確輿に乗じ、從者七十、赤袴袴を着、蓋を傾け、喝して行く。忽ち數人路傍より出づ。雨衣奴裝、殆ど訴人の近くものゝ如し。輿の從者叱して之を避けしむ。又數人あり、前驅を襲撃す。從者之に赴く。訴人間に乗じ輿丁を斬る。輿丁輿を捨て去る。從者變を視て反り救ふ。前後争鬪互に死傷あり。一人跳り出て斜に輿を刺し、直弼を引き出して之を鹹し、首を刀上に貫き、大呼して曰く、有村兼清、井伊直弼を獲たりと。數人と吟嘯し、日比谷

門に至り、自屠して死す。餘は或は死し、或は去る。獨り大關和七郎等四人熊本藩邸に、竹之助四人は老中脇坂邸に自首して罪を請ひ、書を上る。其略に曰く、井伊中將幼主を挾み、私意を執き、有司を黜陟す、其の罪一なり。菴直私調至らざる所なし、其の罪二なり。柳營羽翼の良將を斥く、其の罪三なり。間部閣老を嫉し、九條殿下を誣誤し、廟堂輔弼の名卿を幽す、其の罪四なり。外人の虚喝を懼れ勅允を得ずして、擅に條約を結ぶ、其の罪五なり。凡そ斯の五罪は神人共に容れざる所なり。故に臣等天に代りて之を誅す。固より敢て大府を犯さざるなり云々。竹之助武勇絶倫、且つ文雅に富む。遺傷を蒙り、三日の夜瞑目せり、享年僅に二十二。明治三十五年正五位を贈らる。其死體を改むるに、着したる白襦袢に、朱書せる辭世二首あり、

しき島の錦の御旗持ちささげ

すめら御軍のささがけにせん

○ 櫻田の花とかばねはさらすとも

などたゆむべき日本魂

佐介貞俊

平氏の門葉たり。北條氏に仕へ、金剛山を攻む。是より先き貞俊、北條氏の已を用うるの厚からざるを恨み、居常快々として樂まず。千種中將繪旨を奉じ、大義を諭すに依り、千銀破より降参して、京都に入る。時に平家の一族没落し、貞俊亦阿波に流され、後ち捕へられて斬に處せらる。辭世に曰く、
皆人の世にある時に數ならで

憂きにはもれぬ我身なりけり

佐介貞俊妻

貞操を以て聞ゆ。貞俊刑せられんとする時、其妻を慕ふて情緒纏綿禁する能はず、即ち佩刀を以て之を信に託し、齋らし歸らしめて、其妻に贈り、遂に刑に即く。信乃ち其刀を携へ、往て之を示す。其妻見て悲泣嗚咽、左の辭世を書して自刃せり。

たれみよとかたみをひとのといめけむ

たへてあるべきいのちならぬに

佐々木弘綱

竹相園と號す。伊勢の和學者にして、足代弘訓の門人たり。江戸に出で、歌學を教授す。明治二十四年六月二十五日歿す。年六十四。著書多し。辭世に曰く、
命あらば嬉しからまじ若しなくば
それも術なし神にまかせん

佐藤繼信

陸奥の人なり。弟忠信、鎌田盛政、同光政と俱に義經に事て四天王と稱す。扇島の役に、平教經勳弓矢を以て頼りに義經を覗ふ。麾下の勇士馬前に翼蔽す。教經射て十餘騎を斃す。繼信光政も亦た其矢に中る。教經の童菊王進みて將に繼信の首を斬らんとす。忠信射て之を瘞し、繼信を扶け、負ひて歸る。義經營に蒞み、首を膝に加へて曰く、汝言はんと欲する所あるか、繼信曰く、臣陸奥を出でしより、身を公に委れ、今日公に代りて命を殞し、名を後世に傳ふ、亦た榮ならずや。たゞ公の平氏を殄滅するを見ざるを憾むと、言畢りて絶す。時に年二十八。繼信が辭世なりと傳へらるゝ歌に、

惜むとも世はいつまでもながらへむ

身を捨てこそ名をば繼信

佐倉宗五郎

下總國印旛郡公津村の人、本姓木内と稱す。慶安四年領主正盛死し、嗣子堀田上野介正信立つ。父の勳功に依り閣老に進む。此に於て其の姦臣等、正信の幼弱なるを奇貨とし、權柄を弄し、賦税を重んじ、苛斂誅求至らざる所なし。宗五郎外五人、三百八十九ヶ村を代表し、藩主に訴ふるも容れられず。時の老中久世大和守に歎願せしも亦却下せられ、遂に意を決して將軍に直訴せんと覺悟す。承應三年十二月二十日、將軍東叡山寛永寺に詣す。宗五曰く、六名の同道は難からん、某一人潛に忍ぶべし、死に至るも悔なしと。乃ち獨り三橋の下に忍び入る。家綱の橋上を過ぎんとするや、橋下より青竹に願書を添へ、大聲訴訟す。左右之を退げんとするも、宗五郎飛鳥の如く付廻り、採用なきときは死すとも去らざるの至情願はる。近習の士、願書を取上げ、乘輿と共に山内に入る。宗五郎地に平伏し、目送少時、徐に起て去る。奸臣宗五郎の一族を極刑に處せんと議す。正信妻子を免さんとせしも、郡奉行和田平太夫幕府に對し政事疎なるの恐れありとし、宗五郎夫妻を磔刑に處し、長男宗平(十一歳)二男源之助(九歳)三男喜八(六歳)四男三之助(三歳)を斬首せり。宗五郎刑に臨み、神色變ぜず、曰く、奸臣邪曲を以て賦税を厚し、村民を苦しむ、我親子命を捨て萬民を救ふ、是れ慈悲の方便なり。妻罵曰く、我骸朽るも一念消滅せずと。辭世に曰く、

梅ちりてこずるを蓮の臺かな (宗五郎)
今日もろともに消る泡雪 (萬)

佐々耕庵

諱は高遠、越後村松藩の人。醫を業とす。元治元年四月江戸に歸りて京都の狀況を藩主に告げ、速に朝覲すべきを説きしも用ゐられず。乃ち國に歸り、老臣堀右衛門三郎に面議せしが、却て其惡む所と爲り、慶應二年五月同志と共に捕へられ、翌年五月斬に處せらる。年四十六。耕庵人と爲り眞率にして、短身高類、性讀書を好み、又酒を嗜む。貧寒身に迫るも敢て意と爲さずと云ふ。明治二十四年十二月正五位を贈らる。辭世に曰く、

誓掃妖氛挽皇運 豈圖群醜逞兇頑
我身縱作俎上肉 正氣長留天地間

佐衛門督局

後醍醐帝の宮人なり。爲忠の女、其姓氏を詳にせず。遊藝門院に侍す。後醍醐帝之を幸し、一皇女

を生む。局人となり文藻あり、和歌を善くせり。萬里小路藤房之を愛し、別に臨み鬢髪を截り、歌一首を附して曰く、くくる鬢の亂れん世まで存へば是を今はの形見ともみよ」と、局之を見て泣く。時に賊兵亂入し、局を捕へて之を挑む。局猶豫を請ひ、左の辭世を藤房の贈りし短かに書し、大堰川に投じて死すと云ふ。

かき置し君の玉章身に添へて

後の世までも形見とやせん

齋藤監物

名は一徳、文里と號す。水戸の人。祠官式部の子なり。天保の末中納言齋昭幕府の讒を受く。監物君宛を雪がんことを神明に祈誓し、微行江戸に至り、老中阿部伊勢守に上書し、大に君宛を辯白せり。其辭頗る激昂、伊勢守越訴なりと爲し、監物を捕へて水戸に禁錮せしむ。幾くなく罪を免さる。監物時非なるを知り、風雅の遊を名とし、四方の士に交り、物に世運を回復せんことを謀れり。諸藩の名士水戸に来るもの、率れ監物の門を叩き、臂を把て當世の務を談す。梅田源次郎、大樂源太郎等も亦來り寓し、共に謀る所あり。水戸賜勅の事起るに及び、金子孫二郎、高橋多一郎等と謀を合はせ、私かに去て江戸に出で、遂に櫻田門外に於て井伊直弼を要撃するの舉に參す。奮闘重傷を蒙り、細川邸に自訴し

居ること六日、遂に瞑す。年三十九。明治三十五年從四位を贈らる。監物等の細川邸に自訴するや、斯く自訴狀を捧げたれば、療治に及ばず切腹すべしとの説を出したるものあり、監物肯せずして曰く、「從容死に就くは大丈夫の事なり」と、遂に各自療治を受くることとなりしと云ふ。監物重傷に風せす。需に應じて筆を揮ひし最後の詠に曰く、

國のため積る思も天津日に

とけて嬉しき今朝の泡雪

齋藤徳元

岐阜の俳人なり。名は利起、通稱齋宮、織田秀信に仕へて二千石を領す。後薙髮して徳元と號し、又帆亭と稱す。松永貞徳の門人なり。寛永五年江戸に出で和歌を教授し、後俳諧を學ぶ。寛永十八年俳諧初學抄を編す。是れ江戸に於て俳書を刻するの始めなり。正保四年八月廿八日歿す。辭世に曰く、

いまソではいきたはごとをつきみかな

齋藤五六郎

諱は定廣、福岡の藩士なり。元治元年諸藩の士尊王佐幕の二派に分れ、福岡藩亦議論紛々、國中秘かならず。五六郎監察の職にありて志を勤王の一途に定め、當路の諸士と事を論ずる瓊の忌憚する所なし、遂に反對黨の讒に遇ひ、慶應元年六月職を奪はれ、屏居を命ぜらる。十月二十五日罪案を宣せられ、博多の天福寺に自刃す。年三十七。明治三十五年從四位を贈らる。辭世に曰く、

あめつちにはづる心は消えてゆく

つゆの命のつゆほどもなし

齋藤利三

内藏助と稱す。美濃の人なり。父伊豆守明智光秀の妹を娶りて、利三を生む。天正十年光秀大事を謀す。利三諫るも聽かず、遂に本能寺を襲ひ、之に克つ。山崎の戦に堅田に匿れ、病に臥して起つ能はず、遂に囚はれて粟田口に磔せらる。三男一女あり。長子利光、次子三存は後ち幕府に仕へ、三子利信伏見に終り、女は稻葉正成に嫁し、後幕府に仕へて、春日局と稱す。利三の辭世に曰く、

消えてゆく露の命は短夜の

あすをもまたず日の岡の峰

齋藤竹堂

名は馨、通稱順治、字は子徳、竹堂は其號、仙臺の人なり。幼にして穎敏、昌平費に入り業大に進む。後ち郷里に歸り母及妻を拉して、再び江戸に至り、帷を下谷相生町に下し、子弟を教授す。藩侯擢で、儒員と爲さんとす。不幸病に罹り終に歿す。時に嘉永五年二月、享年三十八。竹堂軀幹短小にして放言高論せず。故に知らざるもの尋常書生と爲し、其稿を看、其論を聞くに及びて、駭汗備服始めて之を敬す。侗庵、良齋、笛浦、星巖の大家稱揚推服すと云ふ。竹堂二兄あり、伯を吉甫と云ひ、仲を公恕といふ。竹堂に先ちて歿す。竹堂の辭世に曰く、

阿母東迎百餘里 晨昏齋志若爲情

唯余一事幸然處 埋骨青山伴二兄

三馬

江戸有名の小説家なり。名は久徳、太輔と稱し、式亭又遊戯堂と號す。父を茂兵衛と曰ふ。八丈島爲朝神社の祠官壹岐守の子なり。年十八、始て一の戯書を著す。其稿を屬するや、刻苦夜癡るに指を以て字を得に盡し、隻句を得れば即ち起て之を書す。數日にして成る。老手の筆と雖も及ぶ能はず。已にし

て壯、著作教捷、筆を下すこと飛ぶが如く、俠太平記向鉢巻を著して、火丁の暴横を毀謗し、其の爲めに訴へられ、家に錮せられ、未だ幾くならずして釋さる。其友諫めて曰く、文字は福を買ふ、古人の非とする所、況んや戯作に於てをやと。三馬聽かすして曰く、是れ我が病なりと、名聲益著る。文政五年閏月六日歿す。年四十八。辭世に曰く、

善もせず悪も作らず死ぬる身は

地藏もほめず閻魔叱らす

三枝 翫

勤王家なり。名は眞洞。和州郡山淨專寺の住職にして、攘夷先鋒を以て中山忠光の南山義舉に加盟し、名を市川靜一郎と改め、敗軍の後畫工となる。徳川氏の大政を返上するや、上京して朝廷の親兵に加はる。明治元年二月英使の初めて入朝するや、慷慨禁ぜず、同志林田篤太郎と謀り、途上に於て之を要撃し、衆寡敵せず、林田自殺し、翫亦捕へられ、三月二十二日栗田口に刑せらる。時に年二十九。辭世に曰く、

今はたゞ何をぞしまむ國のため

君のめぐみを身のあだにして

猿渡常太郎

神風連の一人なり。資性寡黙にして豪邁の風あり。都門の人士浮華輕薄にして、意に叶はず、以て歸郷して教鞭を取れり。變後三日にして割腹の報來る。母氏神前に獻燈し、一滴の涙も流さざりしと云ふ。死する時年二十二。家に遺せし辭世に曰く、

家も身もわすれていでし眞心は

たゞ一筋に大君のため

殘 夢

會津實相寺二十二世の住僧なり。秋風道人と稱す。字は日白、居常食せざる數日、更に飢色なし。奇行頗る多し。一夜盜あり、庫壁を穿つ。殘夢侍者に謂て曰く、盜あり錢を盗まんとす、汝往て與へよと。侍者乃ち赴き謂て曰く、壁を穿つるなかれ錢を與へんと。盜怖れて去る。侍者以て報す、殘夢曰く、汝蓋ぞ先きに與へざると。天文中盤城の僧無々と云ふ者あり、人の家に相違ふ。殘夢曰く、なしく

と云ふは偽り来て見れば有ればこそあれ元の妾に。無々對て曰く、なしくと云ふも理り我が妾あることなしのはじめなりけれ」と、備に往時を語り、面議あるもの、如し、天正四年三月二十九日寂す。死する年不詳。遺偈に曰く、

墮在無間 五逆聞雷 唱下陪驢 死眼豁開

櫻眞金

常陸眞壁町の人、本姓小松崎任藏、後ち相良芳太郎と稱す。號を月波山人と云ふ。慷慨卓犖、藤田彪に從學し、最も經濟に長ず。居常王室の式微を傷み、深く高山正之の人と爲りを慕ふ。烈公言を以て貶黜せられ、之に坐するもの甚だ多く、彪又其中に在り、眞金之を開き、憂慮奔走して遂に病を醸し、殆ど明を失ふに至る。後ち公再び幕議に參與し、彪亦出でて事を執る。公の再び讒を受くるに及び、百方籌を運らし、以て其冤を訴ふ。尋で大疑獄起り、眞金身を容るゝに地なく、乃ち姓名を變じて京師に入り、一縉紳に謁して略を陳す。計已に容れられて、未だ時を得ず。浪華に至り、病死す。時に安政六年七月六日なり。年四十六。明治廿四年十二月從四位に叙せらる。辭世に曰く、

ふるさとの夢は霞に碎かれて

枕にのこる松風の音

澤島信三郎

諱は正喻、近江膳所藩の士なり。元治元年幕吏朝旨を嫉め、專横日に甚し。信三郎悲憤慷慨、一死以て國に許し、自ら回天の事に任ず。藩主に謁し、攘夷の事を擧ぐるを以てするも容れられず、乃ち藩を去り因備より周防に入り、大洲鐵然等と州の奇兵を督し、室積を守り、轉じて藝の宮内に逃匿し、小倉に轉戦す。同三年七月二日病に罹り、山口の屯營に歿す。年二十九。明治二十四年正五位を贈らる。父に遺したる歌に曰く、

よしあしは人の思ひにまかしつゝ

御國の仇に死する大丈夫

はぐくみし子をも今日しは國の爲

死せしものぞと思ひたまへや

紀定丸

狂歌師なり。名は義方、通稱を吉見儀助と云ふ。清水家の小臣なり。擢てられて幕府の勘定組頭と

なる。蜀山の甥なるを以て其門に遊び、狂歌を能くす。初め號を野原の雪助と云ふ。天明五年十月十四日、蜀山以下相會して狂歌百鬼夜狂と云ふを備す。定丸幽霊と云へる題を得て歌て曰く、う年もまだ中ばに果し幽霊が腰より下の見えぬ妻は」と。天保十一年大に早す。定丸雨を乞ふの狂歌三首を詠す。其一に曰く、「降るまいと思ふも雲の凡夫にて今日は夕立來べき宵なり」と、日ならずして雨あり。其他世に聞えたる名歌多し。天保十二年正月十六日歿す。年八十餘。辭世に曰く、

狂歌師も今日か明日かとなりけり

紀の定丸も定めなき世に

紀伊國屋亦右衛門

浪華の商人なり。性敏くして天稟の商才あり、年若くして本家某に仕へり。主人其才氣と正直とを愛し、金百兩を與へて曰く、之れを資本に汝の好む商法を營み、十倍にして歸來せよと。亦右衛門京に赴き、一二年にして千兩の金を持參して歸る。主人大に感じ、再び其金を與へて曰く、之れを十萬兩と爲して歸れと。亦右衛門亦數年にして其旨の如くす。主人盛感嘆して曰く、汝の才あらば、此の金七百萬兩となすは易々たるのみと、乃ち其命を與へんとす。亦右衛門人慾の限りなきを嘆じ、其金を擲ちて遁世し、圓智坊と名のり大融寺の徒弟となり、一生復俗事を願みざりしと云ふ。其辭世に、

落ちて行くならくの底をのぞき見て

いかほど深き慾の穴ぞと

菊池武時

二郎と稱し、後髮を削りて寂阿と號す。肥後の人なり。武時の北條英時を攻むるや、英時窘迫して將に自盡せんとす。會々小貳貞經、大友貞宗數千の兵を率て來り援ふ。武時克つ可からざるを知り、長子武重に兵を附し、誠めて曰く、我今義に赴きて命を授く、固より其分なり。汝國に歸り、兵を聚めて乃父の讎を報すべしと。武重共に死せんと請ふ。許さず、涙を揮て去る。武時兵を奮し、陣を冒して歿す。時に年四十二。妻に別れを告ぐる辭世の歌に曰く、

故郷は今宵ばかりの命ぞと

知らでや人の我を待つらむ

菊池武時妻

其名を逸す。武時の送りし歌を見て、其子武重を呼んで曰く、汝必ず時を待ち、運を全うして家名を

揚げよと。武時に返歌を書き遺して自害せり。其歌に曰く、

故郷も今宵ばかりの生命ぞと

知りてや君がわれをまつらむ

北村季吟

近江の人、通稱久助、拾穂軒と號す。初め蘆庵と稱す。國學に長じ、和歌を善くす。烏丸光廣の推薦に依り、幕府に召され、再昌院法印の號を賜ふ。是より湖月亭と稱す。寶永二年六月十五日歿す。年八十二。辭世に曰く、

花もみつ郭公をもまちいでつ

このよのちのよ思ふことなき

吟霞

京都の俳人なり。氏は堀内、松風亭と號す。中井仙徑の門人なり。天明四年八月一日歿す。年六十一。辭世あり、

借錢の淵から天上辰の秋

金蘭齋

羽州秋田の人、老莊の學を修め、京師に徙居し、講説を業とす。生涯獨居無爲を以て心と爲し、家に餘石の貯なきも晏如たり。常に書籍を有せず、門人講説を請ふ毎に書を買ふて之に饒る。期に及べば即ち曰く、予既に典じて米に換ふと、衣服を與ふるも亦斯くの如し、門人即ち衣背に大圓形を作り、中に金蘭齋の三字を書して之に與ふ。蘭齋欣然之を穿ち、少しも愧る色なし。著す所老子國字解あり。辭世に曰く、

東山の花見しも此春を限りか

西山の月みるも此夕限りか

さても死にともないことぢや

金水

小説家なり。松亭と號す。姓は關口、名は秋實、東作と稱す。年代詳ならず。辭世あり、曰く、

六十あまり六歳の今日を命にて

浮世の夢はさめはてにけり

虚舟

京師の俳人なり。姓は黒瀬、不識亭と號す。虚舟の字、尊貴の諛號に類す。後ち去舟と改む。明治六年六月十六日歿す。年八十。辭世に曰く、

不來不去佛祖戲論末後一句日日日新

底ぬけや返らぬ旅の頭陀袋

木村貞行

赤穂四十七士の一人なり。岡右衛門と稱す。長矩に仕へて馬廻となり、百五十石を食む。王陽明の學を好む。醒起るや姓名を變じて石田左膳と曰ふ。誓を襲ふに及び、詩一篇を賦して之を兜の中に著けり。時に年四十六。室鳩巢之を讀み、嘆じて曰く、心口相應、一氣呵成、勇猛之氣、自溢言外、文以氣爲主、

不可誣已と、其時に曰く、

君子疾惡之心、小人驕橫之行、二者卒然相激於談笑之間、必有相害而不相容者、宜哉先君之逢鄙夫而殞厥身也、惜有事殿中之日、不得自快於一擊之間、而身獨嬰法網以亡、使鄙夫全首領於家、以貽臣等無窮之恨、臣等以此憤怨鬱怒、奮不顧身、必刺鄙夫以報君仇、而尙忍詢抑志、以至踰年不發、非敢後也、時未至也、嗚呼吾大父吉兵衛始仕霜臺君、受公子采女君之遇、由是吾父總兵衛事前內匠君、甚見親近、以至不肖某、繼事先君有年、雖不敢私不次之寵、然因父祖之績、荷世祿之厚、以養妻子、蓋僕、其沐君恩也亦已多矣、今也從同志之義士、相與蹈白刃、決必死、上有以報君主之恩、下無以辱人臣之義、豈非臣大幸歟、冀賴先君之靈、得義央父子首、獻之影堂、臣等所祈在是而已、不勝欣躍之至、綴野詩一篇、以述其志。

身寄淨雲滄海東、久愆恩義世塵中、看花對月無窮恨、散作曉天草木風

木村重成妻

重成しげなりの妻つま、真野まの氏は豊後守頼包よしのりの女むすめなり。妍麗けんれいにして貞順ていじゆん、深く重成しげなりの爲ために愛あいせらる。大坂おさかの將まさに亡なげびんとするや、重成しげなり食くせず、且かつつ惻容さくじやうあり。真野まの氏し性せい慈じ聰そう、頗すこぶる中外ちゆうがいの動靜どうじやうを知しり、其密謀そのみつぼうと雖なほも豫よめ承迎じやうげいする所ところあり。因よつて重成しげなりに謂いつて曰いはく、君きみが去年こゝろ今福いまふくの一戰せんは、何なんぞ關東くわんと五十餘萬よそごの師しに愧はぢざらんや。然しかれども渝かは易やすきは心こゝろにして、果はた難がたきは死しなり。死しに當あたつて死しせざれば、其その愧は死しよりも甚はだし、君きみの食くせざるは妾はなの解げせざる所以ゆゑんなりと。重成しげなり笑わらつて曰いはく、五穀ごこく胃いに入いれば二十四時にじゅうよんじを經へて消しょうす、我われ因よつて穢物けつぶつを斥しりぞけて潔心けつしんを出いさんのみと。貞野まの氏し欣然しんぜんとして退しりぞき、寢室しんしつに入いつて自刃じりぞす。時ときに年とし十有八じゅうはち。遺書いしよして曰いはく、

一樹じゆの蔭かげ、一河かの流ながれ、是これ他生たじやうの縁えんと承うけたまはさくら候にこそ。そもをととせの比ひよりして、偕老かいらうの枕まくらをなして、只影ただかげの形かたちにそふが如ごとく、思おもひまゐらせ候に。此頃このころ承うけたまはさくら候にへば、此世このよ限かぎりの御催おんもよほし、かげながら嬉うれしく存ぞんじまゐらせ候に。唐土ちやうどの項王かうわうとやらんは、世よに猛たけき武士ぶしなれど、虞ぐ氏の爲ために、名殘なごりを惜をしみ、木曾きそ義仲よしなかつは、松殿まつどのの局つはねに、別わかれを惜をしみしとやら、されば世よに望のぞみ窮きはりたる

木下長嘯子

妾わらわが身みにては、せめて御身おんみ御存生ごぞんじやう中に、最後さいごを致いたし、死出しでの道みちとやらんにて、待まちち上あげたまつつり候に、必かならず必かならず、秀頼ひでより公こう、多年たねん海山かいさんの鴻恩こうおん、御忘おわすれなきやう、たのみまゐらせ候に。

本ほん名なは勝俊かつしゆん、初名はつめは大藏だいざうと曰いふ。豐太閤ほうたか北きたの方政所かたまんじやうの兄あに木下きのした肥後守家定えごしゅけさだの長子ちやうしなり。若狹わかさ守まもりに任たづせられ、九萬石まんごくを領りやうし、若狹わかさ少將せうしやうと云いふ。龍野たつの城主ぢゆうたり、一説いつせつに秀吉ひでよしの愛妾あいせつ松丸殿まつまるどのの生母なむにして、秀吉ひでよしに哀請あいきんし若狹わかさに封ほうせらるゝを得えたりと。大阪おさかの役起やくおこるに及び、私ひそかに謂いはく、余秀頼よひでよりに於おいて親戚しんせきたり、而しかして今いまや東西とうせい難なん相起あひある、東ひがしすれば親しんに離はなれ、西にしすれば姻いんに背そむくと、心こゝろ兩端りやうたんを持もつて決けつせず、城中じやうちゆう危懼きこす。元もと忠使者ちゆうしやをして謂いはしめて曰いはく、聞きくが如ごとくんば、卿けいの弟秀秋ていしゆあき來きりて城しろを圍かこむと。然しからば則すなはち、昆弟こんていの親しん内外ないがいに在あり、衆心しゆしん或あるは疑懼ぎこせん、請こふ廓かくを致いたして去され。時ときに或人あるひと勝俊かつしゆんを殺ころして以もつて衆心しゆしんを固かたふすべしと傳つたふ。勝俊かつしゆん大おほに懼おそれ、京師けいしに奔はる。事こと平ひらぐに及び封ほうを奪うばはる。乃すなはち洛東らくとう靈山りやうざんの麓ふもとに草庵そうあんを結むすび、長嘯ちやうしやう子し又または天哉てんさい翁おうと號なづし、専ちゆうら風月ふうげつを友ともとし、慶安けいあん三年さん六年ごくろく歿せつす。年とし八十一はちじゅういち。辭世しせいなりと傳つたへらるゝ歌うたに曰いはく、

草葉の外にまたもありけり

去音

姓は高屋、京師の俳人なり。山本益遠の門人にして、好々舎、瑞雲等の號あり。寛延二年十一月十日歿す。辭世に曰く、

夢か葉か散るしやらくさし最後の屁

其梅

京都の俳人なり。野村文右衛門と稱し、伴松庵の號あり。初め鈴鹿荃石の門に入り、後早川丈石の門人たり。天明八年二月十二日逝く。年七十。辭世に曰く、

願くば無爲の都を住所

義龍

字は愚庵。丹波の人。八歳僧と爲り、大道禪師等に謁し、名譽大に揚る。壽八十にして寂す。遺偈に

曰く、

八十年間一日程 移居換處幾村城

春風不入老僧戶 白雲滿頭拂又生

義天

高僧なり。字は無雲、姓は賀茂。山城の人。幼にして建仁寺の鐘堂に仕ふ。年十七剃髮す。南禪寺に侍し、後ち相州に遊び、建長寺に參す。既にして支那に入り、歸朝して洛の東山に寓す。貞和二年播州法雲寺に出世し、建仁寺に移り、晚年南禪寺を領す。六年五月二十七日東山の木庵に寂す。年七十八。遺偈に曰く、

一靈皮袋、皮袋一靈、四大分散、作甚麼形、

呵呵呵、休定論、木馬嘶火裏、泥牛吼海門、

狂歌堂眞顔

有名の狂歌師なり。戀川好町、四方歌垣、又俳諧歌場の別號あり。姓を北川、通稱を嘉兵衛と云ふ。蜀

山に就て斯道を究め、京師に登り、芝山持豐庵に伺候せしに、歌會あり、埋火と云へる當坐の題なり。眞顔とりあへず、「御袖にすがりてなり」と埋火の俳諧歌はおこしたきもの」と詠せしに、此歌雲のかけはしとなり、文政十一年五月二條家より宗匠の號を免許せられ、名聲益々高し。文政十二年六月六日歿す。年七十七。辭世に曰く、

うまく食ひ暖かに着て何不足

七十なつ南無阿彌陀佛

龜遊

横濱岩龜樓の妓なり。本名はちよ、江戸皆川町の醫太田正庵の女、家道衰へ、吉原に售られ、源氏名を子の日と呼び、容色を以て名あり。後龜遊と改め、岩龜樓に移る。時に米人某之れを見て頼りに聘せんことを強ゆ。當時人心外人を厭ふこと甚しく、龜遊固より之れに應ぜず。主人強ふること數回、乃ち伴り諾す。其日遺書を裁し、自刃して死す。書端に歌あり、

露をだに厭ふ大和の女郎花

降るあめりかに袖は濡さじ

由井正雪

駿州由井の染屋傳三郎の子なり。自ら楠氏の遺裔と稱し、竊に異圖を蓄ふ。時に浪士丸橋忠彌、精術を以て名あり、正雪之と交情日に密なり。一夜衆と道灌山に會し、反期を約す。田代又右衛門、弓匠藤四郎の二人變を上る。已にして忠彌擒にせられ、正雪及其徒八人駿府に自殺す。時に慶安四年七月二十六日なり。正雪が辭世なりと傳へられる、歌に曰く、

秋はただなれし世にさへものうきに

いづことまりの門出なるらむ

祐覺

覺應坊と稱す。後醍醐帝船上山に在るに當りて、乃ち延暦寺に入り、更めて山徒と爲り、道場坊注記と呼ばれ、兵を集めて王に勤む。又新田義貞に従ひて東足利尊氏を征す。官軍敗るゝに及び、車駕延暦寺に幸す。祐覺牒を山中に發し、僧徒大に集まる。既にして源顯家大兵を率て近江に至るや、帝祐覺に勅して船七百艘を發して之を迎へしむ。尋て僧徒及諸將を分ちて、尊氏を京師に討つ。尊氏款を納るゝに當り、帝に扈して京師に入る。尊氏其山徒の首謀たるを惡みて、之を斬る。祐覺が法勝寺の上人に

送りたる最後の賦に曰く、

大方の年の暮ぞと思ひしに

我身のはても今夜なりけり

妙準

禪門の高僧なり。太平と號す。幼より高峯和尚に靈巖寺に従ふ。又約翁公に建長寺に依りて翰墨を掌る。後ち相州の淨智寺に住す。學徒追隨して、堂宇常に充盈せり。晩年正源庵に退老す。臨終の偈に曰く、

末後一句 向下文長 處々蹤跡 地獄天堂

妙在

字は比山、信州の人、南禪寺の僧なり。元に至り、歸朝の後諸寺に屢住し、老後圓覺寺に住す。永和三年正月十二日寂す。遺偈に曰く、

賣弄一山過 彌天罪犯多 今朝機轉位 無佛亦無魔

源具行

師行の子なり。後醍醐帝潛邸の時特に親近せられ、即位の後從三位に敘せらる。帝北條高時を誅せんと謀る。元弘元年具行に命じて兵を調發せしむ。事敗れて車駕奈良に幸す。時に具行追隨して笠置に至り、僧良忠と謀り、詔を發して諸國の兵を徵す。笠置陷る。藤原師賢、藤原藤房と帝を扶けて逃る。高時具行を執ふ。明年六月佐々木高氏に命じて之を近江柏原に殺さしむ。死に臨み、硯を索め、偈を書して曰く、

逍遙生死 四十三年

山河一革 天地洞然

源頼政

攝津守頼光の玄孫にして、兵庫守仲政の子なり。天資穎敏にして武略あり、尤も射を善くし、和歌に巧なり。近衛院在位の時、主上御體あり、怪獸を射て弓張月の名歌顯はる。後剃髮して眞逸と稱す。世に源三位入道といふ。以仁王軍敗れて宇治平等院に憩ふ。清盛知盛等を遣はして之を追はしむ。頼政宇治橋を撤して之を待つ。既にして足利忠綱等三百騎流を亂りて濟る。頼政二子と連りに敵軍を射る。王

間を得て南に走り、頼政も亦従ふ。適々流矢あり、頼政の膝に中る。頼政王に告て曰く、事既に此に至る。大王宜しく奈真に至り、衆に籍りて以て事を濟すべし、臣は之れにて永訣せんと。王嗚咽して去る。頼政院の駒殿に入り、従容自刃す。時に治永四年五月二十六日なり。年七十七。辭世に曰く、

埋木の花さくこともなかりしに

みのなるはてぞあはれなりける

宮本太平

神風連の一人、宮本篁十郎の父なり。自ら謂らく、我擧兵の事に参加せずと雖も、篁十郎は同志の領袖たり。果の其身に速び縲纆の恥を受くるは男子の深とせざる所なりと、自刃して死す。辭世に曰く、

夷船打もはらはで白雪の

ふり行老の身ぞあはれなる

水野十郎左衛門

名は成之、幕府麾下の士なり。父を攝津守成貞と云ふ。十郎左衛門磊落不羈、頗る活潑、遂に粗暴の

性と爲り、長ずるに及び同志の者を編制して白柄組と稱し、自ら其巨魁と爲る。亂暴猖獗至らざるなし。時に幡隨院長兵衛と云へる者あり、俠客を以て江戸に名あり。適々其の徒相搏ちて長兵衛の爲めに辱しめらる。十郎左衛門大に憤怒し、長兵衛を招き、強るに酒を以てして遂に之を誘殺す。長兵衛の徒唐犬權兵衛等之を遺憾とし、潛かに其の讐を報ひんことを謀る。十郎左衛門一夜其徒松平校三郎等と北里に至り、翌夜將に家に歸らんとす。權兵衛等早く已に之を知りて道に要し、刀を揮て奮撃す。接戦數十合既にして十郎左衛門其の自ら當るべからざるを度り、馬に鞭て奔逃す。此の事幕府に聞え、罪を論じて寛文四年三月二十七日松平阿州の邸に於て死を賜ふ。時に年三十五。坐して罪せらるゝ者五十七人。此に至りて武家の俠客跡を絶つと云ふ。辭世あり、

落すなら地獄の釜をつん抜て

あほう羅刹に損をさすべし

○ 氣のつまる娑婆はながく居たくな

地獄の底へところがへせん

水井精一

長州の人なり。元治元年薩の商人大谷仲之進、外國と貿易せんが爲め別府浦に泊す。精一之を聞き、同藩の賤吏山本誠一郎と共に憤慨して仲之進の首を斬り、貨物を満載せし船を燒棄し、其首を西本願寺門前の桑木に懸け、精一と屠腹して死す。辭世に曰く、

大宮のすみくらの山の花

八重九重に咲きそめにけり

箕浦元章

土佐藩士なり。通稱猪之吉、佛山と號す。明治元年二月、同藩歩兵小隊司令を以て泉州堺を警備す。同藩砲台の佛艦來組兵、禁を犯して恣に港内を測量し、終に上陸して暴行を逞ふするの報あり。元章等兵を率て出張し、之を鎮撫せんとす。佛兵反抗し、我兵旗を奪ふて逃ぐ。元章等其無禮を怒り、之を砲撃す。殺傷十數人。佛國公使大に怒り、我政府に迫りて償金を要求し、元章等を刑せんことを要む。是に於て死を賜ふ。實に同月二十三日なり。元章の刑に妙國寺に就くや、刀を抜き、臨監の佛人を睥睨し、聲を勵して曰く、夷人我割腹を見よと。佛人悚然仰ぎ見る能はず。元章衣襟を抜き、刀を腹中

に刺し、徐々引廻し了りて抽て之を三方の上に置くや、僧手首を撃つ。元章曰く靜にせよと。僧手驚き見れば肩先へ新込みたり。因て更に一刀、頸上加ふ。元章又曰く未だ死せずと。三たび刀を下して遂に絶す。面猶ほ生るが如し。時人惋惜せざるはなし。時に年二十五。元章幼にして聰敏、長じて岐嶷、音吐鏗の如し。性學を好み、其書を讀む一目五行並び下る。一讀する所の書能く記し、能く誦す。死に赴く途中、自若として吟嘯の聲を絶たすと云ふ。辭世の詩に曰く、

除却妖氛答國恩 決然豈可省人言

唯令大義傳千歲 一死元來不足論

三輪執齋

平安の儒者、名は希賢、字は善藏、執齋は其號なり。始め麻橋侯に仕へ、後去て京に歸り、尋て大阪に往き、又江戸に來る。數年の間居止を定めず、能く事體に通達す。其の言優遊餘味あり、能く聽く者をして心醉せしむ。嘗て近江の小川村に抵り、士民を集めて學を講す。四坐感泣し以て藤樹先生の稱生とす。和歌を中院内大臣に學び、其の謔奥に通ず。寛保四年正月廿五日卒す。年七十六。辭世に曰く、

止めおく魂のありかをこゝとみよ

骸は何處の土となるとも

三宅青軒

小説家なり。綠旋風、又雨柳子の號あり、本名彌彦と曰ふ。豪傑小説を得意と爲し、帝都文壇に盛名あり。書畫骨董の鑑定に長じ、晩年觀相學を研究して、一家の見を備ふ。赤貧洗ふが如きことあるも、超然として憂色なし。大正三年一月六日歿す。行年五十四。臨終に及んで口吟みたる辭世に曰く、
半開の梅全からず是非もなや

三宅治忠

三木釜山の城主別所長治の家老なり。長治の自刃するや、治忠介錯して曰く、君恩に浴するもの多しと雖も、忠臣なし、我殉死して龜鑑たらんと、腹を割て臍腸を出して逝けり。辭世に曰く、
君なくば浮身の命何かせん
残りて甲斐のある世なりとも

三村元親

修理亮と稱す。家親の長子なり。備中松山に居城す。浮田直家と兵を交へ、累年決せず、援を毛利氏に乞ふ。直家爾て安國寺惠瓊をして毛利氏に説かしむ。是に於て毛利氏直家を援く。元親遂に毛利氏に叛す。天正三年毛利輝元前家と兵を併せて松山に逼る。元親抗すべからざるを察し、自殺す。辭世に曰く、

人といふ名をかるほどや末の露

消えてぞかへるもとの雫に

鑊湯爐炭清涼殿 劔樹刀山遊戯城

三原紹心

天正十三年七月二十四日(一本には十四年七月二十四日)鳥津義久大兵を率て岩屋城を攻む。城將高橋紹運入道鎮種死守して之を防ぐ。矢盡き、刀折れ、軍大に敗る。紹運槽上に在り、呼て曰く、三原紹心健在なりやと。此時紹心は既に歐一首を楯の柱に書き残し戰死せり。其歌に曰く、

うつつ太刀の金のひきは久方の

天津空にもきこえあぐべき

明 言

禪僧なり。宣安と號す。肥前有馬の城主藤原晴純の子なり。早歳にして剃髮す。關東に至り勤行多年。總持寺に出世し、退て肥後に歸り、常樂寺に棲止す。永祿の歲、亂を避けて肥前に移り、後ち肥後の禪定寺を創す。金福、金生、廣勝の三寺皆其開山なり。天正庚辰廣勝寺に退老し、慶長丁酉七月三日寂す。遺偈あり。

言宣無盡攸 既九十餘秋 在權化門上 示威音路頭

右 田 隆 次

大内氏の家士なり。右京亮と稱す。陶晴賢の反するや、義隆に大寧寺に從ひ、軍敗れて義隆に殉死す。辭世に曰く、

末の露本の雫と諸共に

おくれ先立つ世の慣ひとて

親 鸞

本願寺の開祖なり。幼名若松丸、後ち鶴満丸と改む。日野有範の子なり。九歳にして自ら出でて慈鎮の弟子となり、台教を學び、後ち二十年去りて法然の弟子となり、緯空と號す。常に僧侶が肉食妻帯の自由を禁するを思ひ、六角堂觀音の夢に託して新に一向宗を作り、自ら藤原兼實の女を娶り、善心又善信と稱す。衆僧之を惡みて幕府に訴ふ。承元元年二月越後に流さる。居ること五年にして赦さる。是に於て教を國中に弘め、建立したる寺院頗る多し。弘長二年十一月二十八日寂す。年九十。廟堂を北大谷に建て、其影像を安置す。文永九年十一月號を本願寺と賜ふ。明治九年見眞大師と追證せらる。辭世に曰く、

こひしくば南無阿彌陀佛を稱ふべし

我も六字の中にこそあれ

白 菊 丸

相模江島宮の別當所の侍暨なり。遠州菊川驛に死せし中納言宗行の男、甚だ姿色あり、新田氏の侍女某之を慕ふ。白菊應ぜず、力めて之を避く。適々無棍の爲めに陥られて同島東岸に投じて死す。後世此

の處を呼びて稚兒が淵と曰ふ。侍女之を聞き、亦來りて死す。辭世に曰く、

白菊の忍ぶの里の人間はば

思ひ入江の島と答へよ

代田宗眞

茶人なり。五世四方庵と稱す。幼名を醜麿と云ふ。六歳の時、市村宗泉に従ひ、十五歳にして盆點を許され、十八歳の時、當時の名家吉田宗意の門に入り、習々齋の號を讓らる。而して藩主脇坂家も世々茶道を以て著る。藩主中務大輔安宅殊に宗眞を愛し、家傳の秘事を讓り、羽白庵又陸沈齋の號を與ふ。東久世伯等の招きに應じ、明治十年東京に業を開く。然して其主とする所は四方庵宗偏の直傳なるを以て、終に五世四方庵の號を襲ぐ。宗眞幼より學びし池坊の生花を以て廣く城下の子弟に教ふ。蓋し東京の地に於て池坊の招牌を掲げしは、實に宗眞を以て嚆矢とす。聲名愈揚り、門人の俊秀頗る多し。明治二十三年十月二十八日歿す。年六十四。其將きに歿せんとするや、辭世を筆して曰く、

山深み夜は長つきの月影も

やがて木の間に消えんとぞする

莊田琳庵

龜山侯の儒官なり。名は靜、字は子默、萬右衛門と稱す。武藏の人。少うして谷一齋に従て學ぶ。僅に弱冠にして其學已に通ず。丹波龜山侯聘して伴讀とす。寛文十年侯卒す。嗣君立ち、柄臣政を專にす。琳庵上書して之を擯げんことを請ひ、遂に諫に遇ひて獄中に囚はれ、延寶二年十月を以て棄市せらる。將に死に就かんとする時、南向して先侯の靈を拜し、東向して江戸の母を拜し、絶命の詩を朗吟し、神色自若たり。時に年三十六。其詩に曰く、

迥慕胡忠簡 英名萬古流

浩然同正氣 一笑隕儂頭

志賀理齋

名は忍、字は子堪、世々幕府に仕ふ。配は野口氏、夫妻琴瑟相調ひ、能く塵累を脱し、才德風雅相愧ぢす。理齋生れて奇偉、早く恬恃を失ひ、箠々孤立、窮に處し、約を守り、博覽宏通、恒に著述を以て樂みと爲す。文政中、内庭の筆吏と爲り、進で幕府世臣の班に昇る。野口氏將に死せんとするの夕、自ら俳詞を爲る。理齋之に和し、並に其意を叙す。洒然として達人大觀の風あり、之を永訣と爲す。年七

十八。理齋亦得に就く。昔其起つ可からざるを知り、親戚看護し、合掌神に禱る者あり。理齋之を聞て曰く、數に消長あり、數盡くれば自斃る、固より天の道なり、以て神を煩すこと勿れと、言訖て卒す。年七十九。天保十一年正月十二日なり。辭世の狂歌あり、

是までは有爲の都に長居して

今日こそ返れ無爲の故郷

又辭世なりと傳へらる歌に、

心とはどんなものにてあるやらん

こんなものにてあるやしぬらん

志村無倫

俳人なり。拾柴軒と號し、又雪堂と曰ふ。越後の人にして江戸に住し、北村季吟の門人たり。享保二年二月二十九日歿す。年六十三。辭世に曰く、

いざらば水より水へ雪の道

志道軒

江戸の奇人なり。名は榮山、姓は深井、京都東梅津の農、大作の子なり。幼にして豪爽不羈、奇偉偶儻の論を好み、十二歳にして祝髪し、義定と號す。名聲叢席の間に振ふ。之を久ふして、戒律の其身を桎梏し、衣蓋の其形を縲維するを厭ひ、酒色處中の大快活人たらんと欲し、遂に初衣に復す。然れども冠巾を具せずして、圓頂自若たり。是に於て、佛像經卷盡とく酒色の資と爲し、資財懸罄して、糊口の計なし。支離龍鐘殆ど餓死せんと欲すること數回、喟然として嘆じて曰く、我舌猶存す、而して斯極に至る、我は男子にあらざるなりと。遂に奮て起ち、乃ち觀音閣陰の一松樹下に於て、一高牀を設け、自ら其上に坐し、野史一卷を展じて、古今の治亂興廢と、武將の雄略とを講説し、且つ視聽を變やかさんと欲し、如意に代ふるに一陰室の長さ尺許りなるを造り、以て擊節譚話す。事多く恠誕、然れども數十語毎に、必ず一二語の微に入るものあり。文に出で、武に入り、百氏を網羅し、萬物を磅礴し、片語隻語、人口に膾炙す。漫罵、睥睨、哭泣、叱喝、聽く者堵の如く、絶倒、驚駭、心醉、唱嘆せざるはなし、乃ち數錢を與へて去る。得る所の孔方を以て、酒を沽ひ、鮮を求め、豪飲暴食、曉に至て輾む。後ち赤松子に従ひ學ばんと欲し、遍く名山に遊び、明和二年三月七日、八十三歳にして歿す。淺草寺内金剛院に葬る。辭世に曰く、

東よりぬつと生れた月日さへ

西へとんく我もとんく

紫檀樓古喜

狂歌師なり。通稱藤岡古喜。羅宇竹のすげ替へを以て樂とす。赤貧洗ふが如し。妻に一人の小兒あり。飢餓を訴ふれども意とせず。妻堪えずして離別を乞ふ。乃ち、風登り長き糸巻さて切らばさぞや子供の泣や明さんと詠じて離別の状に換ふ。友人等之を視み、金を贈して贈り、妻を復さしむ。天保三年十月八日歿す。辭世に曰く、

六道の辻駕籠に身はのりの道

念佛申して極樂へ行く

島津歳久

左衛門督と稱す。薩州宮の城を領す。幼字又六郎。晴義と號す。忠儀方正甚だ世に重ぜらる。文祿元年義久の臣梅北國兼等征韓出師の虛に乗じ、直に秀吉の行營を突き、以て前趾を雪がんとす。義久時に名諱屋に在り、人を遣はして諭せども肯せず。將に肥後より肥前に入らんとす。義久大に驚き、名諱屋より歸て之を伐つ。梅北等事を擧ぐるに當り、流言して曰く、將に歳久を推戴せんとすと。加之歳久の臣にして梅北の軍に屬せしもの多かりしを以て、秀吉疑て歳久隠に梅北等を扶け、我に敵すとなし、細川幽齋をして義久に使用して歳久の罪を證めしむ。歳久固より不臣の情なしと雖も、流言衝諷已に秀吉に信ぜらるゝを以て、止むを得ず歳久に諭して自裁せしむ。歳久即ち龍水の地に自殺す。義久首を幽齋に示し、後ち名諱屋に送る。秀吉實檢して聚樂につかはし屍橋に擧す。歳久の辭世に曰く、

晴義めが魂のありかを人間はば

いざ白雲の空と答へよ

信海

幼字は綱五郎。忍向の弟なり。安政五年兄忍向職を辭するに及び、成就院に移り、紫衣を許さる。尊攘の議論起り、海内騷擾たるや、信海慷慨悲憤、兄忍向と共に高野に至り、祈禱を爲し、又青蓮院の宮の爲に別に圓通寺に繕る事あり。幕吏之を聞き、捕へて獄に入る。江戸に送られ、訊鞫最も嚴なり。信海風せず。翌六年三月十八日病て獄中に死す。年三十九。辭世に曰く、

西の海東のそらとかはれども

心はおなじ君が代の爲

信忍

普恩寺前相摸入道信忍(藤原基時)は藤原長時の甥なり。假粧坂の戦に軍敗れて高時と俱に自殺す。信忍文藻あり。其子仲時の江州番馬にて屠腹せざるを聞き、寺堂の柱に血を以て辭世を書す。其句に曰く、

まてしばし死出の山邊の旅の道

同じく越えてうき世語らん

清水如水

狂歌師なり。東都の人。藤根堂と號す。寡黙にして酒を愛し、醉へば則ち氣勢を得て逍遙徘徊す。因て人名づけて藤根と云ふ。一日藥研堀の知人の許に行き、詠じて曰く、「見おるせば氣の藥なり藥研堀月は白湯にてかけは水にて。また替て漁父の辭の意を詠する歌に、世はすめり我獨のみ濁り酒酔て寝るにてさふらふの水」。享保十三年戊申正月三日剃頭湯浴大神宮を拜して長逝す。年七十一。辭世あり、

公事喧嘩地震神鳴り火事晦日

飢饉わづらひなき國へ行く

倭文子

歌人なり。伊勢國弓屋吉右衛門の女、幼にして文雅を好み、賀茂真淵の門に學ぶ。伶俐穎悟世人に超越す。且つ花顏婢姪、十五歳にして某侯の夫人に仕ふ。十八歳家に歸り、母と共に上州伊香保の温泉に行く。紀行あり、文體絶妙、人之を縣居門の三才女の一に置く。惜哉年二十、寶曆二年七月十八日夭す。終に臨み父母に先だつことを悲しみ詠じたる辭世に曰く、

ありの葉のこよなと人はいふめれど

しばしばかりや急ぐなるらん

師侃

字は愚直。諸方に歴參して見地穩健なり。寶覺禪師授くるに水紋の僧伽梨を以てす。永仁年間元に入り、諸宿老に調し、歸朝するに及び、洛の圓通寺に出世し、次に三聖寺に移る。嘗て偈を作りて曰く、「寂々山房春又和曾無人跡到柴扉屋頭自一溪水洗盡多年兩耳非」と。臨終に偈を書して曰く、

隨緣出生 隨緣入死 本來面目 青山綠水

士 顏

禪僧なり。卍字庵と號す。京都の人。南山の印訣を承けて諸方に漫遊す。筑前の承天寺を開堂し、又歸りて相の崇徳寺に移り。終りに東福寺に住す。到る處盛に法幢を揮ふ。延文元年七月七日莊嚴庵に化す。謝世の偈あり、

七十四年 不談禪道 更問如何 七轉八倒

士 德

高僧なり。友山と號す。俗稱藤原氏、山城の人なり。英俊離俗の志あり。東福寺の南山和尚に投じて僧と爲る。嘉曆三年元日に遊ぶ。時に年二十八。諸州を遍歴し、貞和元年歸朝す。年四十五。延文二年春精舎を山崎に建て、晩年に至り萬年庵に退居し、應安三年六月一日逝く。年七十。遺偈に曰く、

生是何物 死是何物 打破虚空 風生八極

士 曇

禪宗の高僧なり。乾峰と號す。筑前博多人。幼にして神異、十四歲承天寺に入り、南山に謁して難髮す。相州崇壽寺に出世し、洛の普門、安禪、東福、南禪、相州の圓覺、建長の諸刹に歴任し、文和四年詔ありて宮中に入り、後光嚴帝清涼殿に御して、士曇の演法を聽て大に悦ばせらる。性純誠にして、靈異甚だ多し。康安元年十二月十一日化す。年七十七。遺偈に曰く、

馬鳴出西天 龍樹入東海 聖箭已離弦 猶有返回勢

柴田勝家妻

信長の妹、名を小谷の方と云ふ。淺井長政に嫁して三女を生む。長政亡びて後、三女を以て再び勝家に離す。天正十一年夏四月秀吉越前に來りて勝家の城北莊を圍む。城將に陥らんとす。勝家將士と訣飲し、已に終りて殿中に入り、妻織田氏に謂て曰く、汝は信長の妹なり、秀吉獸心なるも先君の故を以て必ず汝を害せじ、汝速に去れ、予と俱に亡る勿れと。織田氏涙を流して曰く、妾淺井氏に於て當に死すべし、然れ共其節を失ふ、今豈に再びすべけんや、且つ年已に老たり、餘年惜むに足らず、唯三女少にして屯壘に遺ふ、竊に爲めに之を愁む、若し死を免れ得ば遺憾なしと。適々杜鵑啼て空中を過ぐ、織田氏慨然倭歌を誦じて曰く、

さらぬだにうちぬるほども夏の夜の

勝家返歌して曰く、

夢路をさそふ子規かな

夏の夜の夢路はかなき跡のなを

雲井にあげよ山杜鵑

中村文荷齋其席にあり、吟詠して曰く、

思ふどちうちつれつゝも行く道の

しるべや死出の山ほととぎす

是に於て文荷齋に命じ、三女を城外に出し、火を城に放ち、勝家夫妻及男女三十餘人自殺す。時に續田氏年三十七。

聖 岡

字は了譽。常陸の人。志摩守佐竹義光の裔なり。頂骨高く秀で、眼光炬の如し。五歳の時父陣中に死し、九歳にして薙髮す。才氣迸發老成の風あり。年二十一、口訣鈔を著す。永和四年下野往生寺に住し、始めて淨教を唱ふ。高弟聖武増上寺を開くに及び、迎へて之を養ふ。應永二年地を都下礪水に相し、庵

を結びて專修す。檀信蟻の如く集る。居ること六年、老病時至て沐浴新衣を着け、辭世の偈を作り、合掌して化す。其偈に曰く、

放行把住滿八十年即今端的識るや

識らずや日は東嶽に輝き月は西天

俊 苒

律宗の碩學なり。不可棄と號す。肥後飽田郡の人なり。賦性活潑にして浮華を事とせず、其の死に觀するや、鼓を撃ち衆を集めて訣を告げ、示して曰く、

諸惡莫作 衆皆奉行 自淨其意 是諸佛教

良久しくして曰く、

法界一念謂之空 一念法界謂之假

念界融絶謂之中 絶念了當超佛地

大衆感激して、嗚咽禮拜す。翌日の夜、偈を書して曰く、

生來偏學 經律論教 一時打拚 寂然無窘
書し畢りて合掌し、彌陀の像に向つて頭北、面西、右脇にして逝く。享年六十二。

正具

明庵禪師六世の孫なり。初め法觀寺に住す。法を聞くもの多し。後ち筑前に顯孝寺を建て、祖たり。臨終の偈に曰く、

離却殼漏 處々相見 馬腹鱧胎 日面月面

正念坊

文政の頃、京都の邊陲に僧あり、正念坊と曰ふ。念佛堂の庵主にして、無欲淡泊、念佛上手の評判高し。毎朝飯を焚たる時は、櫃に移して肩に乗せ、持佛堂の前、位牌ある所を、それ映げくと唱へつゝ廻り來りて後ち自ら之を喫す。更に佛具の備なし。一切の供物皆此の如く、必ず持佛堂に持ち行きて、佛前一週せざれば食はず。石地藏を持ち來りて遺物の塵と爲し、其鹽梅の善からんことを禱る等の奇行あり。辭世に曰く、

來て見ても來て見ても皆同じ事

こゝらで一寸死んで見ようか

正智

字は明堂、會津の人、伊豫長昌寺の住僧なり。延寶元年八月寂す。年三十九。遺偈に曰く、

昨夜須彌飛入海 天明踔跳太虛空

生々死々是何物 火裏優曇偏界紅

青天白日 白日青天 昨日恁麼 今日恁麼 古往今來 只如斯

十口

京師の俳人なり。氏は青木、意心齋と號す。名は貞徳、又佐徳と云ふ。後ち十口に改む。晩年清古閑人と云ふ。寛政三年七月二十一日歿す。年六十九。著書多し。辭世に曰く、

親類へ醫者がさやく袖しぐれ

十返舎一九

本名重田貞一、幼名を幾太郎と稱す。志野流の香を嗜み、黄熟香の十返に縁みて十返舎と號す。人と爲り磊落、職を辭して淨瑠璃作者と爲り、享保二年道中藤栗毛を著し、方言、土音、地理、風俗並に嬉笑怒罵を以て之を出版す。遠近争購、紙價を高くす。其書を著はすや、一室に坐して書籍雜陳、筆硯並列、杯盤枕衾と縱橫狼藉寸隙を餘さず、家人を禁じ、閑入を得ざらしむ。性偏急にして酒を好み、奇行頗る多し。天保二年八月七日病て歿す。年五十七。死に臨み遺命して死體の衣を解く勿れ、火葬にせよ、又辭世は火葬を奉らざれば、開く勿れと。門人其言の如くし、猛火炎々として衣に燃え移るや、光電一閃、白光爛々として進る、蓋し豫め花火を懷中せしなり。生前散々に世を弄びたるに飽かて、死後猶人を譏弄せる處餘蘊なし。其辭世に曰く、

此の世をばどりやお暇にせん香の

烟となりてはい左様なら

澁谷伊豫作

勤王の志士なり。諱は實行、常州下館藩士、文久三年中山侍従の小姓頭と爲り、天誅組の四天王と呼ばる。同年八月御親征の勅出づるや、其先鋒たらんとし、大和に義舉を興したるに、却て賊名を眞はせられ、其冤枉を辯明せんと欲し、津藩の陣に至り、藩主に面陳せんことを望みたるに、藩兵のためにはかられて縛せられ、本營に送致せらる。津藩他意なきを了し、幕府に許されんことを請ふも容れられず、翌年京都に送られ、二月十六日六角の獄舎に於て、死刑に處せらる。時に年二十有三。伊豫作業行方正にして氣象激烈、學を好み、經史に通じ、國政を論じ、武備を講じ、人を驚かせりと云ふ。八木成太郎は其變名なり。辭世に曰く、

よしあしは枯野の露ときえぬとも

魂は雲井に有明の月

秋色

江戸の俳人なり。名は阿秋、堀江町の菓子司大目某の妻にして、十三歳の時上野に櫻を觀て、觀音堂後の井上にある櫻に題して曰く、「井の端の櫻危し酒の酔」と。寛永寺の門主其の句を評して、秀逸拔群となし、屢々阿秋を召して俳諧を弄し、名を秋色と賜ふ。是より其櫻を名づけて秋色櫻と曰ふ。享保十年四月十九日歿す。年五十七。菊後亭と號す。寶井其角の門人なり。辭世に曰く、

みし夢の覺ても色のかきつばた

周 囁

高僧なり。京都相國寺に住す。東沼と號し、遊叟の法嗣なり。寛政中歿す。遺偈に曰く、

東沼行脚 北斗藏身 露千江月 花萬國春

周 及

字は愚中、岐阜の人、十三歳にして剃髮す。身長群を抜く、呼んで高砂彌といふ。曆應四年元に入り、至正十一年歸朝す、時に觀應二年なり。應永十五年足利義持侍臣に命じ、伏見藏光庵に居らしむ。遺偈競ひ來る。周及其の頰を厭ひ、紀州に逃る。義持紫衣を送り、天寧寺に歸り住せしむ。十六年八月二十五日化す。年八十七。遺偈に曰く、

出行得好日 快馬痛着鞭 萬回瞻其後 雲門豈爭先

周 樗

字は誠拙、宇和島の人なり。幼にして剃髮し、文化十三年暮命に依り圓覺寺に住す。時人稱して佛光祖師の再來と爲し、其德風に服膺す。文政三年六月二十八日歿す。年七十五。遺偈に曰く、

時來人未來 興來人將來 閻羅大王令嚴 明日打爲君行

秀 存

美濃の人、赤穂萬福寺の住職なり。十四歳高倉學寮に入り、研學多年、遂に一派の學頭と爲る。萬延五年閏三月二十八日學寮に寂す。年七十三。辭世に曰く、

今はとて何をかいはん南無阿彌陀

佛ははちすさゝげてぞまつ

深 勵

字は子弱、香月院と稱す。幼にして穎敏、長じて洛陽に出で勤學し、大谷派の講師職を奉す。越前永臨寺の壽天、其大器あるを視て法嗣と爲す。文化十四年七月八日歿す。年六十九。辭世に曰く、
おもはずも迷ひのはてはつきにけり

さしりの岸はけふやあすやと

篠田琴風

通稱小兵衛、江戸の人なり。初代琴風の門人にして、信濃屋と云ふ。死する年詳かならず。辭世の句に曰く、

一息にこの味ぞ春の水

寂 靈

丹波永澤寺の僧なり。豐後の人。幼にして慧敏、博く經史に渉り、俗塵を屑しとせず。年十七、州の大光寺に入り、落髮す。後諸方に遊歴し、印可を受け、衣法を授けらる。細川頼之永澤寺を創するに及び、其開山始祖と爲る。明徳二年寂す。年七十。遺偈に曰く、

算計甲子 滿七十年 轉身端的 兩脚踏天

尖戸昌明

十津川の義徒なり。通稱彌四郎、三州刈谷の人。性豁達にして細行を顧みず。窪田某に従ひ、山家流の兵法を學び、其蘊奥を極む。安政六年駿府に至りて兵學校を開き、居ること半年、後ち江戸に歸り、文久三年父の計に接し、歸りて喪を了し、京都に遊ぶ。是より更に信を家に通せず。既にして大和十津川の義舉に屬し、高取城を攻むるに及び、屢功あり。九月二十四日天の川の戦敗れ、鷺屋口に至りて大に彦根藩の兵と戦ひ、身を挺して敵中に入り、縱横奮撃して遂に敵の砲丸に中りて斃る。時に年三十一。明治三十一年七月從四位を贈らる。辭世に曰く、

今はただなにか思はん敵あまた

打ちて死にきと人の語らば

尖戸左馬之介

長藩の士なり。名は眞徹、始めの通稱を九郎兵衛と曰ふ。人と爲り重厚、軀幹肥大にして眇視、學を好み、和歌を善くす。文久二年、藩士永井雅樂藩の命を奉じて朝に奏し、且つ己れが意見書を上る。其意専ら開港に在り。志士憤激し、雅樂を刺さんとし、竊かに眞徹に告ぐ。眞徹曰く、其志を同うせずと雖も、彼も亦國家を思ふの精神なり、何ぞ説の異同を以て藩主の股肱を傷げんやと、皆其の言に服して止む。而して雅樂罪に處せらる。六月藩主京に入り、藩士と議す。其勤王に決するは尖戸の力多き

に居ると云ふ。三年中山忠光兵を大和に擧げ、敗れて大阪に來り、藩邸に潛まんとす。眞徹忠光等を藩士に裝し、長州に逃れしむ。藩士久坂玄瑞、國司信濃、益田右衛門介等、藩を脱して東上し、君側を清めんと欲して關下に戦ひ、敗れて大阪の藩邸に來る。眞徹痛恨之を授けて幕軍と戦はんとして成らず、遂に共に四下す。眞徹上書して曰く、輕舉暴動は某が與り知る所にあらず、然れども鎮撫の命を荷て爰に至る、老軀生きて國に益なし、願くは罪責を一身に歸して其餘を寬典に處せんことをと、罪を殿敷村の采地に待つ。後ち野山獄に下り、竹内正兵衛、中村九郎等と、十二月十二日命に依り自殺せり。明治廿四年四月正四位を贈らる。辭世に曰く、

我れならぬ人の手折をたどりつゝ、

たかねににほふ花を見るかな

○

朝夕に手になれしものとわかるゝや

うき世の夢の見果なるらん

性 潛

姓は奥村、名は龍溪、京都の人なり。十六歳普門寺に入り、後ち妙心寺に住す。萬治元年其師隱元を輔佐して黄檗山開立の事を司る。寛文十年八月二十二日大阪に於て大風暴雨起り人畜を流失す。弟子難を逃れんことを勸む。性潛曰く、死生命あり、何ぞ逃るゝことをせんやと、怒濤の爲めに奪ひ去らる。年六十九。性潛咄嗟の際、遺偈を作る曰く、

三十年前恨未消 幾回受屈爛藤條

今晨怒氣向人嘆 卻倒登江八月潮

性 善

黄檗山東林寺の僧なり。字は大眉、支那溫陵晉江の人。隱元に投じて薙髮す、時に年十七。寛文元年、隱元新に萬福寺を開く。性善監寺に轉じ、梵字を造るを督し、極力經營す。禪林の禮樂内外肅然たり。二年職を辭して庵を山中幽邃の處に結び、榜して東林庵と曰ふ。明年八月望夜庭際に晏坐し、明月の東天に昇るを見て、豁然として悟入し、身心世界打成一片なるを覺得し、偈を説て曰く、中秋月上夜沈々、一段靈光亘古今、無角石牛鼻孔露、從茲更不別追尋。是より一切の利名之を視こと淡如たり。延寶元年十月病む。諸徒に諭して曰く、吾火後骨灰を以て水葬し、指甲だも留むる勿れ。塔を造りて常住の地を占め、以て世間の財を費すは益なきなり。火滅烟飛吾が能事畢ると、十八日偈を書して筆を擲